

602-28



1200501530688

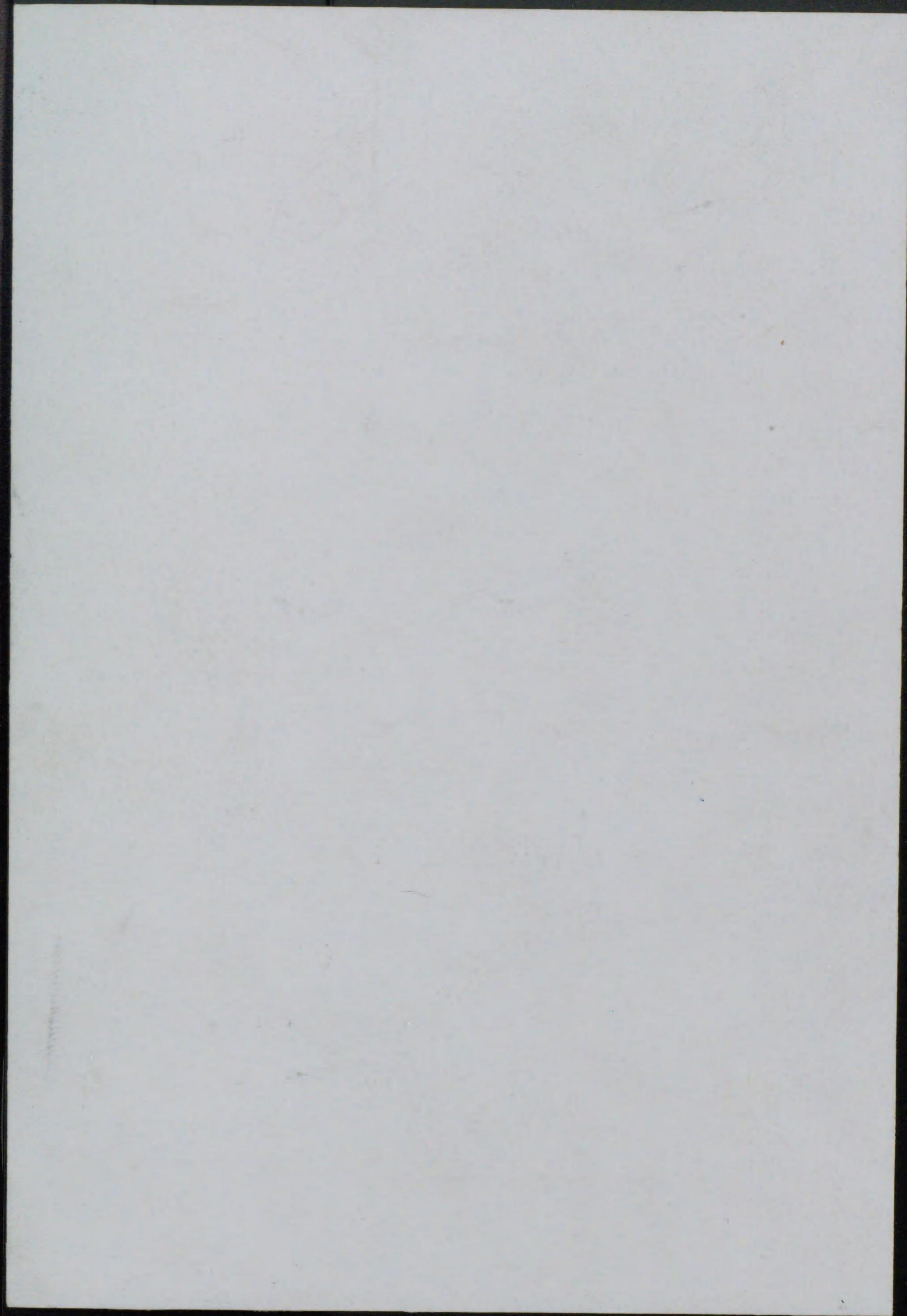
602  
28

事故本

P. 11-12

P. 32 東川

36.6.5



36.5.16

250





東京帝國大學文學部教授  
文學博士

村川堅固著

臘史

株式會社  
三省堂藏版



サモトラケ島出土の『ニケ』の像(三二六参照)

602-28

## 序

東西の文化を融合して新文化を創造し、以て世界文化の進歩に寄與せんとの大抱負をもつ日本國民は、一面に於て東洋文化の精華を闡明して、之が發揚を圖ると共に、他面西洋文化の眞髓を把握し、適宜之を取捨するの用意がなくてはならぬ。それがためには、決して現代文化の皮相を觀るに留まらず、遠くその淵源に溯り、深く其の基礎を究めて、始めて其の眞髓に觸るゝことができる。近時我國學徒の間にさうした自覺が次第に深まつて行くやうに見えるのは、學問の上からも、實際の上からも、共に慶すべきことである。

西洋文化の基礎がギリシヤ文化に在ることは言ふまでもない。ギリシヤ文化を究明することは、やがて西洋文化研究の第一歩でなければならぬ。而してギリシヤ文化はギリシヤ民族の發展に伴つて發展したのであるから、同民族發展史を離れて、ギリシヤ文化史は在り得ないわけである。然しギリシヤ民族發展以前に既に東方諸民族が政治的に文化的に發展したことを忘れてはならぬ。十九世紀以後の考古學的言語學的研究の急速な進歩は、天才的民族ギリシヤ人も、其の文化的發展の初

期に於て、それ等先進文化に負ふ所の決して尠少でなかつたことを教へた。従つてギリシヤ文化の研究は、亦それ等先進文化の研究を離れては成し遂げられないものとなつた。東方先進文化の研究とギリシヤ太古史のそれとは、相俟つてギリシヤ史に革命的變化を齎らしたと言つても過言ではあるまい。

唯、太古期ばかりではなく、ギリシヤ史の中古期以後に關しても、最近數十年間に於ける考古學的文献學的研究の結果は、以前に閑却せられた分野をどれ程開拓し、以前に誤まれた點をどれ程訂正したことか。従つてそれ等研究の成果を漏れなく綜合することは、容易の業ではないが、せめては、其の主要なる點だけでも網羅したギリシヤ史でなければ、それは甚しき時代後れのものである。

然るに我が國には從來ギリシヤ史を西洋の通史の一部として取扱つたものは在つても、専らギリシヤ史の全發展を主題とせる成書の見るに足るものはなく、却つて哲學とか、戯曲とか、彫刻とかいふ文化の特殊な方面のみを取扱つた書が既に現はれて居る。かくしてそれ等各方面の文化を發揮せしめた背景の全發展を描くものゝないことは、確かに我が學界の缺陷と謂ふべきである。

かうした感想が、私をして三省堂の需めに應じて、筆を執らせて本書となつた。與へられた紙數の中で、ギリシヤ史全般に涉つて委曲を盡すことは固より不可能であつた。それでも最近までの最も主要な研究の成果は、大體參照し得たかと思ふ。又ヘレネスと先住民、先進文化との關係、古代文化の最高峰をなす五世紀文化の背景たる都市國家人の經濟生活、都市國家の崩壊とヘレニズムの進展に對する社會史的考察等には稍、多くの頁を割いた。たゞ叙述すべき方面と事項とが多くて、紙數が限られてゐる關係上、各事項の叙述は自然簡單にし、行文は達意に留めなければならなかつた。眞摯なる學徒のヘラス研究は日々に興りつゝある。私は久しからざる内に本書が全く存在の意義を失ふべき日の來ることを望むのである。然し少くとも今日の日本には、本書が多少とも、存在價値をもつことを認められるれば私はそれで満足する。

昭和六年五月下旬

著者

### 附記

(1) 固有名詞の表し方は史學會調査の外國地名名稱呼一覽の標準に據り、我國に慣用せるものは之に従ひ、そ

の他は大體ラテン語形を採つて、ギリシヤ固有名詞をも表はしておいた。

(2) 一切の所説に出典を附することはできなかつたが、異説の存する場合、又は詳説を省いた場合には、参考書や参考論文を註に掲げておいた。中でも邦文の著作で讀者の入手しやすいものは、なるべく多く載せておいた。

# 希臘史

## 目次

### 第一章 ギリシヤ史の太古時代

#### 第一節 原住民

原住民に關する諸傳説——ペラスギの正體——カリヤ人——『小アジャ人』

#### 第二節 ギリシヤ人の南下

ギリシヤ人南下の順序——ギリシヤ各民族と先住民族との關係——先住民族の文化

——新來民族間の文化の差異——ギリシヤの三種族——ギリシヤ方言の分布——原

始的政治組織——『血の復讐』——各部落の内部構成——原始時代の宗教觀念——物

神崇拜——靈の崇拜

### 第二章 ミケネ時代

の第一節 東方文化の影響

ミケネ時代——ボガズケイ發掘の結果——ハッチ族の文化——小アジアの宗教——『エーゲ文明』——クレタ人の大活躍——クノッススの宮殿——クレタの藝術——クレタの文字——クレタの宗教——蛇をつかめる女神

第二節 ミケネ時代のヘラスの情勢

ミケネ及びチリンスの舊宮殿——ミケネ王權の伸張と巨大なる造營物——ミケネ時代の政治情態——アルゴリス地方の不統一情態——ボエオチャ地方の遺跡——イリオン(トロヤ)——當時の武器——當時の宗教——ミケネ文化の根本精神

第三章 エーゲ海方面への發展とドーリヤ人の南下

第一節 エーゲ海方面への發展

海外發展の端緒——アケーヤ人の小アジアへの進出——ハッチ王國の崩壞——オリスの起原——イオニヤへの移住——イオニヤ人

第二節 ドーリヤ人の南下

イリリヤ人とフリギヤ人との移動——其餘波的移動——ドーリヤ人南下の事情——ペロッホの説——其の批評——ドーリヤ人と先住民族——ドーリヤ人の海外進出

第四章 ギリシヤ史の「中古的」時代

第一節 時代の概観

ドーリヤ人移住後のギリシヤと中古のヨトロッパ——文化の低下とギリシヤ精神の發育

第二節 都市の發生と經濟生活

都市の發生と其の意義——小アジアに於ける最初の發生——ヘラス本土に於ける發生——二種の都市發生形式——都市國家の發生——貴族階級の發生——經濟情態の逆轉

第三節 「中古的」時代の文化

造形美術——幾何學的文様——東方からの影響——文字使用の開始——ギリシヤ文字の統一——叙事詩の發生——ホメルスに關する諸説——『イリヤス』と『オデッセ



イ——ホメルスの中古的要素——ヘシオツス——『神統記』——『エルガ』——ギリシヤ諸神の性質——神像と神殿の創始——競技會の盛行

第五章 過渡時代

第一節 東方諸國の興亡

フェニキヤ人の活躍——アッシリヤ人の世界帝國建設——エジプトの獨立回復——メヂヤの興起——四國對立——リヂヤとギリシヤの植民市——ペルシヤの興起——ダリウスの世界帝國——其の統治組織

第二節 ギリシヤ人の第二次海外大發展

第二次海外大發展の特色——經濟的發展——新植民市の性質——植民に活躍せし諸市——黒海方面の植民市——エーゲ海北岸方面の植民市——エジプトに於けるヘレネス——キレナイカ——西地中海方面——南イタリヤの農業植民地——ギリシヤ人の散布と民族的自覺——知識の開發

第三節 政治的社會的大變動

王政より貴族政への過渡——奴隸使役の風——貨幣の流通——平民の擡頭——成文

第四節 過渡期の文化

法の制定——僭主(チュランノス)の出現——僭主の人物——小アジア方面の名僭主——ヘラス本土の僭主——シシリーの僭主——アテネの政治的變遷——王政及び貴族政治——キロンの失敗——ドラコンの法律——ソロンの出世——其の農民救済——市民の四階級制定——各階級の義務と權利——ソロン法律の弘布——ソロンの改革に對する不平——アッチカの三黨——ビシストラツス僭主となる——其の海外發展策——其の内政——ビシストラツスの二子——アテネ僭主政治の末路——クリステネスの改革——フィレの改造——五百人會議とストラテゴス——オストラキスモス創始——スパルタの建國——其の軍國主義——其の政治組織——スパルタ人の指導精神と日常生活——スパルタの國境擴張——第一回メッセニヤ戰役——アルゴスの隆盛——第二回メッセニヤ戰役——スパルタに於けるフィレの改定——兵制改革——スパルタの社會的變化——ペロポネソスの覇權掌握

過渡期文化の特色——抒情詩の發生——女流詩人サッフオの秘法——オルフェウス教——神との合一——神人の隔りの研究の創始——央學の萌芽——古拙時代——神殿の諸葉

ヤ式の建築——其の流行地方——彫刻——其の二大系  
ネスス派——エギナの遺物——繪畫——アテネの陶器

第六章 ベルシヤ戰役……………

第一節 イオニヤの叛亂……………

叛亂の政治的原因——其の經濟的原因——アリストタゴラスの舉兵——叛亂の經過——いはゆる第一回ベルシヤ戰役

第二節 マラトンの戰……………

いはゆる第二回ベルシヤ戰役——ミルチャダスの作戰計畫——マラトンの戰——ペルシヤ軍の歸國

第三節 クセルクセスの遠征……………

いはゆる第三回ベルシヤ戰役の意義——テミストクレスの海軍擴張策——アリスチダスの反對——アテネ、スパルタ等の對ベルシヤ同盟——ペルシヤ大軍の進發——スパルタの希望——テルモビレーの戰——サラミスの海戰——プラテーエーの戰

第七章 アツチカ帝國と民主政治の流行……………

第一節 デルス同盟の成立とアテネの活躍……………

『五十年期』の概觀——デルス同盟の成立——テミストクレスの聲望と其の放逐——キモンの活躍と其の追放——アテネ政治の民主化——いはゆる第一回ペロポネッス戰役——エジプト遠征軍の敗滅——ペリクレスの出世——ベルシヤ及びスパルタとの平和成立

第二節 ペリクレス時代……………

ペリクレスの政治——アテネの財政——同盟市の献金——アテネの司法權獨占——アテネの經濟的壓迫——アテネに對する離叛の企

第三節 民主政治の流行……………

民主政治流行の原因——デルス同盟諸市の民主化——スパルタに於けるヘロットの一揆——其の他のヘラス本土諸市——キレナイカの事情——シシリーに於ける民主主義の流行——南イタリヤ地方——南イタリヤ、シシリーの原住民の一揆

第八章 五世紀の經濟生活

農業——奴隸による經營——商工業——工業經營の組織——ギリシヤ工業に於ける資本主義の問題——奴隸の價格——商業——冒險貸付——商業に關する國家的統制

一七三

第九章 ギリシヤ文化の高潮期

一八六

第一節 文運の隆盛

一八六

『古典時代』の現出——五世紀文化のアテネ的色彩——悲劇の起原——三大悲劇家——エスキルス——ソフォクレス——エウリピデス——喜劇——アリストファネス——散文——史家ヘロドツス——ツキヂデス——各種の實用的著作——醫學——數學——自然哲學者の諸説——ソフィストの近代的教育——雄辯術——プロタゴラス——宗教の動搖——ソフィストの敵ソクラテス

第二節 造形美術の進歩

二〇〇

ベルシヤ戰役後の美術——フィヂヤス——ミロン——ポリグノツス——パルテノン——フィヂヤスの作風——アクロポリスの門——エレクテイウム——アクロポリス

丘下の諸建築——コリント式建築——繪畫の進歩

第十章 ペロポネスス戰役

二〇六

第一節 アルキダムス戰役とニキヤスの和約

二〇六

戰役の遠因——其の近因——アルキダムス戰役——ペリクレスの作戰計畫——アテネのペスト——ペリクレスの死——ビルスビリスの封鎖——平和談判決裂——ブラシダスの活躍——ニキヤスの和約

第二節 シンリー遠征とアッチカ帝國の末路

二二三

平和條約不履行——アルキビヤダスの出現——平和再び破る——シンリー遠征の動機——瀆神事件——遠征隊の出發——アルキビヤダスに對する判決——シラクサ攻撃の失敗——遠征隊の末路——スパルタのデケレヤ占領——アテネ同盟諸市の離反——スパルタとベルシヤとの結托——アテネ政治の寡頭主義化——寡頭政治の行詰——アルキビヤダスの歸國——ベルシヤのスパルタ援助——アルキビヤダスの末路——アテネ最後の奮闘——エゴスポタミの戰——アテネの圍城——アッチカ帝國の崩壞

第十一章 四世紀の政治と社會

二二五

目次

第一節 時代の概観

都市國家生活の下降——ヘレニズムの準備期

二三五

第二節 スパルタの覇權

二三七

スパルタの寡頭主義強制——アテネの民主主義復興——アナバシス——『一萬の退却』——スパルタとペルシヤとの乖離——コリント戰役——『大王の和約』——スパルタの條約遵奉——シラクサのディオニシウス一世

第三節 第二回アッチカ海上同盟とテーベの覇權

二三四

第二回アッチカ海上同盟——アテネの經濟的回復——テーベの興起——レウクトラの戰——斜線陣——中部ギリシヤ及びペロポネスス經略——フェレーのヤソン——テーベとペルシヤ——テーベの覇權失墜

第四節 四世紀の社會、經濟

二四二

窮民の増加、社會的危險の増加——無産者發生の原因——傭兵使用の流行——金融業——商工業の隆盛、物價の騰貴

第五節 マケドニヤの興起

二四八

マケドニヤ人の民族的所屬——急激なマケドニヤ發展の原因——海岸への進出——ギリシヤの神聖戰役——マケドニヤのテッサリヤ占領——カルキヂケ地方占領——デモステネスの反マケドニヤ演說——フィロクラテスの和約——フィリップのギリシヤに於ける勢力——デモステネスとエスキネス——イソクラテスの大ロゴス——イソクラテスのペルシヤ討伐思想——フィリップの對アテネ眞意——アテネ、マケドニヤ間平和の破裂——フィリップの南下——ケーロネヤの會戰——コリント會議——ギリシヤの覇權マケドニヤに歸す——ペルシヤ討伐の決議——フィリップの暗殺

第十二章 四世紀の文化

二六四

ソクラテス門下の三派——プラトンの學說と著書——アリストートル——研究方法——上プラトンとの差——修辭學——歴史學——クセノフォン——其の他の史家——純文學の不振——四世紀の著名建築——マウソレウム——彫刻に於ける人間味——繪畫

第十三章 アレクサンドル大王

二七五

第一節 ペルシヤ征服

二七五

目次

青年新王アレクサンドルの材器と大志——對ギリシヤ霸權繼承——ギリシヤ獨立運動鎮壓——ペルシヤの國情——ギリシヤ文化の東漸——ペルシヤ遠征軍の進發——グラニクス河畔の戰——イッススの戰——地中海沿岸南下——エジプトの大王歡迎——アジャヤ内地への轉向——アルベラの戰——ペルシヤ發祥地への進入——ギリシヤ義勇兵放還

第二節 インド遠征……………二八三

イラン人の反抗鎮壓——大王の重臣處刑——大王の専制君主化——インド遠征の動機——大王の西歸——海路の探檢——バビロンへ凱旋

第三節 ヘラスの事情、アレクサンドルの死……………二八九

大王東征後のヘラス——ハルパルスに絡むアテネの疑獄——デモステネスの逃亡——結婚による融合政策——大王の神格承認要求——大王の計畫——殞落——大王の性格——大王の事業の世界史的意義

第十四章 ヘレニズム時代……………二九四

第一節 ヘレニズム諸國の情勢と國際關係……………二九四

ギリシヤ史の延長——ヘレニズムに於けるギリシヤ要素

第二節 ヘレニズム時代の政治と經濟……………二九五

ヂヤドコイ戰役——イプススの戰と其の後の形勢——ガラチャ人の移動——ギリシヤ本土の形勢——エトリヤ、アケーヤ兩同盟——東方新世界の開放——東方の繁榮とヘラスの衰頹——マケドニアの啓蒙的専制主義——エジプトの官僚政治——プトレメーウス家の巨富——セレウクス家の政策——新都市建設——土人の反抗——ローマのマグナ・グレキヤ征服——エジプトの情勢——シリヤ王國の分解——ヘラスの情勢——ローマの勢力發展——シラクサの滅亡——ローマのバルカンへの進出——第一回マケドニア戰役——第二回マケドニア戰役——シリヤ王國の衰微——第三回マケドニア戰役——ローマ政策の轉換——マケドニア、ギリシヤのローマ服屬——ミトラダテス戰役——シリヤ王國の衰亡——クレオパトラ

第三節 ヘレニズムの文化……………三三三

ヘレニズムの特徴——エジプト及びシリヤとギリシヤ文化——ギリシヤ文化の東方傳播——西方のヘレニズム——共通語(コイネ)の發生——アッチカ風の勝利——科

目次

學の隆盛——アレクサンドリヤの學問研究機關——數學——天文學——地理學——  
 動物學——醫學——精神科學——史傳類——經濟學——純文學——哲學の二新派——  
 宗教の變遷——サラピスの崇拜——其の他の東方諸神の流行——彫刻の新傾向——  
 現存せる逸品——ペルガムムの美術——當代繪畫の面影——建築——ヒッポダ  
 ムス式都市

目次終



希臘史

村川堅固著

第一章 ギリシヤ史の太古時代

第一節 原住民

原住民に關する諸傳説

紀元前四世紀のアテネの雄辯家イソクラテス (Isocrates) は、彼の著名な演説パネギリクス (Panegyricus) の中に於て (24—25)、「アテネ人だけはギリシヤ人中で、アッチカ (Attica) の地の生え抜き (Autochthones) であつて、スパルタ人のやうに他から移住した者ではない」と誇つて居る。是は當時のアッチカ住民に行はれた自尊的信仰であつたとしても、其の眞ならざることは論ずるまでもない。彼等も亦ドーリヤ人其の他のギリシヤ人と

第一節 原住民

ペラスギの正體

同じく、インドゲルマニヤ人の一派として、其の原住地から南下し來つたのであつた。然し古典は又ペラスギ (Pelasgi) といふ民族が、ギリシヤの原住民であつて、テッサリヤ・アッチカ・アルカヂヤ・クレタ島等各地に住して居たと傳へて居る。ヘロドツスに據ると、アテネのアクロポリスの古城壁を作つたのは彼等であつた (Herod. VI. § 137. 138)。此の説話が後世の捏造に過ぎないこと、並びにペラスギの正體に就いては、マイヤト (Eduard Meyer) が鮮かな研究を出し、其の説が大體認められて居る。(2) 是によれば、ペラスギはギリシヤ民族の一派であつて、元來テッサリヤの一部、後世『ペラスギのアルゴス』(Argos) と呼ばれる地方に居つたもので、北方ギリシヤ諸族と關係があり、又彼等の名がドドナ (Dodona) のゼウス (Zeus) と結びついて居ることはエピルス (Epirus) 人との關係を示すものである。彼等の住地は豊沃であつた爲、後世のテッサリヤ人の羨望する所となり、遂にテッサリヤ人の侵入に依り、彼等は其の農奴の地位に下つてしまつた。このペラスギが、アッチカに持ち來されたのは、全くヘカテウス (Hecataeus) 一派のロゴグラフィ (Logographoi) の作り事である。アテネのアクロポリスの古城壁が、偶々

ペラルギロン (Pelargikon) 一鶴の巢の義とと呼ばれて居たが、此の名稱の由來が不明であつた。そこでヘカテウス等がペラスギを借り來つて、S と R の差を無視して通俗語原學的に之を説明し、彼等を其の築造者としたのである。アッチカ以外の各地に見ゆるペラスギの名も結局ヘシオツス (Hesiodus) 以下の捏造したものといふのである。

そこで吾々はペラスギを直ちにギリシヤ人の先住民と考へる事には躊躇する。然し同じヘロドツスはギリシヤ本土に就いてではないが、東の多島海の島々に昔時カリヤ人 (Carians) があり、ミノス (Minos) といふ王の支配に屬し、レレゲス (Leleges) と呼ばれ、其の頃最も聲望ある民族であつたことや、彼等の楯や冑に就いての改良を後のギリシヤ人が模倣したことや、ミノス王より遙に後に、彼等はイオニヤ人 (Ionians) やドーリア人 (Dorians) に逐はれて小アジアに移り、後世カリヤと言はるゝ地に定住するに至つた次第を述べて居る (Herod. I § 171)。ツキヂデス (Thucydides) も亦島々にカリヤ人の住んだことを、彼のペロポネスス戦史の序説に説いて居る (I. § 8. 1)。

此のカリヤ人並びにレレゲスこそは今日の學界に於て、かの疑はしいペラスギに代

カリヤ人

カリヤ人  
ペラスギ

## 『小アジア人』

つて、ギリシヤ人の先住民と確定せらるゝに至つた民族である。此の説は最初クレッチメル (Kretschmer) 等の言語學的研究に依り打ち立てられ、のち人類學的研究が亦之を支持するやうになり、現在では殆ど定説となつて居る。クレッチメルはカリヤ人・リキヤ人 (Lycians)・リヂヤ人 (Lydiars)・カパドキヤ人 (Cappadocians)・ピシヂヤ人 (Pisidians)・リカオニヤ人 (Lycionians)・イサウリヤ人 (Isaurians) 等が言語學上、インドゲルマン族にもセム族にも屬しない一族を爲すことを闡明し、之を便宜上、『小アジア人』(Kleinasiaten) と呼んだ。<sup>(4)</sup> 彼等は人類學的にも一の群を爲し、其の特色は非常な短頭と、鈎形を爲せる鼻に存することが明になつた。かのヘロドツスやツキヂデスの述べるカリヤ人やレレガスも亦、此の一派なのであるが、彼等が東方の多島海の島々のみならず、ギリシヤの本土にも嘗て住んで居たと言ふ重要な知識は、矢張りクレッチメルに負ふ所である。彼はギリシヤ本土に見ゆる多數の非ギリシヤ語的な地名、山名や河名が、殊に *nth=ntios* (例へば *Tiryns, Korinthos*) 及び *=assos =essos (=etos)* (*Parnassos, Brilessos, Hymnetos*) に終る形が、小アジア語に類似を持つことから、此の鮮かなる結論を引き出したのである。

- (1) ギリシヤ人は自分の國土をヘラス (Hellas) 自身をヘレン人 (Hellen) (クレネス) と呼んだ。ヘラスとは元來テッサリア南部の名であつたが (例へば *Ilias II, 684, IX, 395*) デルフィの宗教同盟の發展とともに、ギリシヤ全土をさす名となり、其の住民全部がヘレネスと呼ばれるに至つたらしい。ギリシヤ (Greece) と言ふのは元來ポエオチヤのタナグラ (Tanagra) の町が *Graia* と呼ばれ、此の町が *Chalcis* (七九頁) と俱にイタリア方面に植民しクメ (Cumae) を建設した結果、ラテン人に *Graia* の名が早くから知られ、是を *Graeci* とラテン化してギリシヤ人全體の名としたのに由來する。

- (2) Meyer : *Forschungen zur alten Geschichte* 1892. Bd 1. S. 1. ff.  
 (3) Meyer は後(古代史三版卷一、二部七六七頁以下) 前説を却けヘラスギをテッサリアにありし先住民の一派とし、Beloch (*Griechische Geschichte* 1<sup>o</sup> II. S. 48 ff.) は矢張り是を侵入者と見て居る。  
 (4) Paul Kretschmer : *Einleitung in die Geschichte der griechischen Sprache*. Göttingen, 1896. S. 289 ff.  
 (5) *ibid.* S. 401 ff.

## 第二節 ギリシヤ人の南下

此の先住民の世界に、後にかの高級な文化を發展せしむ可き運命を擔つてギリシヤ人



(ヘレネス)の祖先がバルカン半島を南下して来たのは、大體紀元前三千年紀(The Third Millennium)の終り頃と推定出来る。彼等は言ふ迄もなくインドゲルマニヤ派の言語族に屬し、イタリヤ人・ゲルマニヤ人・インド人・スラヴ人等と近親である。彼等に次いで他のインドゲルマニヤ族が南下して来た。先づトラキヤ族(Thracii)がヘレネス(ギリシヤ人)を南方に逐ひつゝ、バルカン半島を横ぎり、西はアドリヤ海岸から、東は黒海岸まで擴がつた。之に次いでイリリヤ族(Illirii)―後のアルバニヤ人(Albanians)の祖―が紀元前十三世紀頃南下して、トラキヤ族をバルカン半島の西岸から東方に驅逐したのである。是等の民族がこの早き時代に於て、どれだけ異つた素質を有して居たかは容易に知る可くもない。たゞ彼等の移動後落着いた場處が、ヘレネスのそのやうに、東方先進民族―『小アジア人』、エジプト人、遠くはバビロニヤ、兩河地方の民族―との交通接觸に便であつたか、イリリヤ、トラキヤ兩族のそのやうに、是等の文化圏に比較的遠かつたかは彼等の素質開發の上に、大きな差異を生ぜしめたことと思ふ。否、エジプト、バビロニヤを持ち出す迄もない。先に述べたヘラス本土の先住民たるカリヤ人、レレガス等が

新來未開のヘレネス(ギリシヤ人)にとつて開發への力強い手引きとなつて居るのである。何故ならば、ギリシヤ人は是等先住民を根絶やしにするとか又は驅逐してしまふことはしないで、永い交戦を経た後、被征服民として存続せしめたと考へられるからである。四千年の後、ドイツの碩學をして、其の存在を明るみに出させる手掛りとなつた。かの小アジア語系の地名山名の存続と、侵入者による其の採用とが、兩民族の間に、永く平和的關係の存したことを雄辯に物語つて居る。かくて處々に征服者、被征服者の混合も生じ、その間永き定住生活に由つて、幾分高き文化に達して居たカリヤ人は、生活の各方面に於て、新來者を開發するに與つて力強かつたと思ふ。<sup>(1)</sup>植物や動物の名の中に純粹ギリシヤ語でないのが澤山存在することも、此の邊の消息を物語るのである。

當時の先住民の文化も、北方と南方とでは大分差異があり、北方乃至中部ヘラスは―例へばボエオチヤ(Boeotia)のオルコメヌス(Orchomenus)の發掘が示したやうに、まだ石器文化が支配して居たが、南方では東方との交通により既に銅器、青銅器の使用を知つて居たらしい。家屋は中心に爐を有し石を圓形に積み、粘土の丸屋根を戴せたもので、

*Ionians  
Dorians  
Aeolians*

ギリシヤの三  
種族

*Ionians  
Dorians  
Aeolians*

新來民族間の  
文化の差異

第一章 ギリシヤ史の太古時代

八

稀に極めて不規則な矩形のものもあつた。侵入者ヘレネス(ギリシヤ人)は、かの北方ヨ  
ーロッパに一般に弘まつて居た、中心に爐を有し、既に傾斜せる破風をそなへた矩形の家  
屋を有つて來た。是は後に發展してメガロン(Megaron)式となつたものである。この家  
屋形式と爐—それは北方の寒冷な氣候の爲に必要なものであつた—とは、ヘレネスが温  
暖な地方に移つて後も之を棄てなかつたのである。彼等は先住民の圓形家屋の形式を、  
二千年紀頃の圓頂式墳墓(Kuppelgräber)や、後世のトロイ(Tholoi)式建築だけに採用し  
て居る。

先住民の文化が、南と北とで差異があつたやうに、新來者も南と北、又東と西とで頗  
る事情を異にしたらしい。ヘレネスがバルカン半島の東南端、海岸線が最も屈曲し、港  
灣多く、氣候が温暖で、風光が明媚で、剩へ東方の文化を受入れるに甚だ都合のよい地  
に來て、はじめて吾人の考ふる「ヘレネス」と成つたと言ふことは、何人も承認する所  
であらう。(讀者は北にとどまつたイリリヤ人が、インドゲルマニヤ人中最も文化的活  
動のなかつた事を想起せられよ。)しかしこの地形の複雑、山脈の重疊による分立主義

(Particularism)が、一方ヘレネスにいかにも禍せるかは後章に於て明かになるであらう。

(1) ヘロドツスはカリヤ人が初めて胄に飾毛を用ひ、又楯に意匠を施し取手を附け、ヘレネスが  
之を模倣したと言ふ(Herod. I § 171.)是等の過程は當然武器以外にも行はれたと考へられる。

ギリシヤ民族は通常イオニヤ人(Ionians)ドーリヤ人(Dorians)エオリヤ人(Aeolians)  
の三種族から成ると説かれて居る。然し吾々が今扱つて居る時代には、この三者の中、  
ドーリヤ人は、遙か北方に留まつてゐて、まだ歴史の舞臺に現れて居ない。なほイオニ  
ヤ人、エオリヤ人といふ名前も、當時はまだ存しない。是は彼等が二千年紀の終り頃か  
ら、海を渡つて小アジア沿岸に移つた後、はじめて起つた稱呼であらうと考へられる。  
ホメルス(Homerus)には、かのトロイ(Troy)を攻むるヘレネスは『銅の衣を着たるアケ  
ーヤ人』、『善き脛當てしたるアケーヤ人』と呼ばれて居るので、吾々はエオリヤ人の代  
りに、アケーヤ人の稱呼を用ゐよう。又實際この名前が當時廣くヘレネスの稱として用  
ゐられたらしいことは、近年の考古的研究により明かになつた。(1)

後世のギリシヤの方言分布の状態から逆推すると、イオニヤ、アケーヤ兩種族の中、

第二節 ギリシヤ人の南下

九

イオニヤ人の祖先が先づ徐々に南下して來、アケーヤ人は之に後れて來、諸處で先着のイオニヤ人を逐ひ、數百年の複雑な移住—その間には種族の混合も起つたらう—の後、<sup>(2)</sup>イオニヤ人は主としてアッチカ及びエウボエヤ島(Euboea)に、アケーヤ族はテッサリヤ及びペロポネسس半島全土に落着いたらしい。

(1) エジプトのラムセス(Rameses)王の子であるメルネプター(Merneptah)王は1221 B. C. に「海の國の人々」のナイルのデルタに侵入したのを撃退した。この侵入者の中に Akaiwasch とあるのはアケーヤ人即ちヘレネスであると考へられ、なほ近年ボガツケイ(Boghazköi)のハッチの王宮より出た文書に Achehijava と讀まれるのは「アケーヤ」を指すと Emil Forrer は説く。尤も是等は未だ定説とは稱し難い。

(2) 多数の意義不明の地名が、ヘラスの諸處に見えるのは、此の事情を示すものだらう。たとへば Kephisos の名がボエオチャ、アッチカ、アルゴスに見えるの類である。

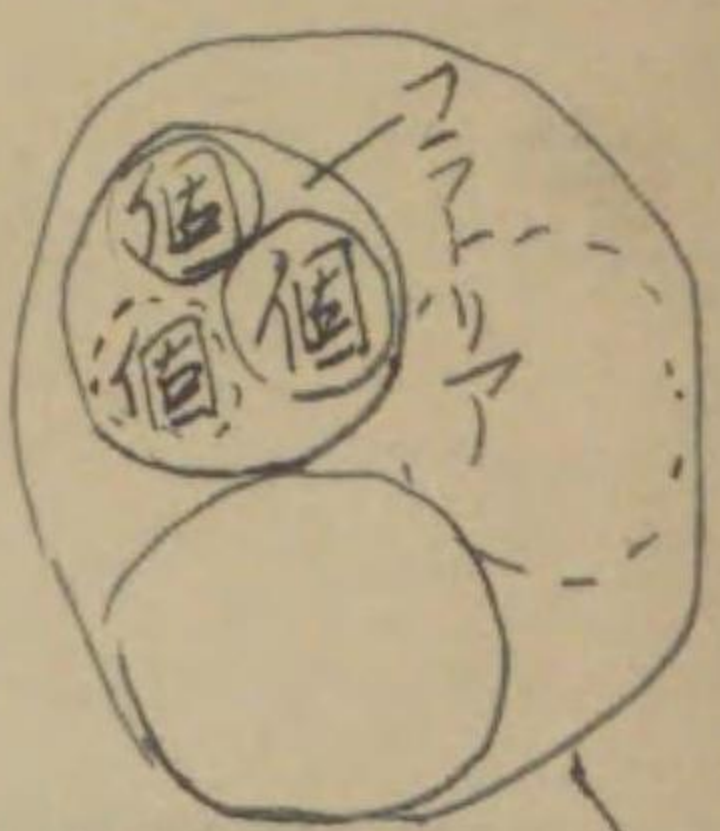
上に言及した方言の事について簡単にふれて置かう。三つの種族區別の標準をなす方言がエオリヤ、イオニヤ、ドーリヤ語の三者に分たれることは言ふ迄もない。この中エオリヤ語はテッサリヤ、ボエオチャ、レスブスの方言であり、アルカヂヤ、キプルスと言語も明かに之と關係がある。アッチカ、エウボエヤ、及び小アジアのイオニヤに行はれたイオニヤ方言は

ギリシヤ方言  
の分布

イ  
落

P. # ~  
11 ~ 12





○ 原始時代の宗教觀念

○ 物神崇拜

リヤより更に大なる結合はフィレ(Phyle)である。此の起原に就いては、色々の説があるが、數箇のフラトリヤ團體の結合に依つて生じたと考へるのが穩當であらう。<sup>(2)</sup>フラトリヤは主に個人の權利擁護等に於て活動し、フィレは政治的、又軍事的意義が重く、なほ一つの祭祀團體を爲して居た。

原始時代の宗教觀念に就いては多くを知ることは出來ぬ。後世の數多い神々は、永年の間に詩人等が頭の中から作り出したものに過ぎない。アポロン(Apollon)、アテナ(Athena)、デメテル(Demeter)等の名前すら當時は未だ無かつたであらう。尤も大空の神、母なる土地の崇拜と言ふやうな根本的な宗教觀念は、既に存して居たかもしれない。なほ注目すべき事は、ヘレネスも考古學の教ふる所に依れば亦今日の自然民族のあるものと等しく當時なほ物神(Fetish)の崇拜者であつた。即ち木柱(Kion)、石堆(Herna)石板等が神性ある物として信仰の對象となつたのである。又神々は屢々動物又は樹木の形で、崇拜せられた。アテナはアクロポリスでは蛇の形で、アルテミス(Artemis)はヤでは牝熊の姿で崇められた。ドドナの櫟の木がゼウス・ナイオス(Zeus naïos)の

靈の崇拜

仰されたのは後者の一例である。

なほ此の時代にはクーランジュが誇大した筆で説いて居るやうに、<sup>(3)</sup>靈の崇拜 (Cult) 殊に家族に依る死者崇拜も盛であつたらう。先祖の墓場は家族の結合の象徴であり、死者は靈としての生存を続け、家族を守護するものと考へられ、家族は之に對して時々飲食物を供へねば、災を招くと信ぜられて居た。しかし此の信仰がクーランジュの言ふやうな重大な意義を政治組織の方面まで及ぼしたかは疑問なきを得ない。

- (1) ある學者(たとへば Bachofen: Mutterrecht)はギリシヤにも母系制の存せる事を主張する、しかしその論據は可なり薄弱である。
- (2) フィレは元來獨立した部族(Stamm)であつたとも考へられ、又一部族の地方的に分裂せるものとも言はれる。又是は印度の Kaste の如く職業、身分の差異を示すとの説もある。
- (3) Fustel de Coulanges: Cité Antiqué, livre I. Antiqué Croissance, livre 2. La Famille を看よ。

第二章 ミケネ時代

第一節 東方文化の影響

ミケネ時代

エーオリヤ、イオニヤ族がヘラスに落着いてからドーリヤ族が遙か後れて二千年紀の末に南下して、ペロポネス半島に居をトするまでの時代をギリシヤ史の立場から假にミケネ時代(Mycenaean Age)と呼ぼう。この時代を通じてペロポネス東部アルゴリス(Argolis)のミケネ(Mycenae)を中心とする、可なり強力な王國の存在したことを考へ得るし、當時の文化の性質も、一八七六年來シュリーマン(Schliemann)が此の地に行つた發掘に由つて最も明瞭に窺はれるからである。此の時代のギリシヤ文化は、東方の文明、殊に小アジア、クレタの文明の影響を頗る強く受けて居た。<sup>(1)</sup>なほこの千年紀には、エジプトもかの新王國の出現(1580 B. C. 以來)により最も花々しい時代を展開して居るが、此は暫らく措き、ベレネスに更に密接な文化交流を持つた小アジア、クレタの政情及び

文化を簡単に述べよう。

ボガズケイ發掘の結果

小アジアに於ては古くからこゝに支配權をふるつて居た、ハッチ族 (Hittites, Chatti) が紀元前十五世紀になつて、ハツツサス (Chattusas—今日のボガズケイ Boghazköi) を主都とする新王朝の下に、素晴らしい飛躍を見せ、タウルス山脈を越えてシリヤまで手をのばした。ボガズケイに於ける發掘は此の宮廷の文書を明るみに出し、其の結果東方の古史に多くの光明が與へられんとして居る。彼等の文字は楔形及び繪畫文字であり、—是等は夫々バビロニア及びエジプト文化との交渉を暗示する、—前者は最近プラーグ大學のフロツニイ (Hrozny) により判讀せらるゝに至つた。ハッチ族が用ゐた多種の言語の中、或者はインドゲルマニヤ語族に屬するのであるが、是はインドゲルマニヤ系の征服者階級の存在を示すのであつて、ハッチ族の本體は、矢張り先に述べた (四頁) 『小アジア人』に屬すると言はれる。今吾々が關心を持つのは、彼等の文化である。『小アジアの文化はエジプト、バビロニア文化の要素も勿論含まれては居るが、可なり自己の特性を有し、是が矢張り小アジア系文化と考ふ可きクレタの文化を通じ、後には小アジア

小アジアの宗教

ハッチ族の文化

海岸のギリシヤ植民市を通じて、ギリシヤ文化に影響を與へて居るのである。先づ小アジアの宗教を見るに、特有の國民的主神は雷神であつて、小アジアの東部ではテシュブ (Teschub)、西部ではタルク (Tarku) と呼ばれ、右手に兩刃の斧 (double-ax, Labrys) を持ち、左手に電光を持った姿で現はされて居る。此の兩刃の斧はクレタ島に於ても重要な働きをなし、ミケネ時代のヘレネスにも知られて居た。第一に「神々の母」(Göttermutter) の崇拜がある。此の女神は『山の神』として又は動物に乗つた形で現はされる。バビロニアからは様々の惡魔的表象や、肝臟觀察による豫言法の如きものを受取つて居る。建築に就いては、ボガズケイの宮殿とクレタの宮殿との類似が注目される。なほバビロニア地方に行はれたギルガメシの叙事詩 (Gilgamesch-epos) の翻案がボガズケイから出土し、此のセム族の叙事詩とホメルスの叙事詩 (五五頁) との関係が、萬更空想でなくなつたこと、及び彼等の文化の高かりしことを物語る法律書 (紀元前十四世紀) が出土して、比較法學に新しい問題を提供して居ることを附記して置かう。此の法律書の内容から推すとハッチは既に純粹な自然經濟の域を脱し盛な經濟的活動を行つて居た様であ

る。一種の金屬貨幣が用ゐられ(八四頁)職業の分化、貨錢物價の規定もあつたらしい。なほ人類史上劃期的事件たる鐵器の使用は明かではないが恐らく小アジアの東北部から始まつたらしい。

(1) ギリシヤの古史を政治・文化いづれも世界史の見地から觀察すべきことを主張したものに Ulrich Wilcken: Griechische Geschichte im Rahmen des Altertums. 1926. 2. Auflage がある。

小アジアの文化にも増して、ミケネ文化に影響したものはクレタ島の文化である。此の島がミケネ、トロイ、チリンス等の今日いはゆる『エーゲ文明(Aegean Civilization)』の本源であることは、一九〇〇年以來英人アーサー・エヴァンス(Arthur Evans)がクレタのクノッスス(Cnosus)で行つた發掘に由り、はじめて明かとなつたのである。

クレタの政治史は明瞭に知り得ない。島の中心たるクノッスス及びフェッスス(Praest-Is)に何等の防壘のないことは、此の島全體がクノッススを中心とする統一國として治められたことを物語る。なほ此の島がエーゲ海上に支配權を振つて居たことはツキヂデス(Cis)も物語る所であつて、たとへそこに見ゆるミノス(Minos)王は實在人物でなく、神に過ぎないとしても、海上支配の事實は今日の考古學的發見からも確められる。

然しいはゆる「中期ミノア時代」(Middle Minoan Period) (2000-1600 B. C.)の末頃、クノッスス及びフェッススの宮殿は、共に破壊せられて居る。Meyerは是をヒクソス人の行爲と主張するが、寧ろかのアケーヤ王侯が一時掠奪に出かけたものであらうか? かう考ふれば、ミケネの竪穴式墳墓から極めて豊富に發見されたクレタ製の黄金製品も説明が付く。兎に角この災難の後、クレタ人は大いに飛躍し、前の二宮殿の跡に新宮殿を作り、十六世紀に於てクレタ文化は最高點に達した。當時のクレタは實にエーゲ海世界の中心地を爲して居たのである。ギリシヤに對するクレタ文物の波及を跡づけ得るのも、矢張りこの頃からである。クレタ人は當時非常な航海商業民であつたらしい。クレタ製の器の斷片が、頗る遠隔の地に發見されることは之を物語る。しかも是等は以前考へられたやうに、フェニキヤ人が齎したのではない。フェニキヤ人はずつと後、紀元前一千

年頃漸く活動を開始したと考へられるから、是等の器を運んだのはクレタ人自身であら

う。然し如上のクレタの繁榮も、一四〇〇年頃新宮殿が外來者に破壊されるに及び、全く終末を告げねばならなかつた。今度の侵入者がペロポネソスのアケーヤ人であつたらうと言ふのは、一の假説であるが、次第に確かめられつゝある。

クレタの政治は此の位に止めて、其の文化を考へよう。シュリーマンのミケネ發掘が發表せられた時、人々は之を純ギリシヤ的文化と考へ、アルゴリス地方を其の發祥地と看做し、これにミケネ文化の名を冠した。然るに二十世紀に入り、エヴァンス (Arthur Evans) がクノッスを發掘するに及び、クレタの文化がミケネに大なる影響のあつたことや、此のクレタ文化は全然非ギリシヤ的なることが明かになつた。是は殊に宮殿の設計に就いて明瞭である。クレタの宮殿に於ては、中央に大なる中庭があり、其の周圍に大小様々の部屋が幾階もになつて存して居る。それらは玉座の間、近仕者の間、浴室、便所等であり、又祭典・競技を見下す爲の階段も残つて居る。又長い廊下に面した多數の武器庫もあり、其の他料理室、王のための工人の仕事室等が認められる。此の宮殿建築の著しい點の一は、其の柱の上部が太く下に至つて細くなつて居ることである。是は他に類例のない様式であるが、多分杭等からヒントを得て此の島で創められたものであらう。なほ排水其の他の衛生設備の頗る行きとゞいて居る事も此の宮殿の特徴である。

## クレタの藝術

クレタの藝術中最も注目すべきは、宮殿の壁畫と陶器と金、銀細工品(二五頁)とである。壁畫は僅かほか残つて居らぬため、其の技術の歴史的發達を辿り得ぬが壺の方は極めて澤山の遺物があつて、三千年紀以來二千年紀を通じての發達の跡を物語つて居る。「中期ミノア時代」にはいはゆるカマレス式(Kamarenes style)に於て、極彩色が特徴であつたが、クレタ藝術が最高潮に達した十六世紀になると、黑色の釉藥 (Glasurefarbe) を以て陶土に描くに至つた。此の時代の特色は、かの鋭敏な自然觀察に存する。それはクレタ島の春を飾る様々の草花や、又殊に海中生物などの生々とした印象を、大まかな筆で描寫し、正にクレタ獨特のものと言ひ得る。この繪畫は宮殿の壁畫に最もよく窺はれるのであるが、十五、四、三世紀になると次第に形式化するにいたり(宮殿式 Palace style) 描法も『線描』へと變つて行つた。一體にクレタの藝術は、優美であり繊細で、しかつめらしい所がない。當時のギリシヤ(ミケネ)の巨石文化と比するとき、ことに



此の感を深くする。そこで歐洲ではクレタの藝術と、吾國のそれとの類似を説く者もある様である。

「クレタ藝術に就いて一つ不思議なことは、それがエジプト文化と密接な交渉を有ち、ギリシヤ文化との仲介とも言ふ可き地位に立ちながら、エジプト、ギリシヤのやうに、大きな立體塑像を作り出さなかつた一事である。浮彫は發見せられたが、等身の立像は一つも出土しないのである。なほ王の肖像と覺しきものも殆ど見當らない。

彼等は既に二千年紀の初に文字の使用を始めて居る。最初はエジプト流の繪畫文字であつたが、後次第に「イタリック」風になり、其の二種が存したことが明かである。クノッスからは約千五百枚の粘土板の文書が出土したが、それに書かれてゐる文字は未だ解讀せられない。唯、粘土板の使用は、バビロニアの影響であること、又クレタ人がバビロニア風に六進法を用ゐないで、エジプト風に十進法を用ゐて居たことは明かである。

最後にクレタの宗教に就いて述べねばならぬ。クレタの文化が、小アジア系であることは、宗教方面に最も明瞭に窺はれる。尤もクレタの宗教に就いては、多くの出土品が

クレタの文字

クレタの宗教

蛇をつかめる  
女神

あるにも拘はらず、まだはつきりした系統を立つることは出来ない情態にあるが、ギリシヤ本土と同様、此處にも樹木、石、獸を神聖視する「拜物」が行はれたことは明かである。かの『ミノス』が牡牛の形で崇拜されたいことは、後世のギリシヤの説話に見ゆるクレタのゼウスの牡牛や、人身牛頭と考へられたクノッススのミノタウロス (Minotaurus) により推定せられる。一方『山上の女神』や、獅子に乗つた女神の如きは(一七頁参照) 小アジアの『神々の母』に他ならない。なほ宮女の装をして蛇を掴める有名な女神は(蛇使ひとも言はれる) いかなる系統か、まだはつきりせぬが、或は矢張り小アジア系であらうか? 其の他楯を持つた女神も發見されたが、是はギリシヤの女神アテナ (Athena) 此の名は非ギリシヤ的である) の原型と考へられ頗る興味がある。女神の優越とともに、婦人が社會的に(例へば祭祀その他に) 活躍して居るのは、後のギリシヤの場合と著しい對照を爲して居る。是は母權制度と關係があるかと考へられる。小アジアの雷神は傳はつて居ないが、それに附屬する兩刃の斧 (Labrys) はクレタの祭祀に屢々見る所である。有名なクノッススのラビリント (Labyrinth) も、此の Labrys から其の名を得たの

Labyrinth  
Labrys

であつて、元來は此の斧の禮拜せられた禮拜場であつたらしい。女神に捧げた供物の中にファイヤンス焼の衣服 (Peplios) が出土して居るが、是はホメルスのイリヤス (G, 302 ff) の中で、テアノー (Theano) がアテナに捧ぐるペプロスや、後世アテネ市で市の守護神アテネ・ポリアス (Athene Polias) に捧げたペプロスを想起せしめる。なほクレタに於ては未だ禮拜の爲の神像、従つて之を安置すべき殿堂と言ふものは無かつた。

### 第二節 ミケネ時代のヘラスの情勢

以上述べた所に依つてもクレタ、小アジアの文化が、ギリシヤ本土に少からざる影響を與へて居ることは明かである。今や進んで「ミケネ時代」のギリシヤ本土を考察しよう。二千年紀の初期には、先住民カリヤ人と侵入者ヘレネスとの争に次いで、侵入者相互の争が盛に行はれたらしい。諸處に於て山上に城壘が築かれたことは、此の事情を物語つて居る。十七世紀の終りか一六〇〇年頃になつて、はじめてクレタとの交渉が起つたらし

ミケネ及びチ  
リンスの舊宮  
殿

い。最近の發掘により、ミケネに於ても、チリンスに於ても、シュリーマンが掘り出したものより更に古い宮殿が現れた。此處の宮殿に於て、壁畫の裝飾の如きはクレタの工人の作であるとしても、其の建物の様式は全く大陸系統で、中央に爐を有する廣間 (megaron) と、之に附屬する二三の部屋から成り、寧ろ數箇の建物の結合であつて、クレタの宮殿に見える有機的な統一を缺いで居る (二二〇頁参照)。又建築の大きさから言つても、其の遺跡から推してチリンスの宮殿は、クノッススのそのの三分一であり、ミケネのも、ほゞ同様の大きさであつたらう。

此の時代にはギリシヤ人の技術が、クレタ人に比してまだ頗る劣つて居たことは、十六世紀頃の作と思はるゝ王の墓石の浮彫等の粗野なことで窺はれる。シュリーマンが堅穴式墳墓から發見した多數の黄金製品も、多分クレタ人の作で、掠奪によりクレタから齎されたのであらう。(二二〇頁)。それは、當時のギリシヤの幼稚な經濟状態では、到底かゝる品物に匹敵する交換價值を提供し得なかつたと考へられるからである。然し十五世紀を通じて、ギリシヤの文化は次第に發達の徑路を辿り、一四〇〇年頃には其の最高點に

ミケネ王權の  
伸張と巨大な  
造營物

達する。又ミケネの王侯の権力も次第に増大したらしい。地下に作られた十五世紀の頂式墳墓 (Kuppelgrab) — 其の頂點は採光の爲に地上に開いて居る、殊に其の一つであるミケネの城下の「アトレウス (Atreus) の寶庫」 (直徑十五米) と稱するものや、後世のヘレネスが巨人キクロプス (Kyklops) の作と考へた巨大な石を用ゐたミケネの城壁 (一四〇〇年頃の作) 又はに附屬した有名な『獅子門』等は、皆此の時代王權の伸張せることを物語つて居る。チリンスの城壁が擴張され、チリンス、ミケネに前より大きな宮殿の新築されたのも此の時である。一體此の時代の特徴は、巨大なる物を求むる傾向に在ると言へよう。

かゝる文化を産んだ當時の政治情態を考へて見ると、此の時代には後世の都市國家よりも、もつと大きな國家が存したと考へられ、殊にアルゴリス (Argolis) 地方は統一國家を爲して居たらしい。此の推定には色々の材料がある。第一にはミケネから出發してイストモス (Isthmos 地峽) を經、北方ギリシヤに通じて居た大きな軍道であり、アルゴスがテーベ (Thebae) と戦つて勝利を得たと言ふ傳説等は、ミケネの勢力が、中部ギリ

ミケネ時代の  
政治情態  
巨大なるもの  
の

シヤにまで伸びて居たことを暗示する。かの巨大な石を積んだ城壁は、強大なる王權が人民を賦役に使つたのでなくては、到底出来なかつたと思はれる。乃ち先に述べた (一頁) 民族移動時代の『同等者中の第一人』 (Primus inter Pares) 式の王は、いつの間にか變じて専制の君主となつて居るのである。<sup>(1)</sup> 尤も此の變化の過程に就いては、何等の所傳も無く不明ではあるが。又此の頃には武事にすぐれ、従つて戦の後に多くの土地、物品を得た人々の中から前代にない貴族の特權階級も既に生れて居た。

然し以上の記述によつてアルゴリス地方がミケネを中心として、後世の都市國家のやうに、強固な統一體を爲して居たと考へるのは早計である。なぜなれば上にも屢々觸れたやうに、ミケネから僅か離れたチリンスの丘には、第二の王城があり、前者に劣らざる宮殿と城壁とを具へて居るからである。其の他アルゴリス平野の周圍の山上にはナウプリヤ (Nauplia)、ミヂイヤ (Midea)、リルケイヤ (Lyrcia) 等に、矢張り王侯居城の跡を見出すのである。是等の事實から推すと、チリンス以下はミケネに封建的服屬の關係に立つて居たと見ても、アルゴリスの統一は比較的弛いものであつたと結論せざるを得

アルゴリス地  
方の不統一情  
態

ないのである。(尤もチリンスはミケネ王の離宮とも考へられる。)

ミケネ文化の第二の中心地は、中部ギリシヤのボエオチャ地方である。オルコメヌス(Olchomenus)では、「ミニヤス(Minyas)の寶庫」と呼ばれた有名な圓頂式墳墓があり、又テーベのカドメヤ(Kadmeia)の丘には、やはりミケネ式の宮殿の跡が発見せられた。コパイス湖(Kopais)の水を排する爲に作られた運河—それは後世埋れてしまったが—も亦ミケネ時代に建設せられたと考へられて居る。

キクラデス諸島(Kyklades)並に小アジア沿岸には「ミケネ的」なる遺跡は比較的稀である。たゞホメルスのイリヤス(Ilias)で有名なイリオン(Ilion)(ラテン名トロヤTroja)が、同一文化系統に屬することは、シュリーマンの發掘で明かとなつた。彼は此處で太古からの都市の九つの層を發掘したが、彼の死後デルプフェルド(Dörpfeld)が、其の九層の中、下から數へて六番目の市(Troja VI)がホメル스에謳はれたイリオンであることを明かにした。(三七頁参照)

當時の生活の中、彼等の武器に就いては、吾々は可なりはつきりした概念をうるこ

ボエオチャ地方の遺跡

イリオン(トロヤ)

が出来た。攻撃の具は主として槍であつて、又接戦に於ては、エーゲ文明の特色を爲して居る兩刃の劔が用ゐられた。防禦には頭から足の先までをおほふ頗る長大な楯を用ゐた。此の楯は幾重もの牛革を以て張られて居た。ホメルスにも『七つの牛革を張り合せた(heptaboios)楯』が見える。平時は此の楯は革紐(telamon)を以て、肩に懸けられるのであつた。二千年紀の末頃になつて此の楯は漸く影をひそめ、より輕小なものが之に代り、随つて今まで見なかつた甲冑、脛當てが用ゐらるゝやうになつた。是は漸く鐵器の使用が始まつた爲であると説明される。なほ十六世紀の頃からホメルスに見ゆる戰車の使用が東方から、多分クレタを経て、ギリシヤに入つて來て居る。

此の時代に、早くも後世の「英雄詩」の先驅者が存在せることが考へられる。「ホメルス」の詩篇の分析は(後章五五頁参照)此の雄大なる叙事詩が、決して一人の作ではなく、其の中には後世の要素とともに頗る古い要素のあることを明かにした。叙事詩の中に武人の楯を「足に達する」(podenekes)、「全身をおほふ」(amphibrotos)などと形容して居るのは、事實かゝる楯を目撃した人の歌が入つて居ると考ふべきである。アケー

ヤの武人を形容するに、「屢、「真鍮の衣着けたる」(Achaiói chalkochitones) と言つて居るのも一證となる。「叙事詩」の出来たのは、既に鐵器時代に入つてからであるから。乃ち此の時代に叙事詩の先驅者があつたと結論し得るのであるが、注意すべきことは、當時は未だ文字の使用がなかつたので、是等の歌は口から口にと傳へられたのである。此の文字の使用のないことは、クレタの文化に比較して(二二頁)、ミケネ文化が一步劣つて居ると言はざるを得ない。<sup>(2)</sup>

次に宗教であるが、此の方面に於てミケネ文化はクレタのそれと著しい類似を示して居る。例へば有名なミケネ城門の浮彫は城の紋章であつたらしいが、中央に二つの祭壇の上に立つた柱は明かにクレタ式であり、其の兩側に立ちかゝれる二頭の獅子は、クレタを通じて小アジアの宗教を想起せしめる。か様に東方の影響も著しく見られるが、前代以來の「物神崇拜」も存続し、且つ「靈の崇拜」が盛に行はれたことは、此の時代の特色である圓頂式墳墓が明瞭に物語つて居る。此の地下の圓形の空間は實に死者の靈を禮拜する者の爲に作られたのであつた。

## 當時の宗教

ミケネ文化の  
根本精神

以上概観した所に依つていはゆるミケネ文化がいかによくクレタ文化の影響の下に立つて居るかを見るに足るのである。然し乍ら其の根本の精神に於て、此の文化はやはりギリシヤ的と呼ぶべきである。クレタ文化的要素は次章で説く所の第二次民族移動の波に、跡かたもなく消え去つてしまつた。僅かにクレタ建築の柱だけは、ギリシヤ人に保存せられ、あの莊重なドーリア圓柱は之から變形したものと云はれてゐる。

- (1) ミケネでは六箇の堅穴式墳墓が發掘され、九人の男子が發見された。Meyer は是から推して此處に九代の王が恐らく一四三〇年から一二三〇年に至る二百年位支配したらうと考へて居る。(Gesch. d. Alt. Bd. II<sup>2</sup> S. 248)
- (2) テーベやミケネ出土の壺に、クレタ文字を誌したものが二三發見せられたが、是はクレタからの輸入品か、さもなければクレタの土人が此處で書いたものと考へられる。

## 第三章 エーゲ海方面への発展とドーリヤ人の南下

## 第一節 エーゲ海方面への発展

海外発展の端緒

一民族が遊牧乃至農業生活から海上生活を行ふまでには、或期間を要するものである。ミケネ時代の初期に於てはギリシヤ人がまだ海上に眼を注いで居なかつたことは、かのミケネ、チリンスの城市のある地方が、海外発展に好都合なるにも拘はらず、是等の城市が海岸から少し奥地にあることが物語つて居る。しかし此の状態は永續しなかつた。十六世紀以来のクレタとの交渉は、やがて此の民族を海へと誘ひ出した。尤も其の最初に於ては、商業取引とか移住とかを目的としたのではなくて、單なる掠奪行爲であつた。然し掠奪の後には、移住の現象が起つたのである。前にも述べたやうに、一四〇〇年頃クレタ島のクノッスス、フェスツスの宮殿は皆破壊されて居る。是は決してエヴァンスの考へるやうな民衆の王に對する反抗の結果ではなく、ペロポネッスから來たアケーヤ人の手

に由つて行はれたのである。アケーヤ人の移住に由つて、元來此の島に住んで居たりキヤ人は、流浪の末、小アジアの後世いはゆるリキヤ地方に移り、又フィリステヤ人 (Philistines) も、此の島を去つてシリヤ方面に移つた。なほクレタ住民の一部は西から來たギリシヤ人を避けて、島の東部に立てこもつた。是はエテオクレテス (Eteokretes) (純粹なるクレタ人) と呼ばれて居る。

なほアケーヤ人はクレタを越えて、小アジアのパンフィリヤ (Pamphylia) の海岸に移住した。<sup>(1)</sup> 又彼等はキブルスの北岸、後世『アケーヤ人の岸』 (Achaion Akte) と呼ばれた部分を占領し、此處ではギリシヤ人がフェニキア文字を採用する以前に獨特な文字を使用するに至つた。此の文字は今日幸にして解讀せられて居る。

(1) ハッチ王國の首都ボガズケイ出土の文書に據ると『Aechhijavā の王國』が、十四、三世紀にハッチの王國と政治的關係に立ち、十四世紀後半の刻文には、此の國王はハッチ王の「兄弟」と呼ばれて居り、更に十三世紀後半の條約文書には、此の國王の名がエジプト、バビロニヤ等の王名と並び記せられて居る。Emil Forrer は此の Aechhijavā は Achaea に當ると

アケーヤ人の小アジアへの進出

主張して居るが、若し是が眞實とすれば、アケーヤ人が當時早く海外に發展して居たことになる。十三世紀の條約は多分アケーヤ人のパンフィリヤ植民地に關係があるだらう。しかし上の文書解讀に就いては、まだ不確かな點が多い故、今日之は一の假説たるに止まる。(一〇頁 註参照)

ハッチ王国の  
崩壊

前章に説いたハッチ王国が、小アジア全土に勢力を振つて居る間は、ギリシヤ民族の小アジア沿岸の移住は容易でなかつたらしい。しかし後に述べるフリギヤ人 (Phrygians) の小アジア移住に由り、十二世紀の初頃、此の帝國が崩壊するや否や、ヘレネスは小アジア沿岸に移り始めたらしい。<sup>(1)</sup> 是は考古學的材料からも證明し得る所である。即ちこの移住はドーリア人の南下といふ(後述)後方からの壓迫のみに由るのではなくて、既にミケネ時代のヘレネスの活動力の現はれとして解釋すべきものである。其の橋渡しとなつたエーゲ海の島々の如きは、更に古くから移住が行はれたのであらう。

エーオリスの  
起原

かの有名なる女詩人サッフォー (Sappho) を生んだレスブス (Lesbus) 島と、其の對岸の地方には、テッサリヤ地方の方言と最も類似する言語が行はれて居た。テッサリヤとレ

スブス島とが、海を隔てて、相對して居ることを考へると、テッサリヤの住民が此の島に移つた事は明かである。彼等は更にアジア大陸に移り、カエクス河 (Caecus) からヘルムス河 (Hermus) の河口の間の地へと廣まつた。彼等は此處で小アジアの先住民と對立するや、互に結束してエーオリヤ人 (Aeolians) の名を取るに至つた。此のエーオリヤの植民地 (エーオリス) (Aeolis) は概して農業植民地の性質を示して居る。

イオニヤへの  
移住

次にイオニヤ語を話すアッチカ、エウボエヤの住民が、先づキクラデス (Cyclades) 諸島を占領し、次にキウス (Chius)、サムス (Samos) 島を取り、對岸の後世いはゆるイオニヤの地方へと移住した。四世紀にアテネ人イソクラテス (Isocrates) (一頁参照) 等がイオニヤの植民はアテネの市に由つて行はれたと言つて居るのは、五世紀のアッチカ帝國の影響の下に生れたアテネ人の自負に過ぎないが、アッチカが此の植民に與つて、力の大であつたことはキクラデス諸島の方言とアッチカ方言との非常な類似や、デルス、サムス、ミレツス、エフェسس、テオスにアッチカのフィレの名の見えることによつて確かである。小アジア沿岸への移住者はエーオリヤ人と同じく、文化低き先住民に對して、互

に結束してイオニヤ人(Iones 古くは Javones、舊約の創世紀十章には Javan と見える)と呼ばれるに至つた。此の名もエオリヤ人のそれと同じく、移住の後にはじめて廣く民族名として用ゐらるゝに至つたのである。イオニヤ人はエオリヤ人と異り、商業的に發展し、小アジアのヘレネスの牛耳を執つた許りでなく、ギリシヤ本土に於けるミケネ文化が南下せるドーリヤ人の爲に全く破壊せられた時(次節)、東方文化との交渉に依り、永くヘレネス文化代表者の位置を保つたのである。

(1) ベロツホもマイヤーも大約一三〇〇—一〇〇〇年の年代に之を置つて居る。Beloch: Gr. Geschichte Bd. I. 2. Aufl. S. 139 Meyer: G. d. A. I. S. 247

## 第二節 ドーリヤ人の南下

イリリヤ人と  
フリギヤ人と  
の移動

ヘレネスの東方への移住が徐々に行はれて居た間に、北方に於ては最も重大な事が起つて居た。それはイリリヤ人の南下である。おそくとも紀元前十三世紀に、彼等はホンガリヤの谷から、後世イリリヤと呼ばれるバルカン半島西部へと下つて来て、そこに居

たトラキヤ民族を服従させ、其の一部は之を東方へ驅逐した。是に由つて元來バルカン東部に居たトラキヤのフリギヤ人は、海を越えて小アジアに渡り、遂に一一九〇年頃小アジアにさしもの勢をふるつてゐたハッチ帝國を仆し、後世のフリギヤ地方に居を下したらしいのである。前に引いたボガズケイの文書が、丁度此の頃で切れて居ることは、此の事情を物語つて居る。

◎ なほホメルス(Homer)のイリヤスに、アガメムノン(Agamemnon)・アキレス(Achilleus)に率ひらるゝアケーヤ軍の十年の長き攻圍の後、遂に奇計によつて攻め落され、灰燼に歸したとされて居るイリオンの市(Troja 二八頁参照)は、十三世紀の末頃に破壊されたらしく、隨つてその下手人は、イリリヤ人に逐はれて小アジアに移つたトラキヤ族であつたと考へられるのである。

此のフリギヤ人の壓迫に依つて、小アジアの二三民族は、シリヤ、エジプト方面に新住地を求めて南下したが、エジプトのラメス(Rameses)三世に、一一九〇年頃シリヤに於て食ひとめられた。彼等の中フィリステヤ人(元クレタ住民)は、後世いはゆるフィリ

其の餘波的移  
動



ステヤの海岸に最後の住地を定めた。以上はイリリヤ人の衝動から起つた移動の最尖端を爲すものであつた。

(註) 但し是等の事件に就いては何等の確たる記述もなく、昔學者の推定に基く假説である。イリオンの破壊もアケーア<sup>(1)</sup>の君侯が商業的利益關係から遠征したものと考へられて居る。  
(Meyer, G. d. A. Bd. II<sup>2</sup> I S. 302)

然し吾々にとつて此より遙かに重大なのは、矢張りイリリヤ人の壓迫に起因するドーリヤ人の南下である。其の次第はかうである。まづイリリヤ人と近い關係に立つエピルス人が北方からいはゆるエピルスの地に入り、此處に居たギリシヤ人を逐つた。此の地に元來ヘレネスの居たことはドドナ(Dodona)に關する傳説や、又此の地方にギリシヤ系の地名の残つて居ることが物語つて居る。そこで西北ギリシヤ人の一であるテッサリヤ人は、後世いはゆるテッサリヤの平野に下り、其の地のアケーヤ人を隸屬せしむるに至つた。是と同じ事情から、同じく西北系ギリシヤ人に屬し、ピンヅス(Pindus)山中にあつたドーリヤ人の南下が起つたのである。此のドーリヤ人南下の事實に就いては異説が存する。例へばペロッホはドーリヤ人もかのアケーヤ人と共に、三千年紀末から、二千年紀の初

ドーリヤ人南下の事情

ペロッホの説

頃に南下し、コリンツス灣口のナウパクトス(Naupactus)附近で海を渡り、ペロポネススに入り、アルゴリスを占領し、<sup>(2)</sup>そして二千年紀の末頃にパルノン(Parnon)山脈を越えて、かのエウロタス(Eurotas)の谷『空虚なるラケダイモン』(Lakedaimon)へと侵入したと言ふのである。

(1) Rheinisches Museum für Philologie XLV. 555. Gr. Gesch. I. I. S. 89ff. 142. 以下  
Niese: Historische Zeitschrift. N. F. XXVI 69. 76 ff.

(2) 此の説に依ればミケネ文化を作り出したのはドーリヤ人であつたこととなる。

其の批評

然し吾々は此の主張に賛同することは出来ない。第一にペロポネススのドーリヤ人の間には、彼等が新來の征服者であつて、ラコニヤの地の生えぬきでないと自覺が強く生きて居たのである。<sup>(1)</sup>キプルス島やパンフィリヤ海岸に移住したヘレネス(三三頁)の方言は、アルガヂヤの山地(Aeolic系)の方言に酷似するが、彼等移民は海岸地のアルゴリスやラコニヤから出發したであらうから、此の地方にドーリヤ人ならざる住民の居たことが想像される。ホメルスの叙事詩がドーリヤ人南下の事實を記して居ないのは、

此の事件が餘りに新しいことだつた爲であらうか。兎に角ドーリヤ人の新來を抹殺する説は吾人を承服せしめ得ない。ホメルスには見えないが、ギリシヤ神話の中には、之を暗示する説話がある。『ヘラクリデー (Heracleidae ヘラクレスの子孫) の歸國』<sup>(2)</sup>の話がそれである。尤も此の説話の枝葉は、後世のペロポネッスの政局や、スパルタの三つのフィレヤ、二王並立制等を説明せんがために作られたもので、歴史的事實とは何等關係はないが、たゞ彼等が一千年紀の終頃に、西北ギリシヤの山地から南下し來り、中部ギリシヤのドーリス (Doris) と呼ばれる、地方に多分一時停まり、ついでコリントスの地峽を経、ペロポネッスに入ったことは推定せられるのである。<sup>(3)</sup>

(1) 卷頭に引いたイックラテスの主張に何等かの歴史の意味を求めれば、それはドーリヤ人がアテネ人よりもおかれてヘラスに南下したことである。

(2) 此の説話の内容はたとへば Apollodorus II. 7 を看よ。

(3) 神話にはコリント灣口の Naupaktos に於てペロポネッスに渡つたとあるが、Naupaktos は「造船所」の義である所から、この神話の中に織り込まれたと考へられる。

ドーリヤ人の南下は、決して一時的の現象と考へてはならない。それは永い年月に互

つて行はれ、しかもかのローマ帝國に侵入せるゲルマニヤ人のやうに、非常に破壊的に作用しつゝ移住したらしい。一時ミケネ文化の中心を誇つたアケーヤ王國も、其の文化とともに新來の原始民族に屈せざるを得なかつた。<sup>(1)</sup>かくてドーリヤ人は一部はアルゴリスに、一部はラコニヤに其の新住地を定めた。たゞ中部ペロポネッスの山脈重疊たるアルカヂヤ地方だけは、先住民へと残されたのである。

ドーリヤ人と  
先住民族

② ドーリヤ人は文化的には先住民より低級であつたが、非常な優勢を以て侵入したため、彼等の到る處ドーリヤ語が用ゐらるゝに至つた。先住民の取扱ひは處により異つてゐる。スパルタではヘロット (Heilotai, Helots 隸民) とされ、地方民は身體自由なるも參政權なきペリオイコイ (Perioikoi) となつた。北部のアルゴスやシキオン (Sicyon) では、先住民がドーリヤ人と同一に待遇されたいことは、此處にドーリヤの三つのフィレの他に、新に一つのフィレの加はつて居ることから分る。<sup>①</sup>

ドーリヤ人の南下が、前に述べたエーオリア人、イオニヤ人の東方移住の重大な原因となつたことは既に述べた(三四頁参照)。然し先住民のみならず、ドーリヤ人自身も、後

ドーリヤ人の  
海外進出

から来る同族の壓迫の爲か東方海上へと發展したのである。まづ手近のキテラ島 (Cythera)、クレタ島を占領し、次いでメルス (Melus) コス (Cos) ローヅス (Rhodus) 島へ手を伸し、遂に對岸小アジアへと渡るやうになつた。かくてヘラス本土の三種族と相對して、海の彼岸にも、三つの植民地エーオリス、イオニヤ、ドーリス (Doris) が成立したわけである。

(1) 尤もゲルマニヤ人移動から類推することが許されるならば、新來者の侵入前に、アケーヤ王國は上古末期のローマの如く、文化の爛熟期を過ぎて衰退に向ひつゝあつたと考へられる。

『中古的』時代の初に當つては、政治的社會的狀態は、第一章(一一頁)に説いた原始的狀態への復歸を示した。かのミケネ文化の背景をなした有力君主の專制は姿をかくし、再び單純なる『同等者中の第一人者』(Primus inter pares)の王と長老會と部族民の會議とが現れたのである。

然しこゝに最も注意すべき社會的現象が起つた。それは都市(Polis)の發生である。此の都市はギリシヤ人の全社會生活に根本的意義を有するものであり、又ギリシヤ史の中古とゲルマニヤ人の中古との根本的差異點を爲してゐる故、少しく立入つて其の發生の跡を尋ねて見よう。勿論都市的生活と呼ぶるものは、ミケネ時代の支配者の住地、ミケネやアテネやテーベ等にも存したに相違ない。然し此處では、強大な王權が、都市と地方との差別の發生を妨げその地方民の大多數はまだ村落生活を送つたと思ふ。吾々がボリスと呼び得るものは最初小アジアの植民地に興つたらしい。此處では、雜多の部族民が移住して一所に定住した結果、各部族の法制の崩壞を來したと、移住民が在來存在した東方的都市に入り込んだことに由つて、ボリスが發生したと考へられる。イオニ

都市の發生と  
其の意義

小アジアに於  
ける最初の發  
生

ヤの十二都市や、ドーリヤ移民の六都市は、か様にして出来たのである。

ヘラス本土に於ける發生

ヘラス本土の都市は之より後れて發生し、其の發生の事情も別である。是は一言にして之をおほへば、地方的單位の獨立に由るのである。都市發生以前に於ては、種族は村村(Konai)に分れて生活し、周圍の耕地を耕して居た。しかし定住久しくなるにつれて、種族團體乃至血縁の觀念は次第に薄らぎ、地縁による利害關係が重大となつて來る。かくて農耕地、牧場、水源等に關して地方的單位相互の間に、利害の衝突が益々はげしくなり、ドーリア人南下に基く社會的紛糾が地方的單位の自衛を最も必要とする時、一方種族的統一を代表する人民指導者的な王や、部族會議は是等を處理し得ずして次第に其の意義を失つて行く。此の社會狀態の進みから生れたものがポリスであつた。其の發生形式は二つある。第一には一つの地方に於て或る村落が有力であつた場合、それが其の地方の中心となつて、周圍に對し支配力をふるふこととなつた。殊に城砦を中心とした場合が多いことは、ポリスの語が元來城砦を意味することから推察せられる。<sup>(1)</sup> 第二の形式は隣接する村々が城壁によつて一つのポリスに結合せられた場合、或は遠く離れた村々から、

二種の都市發生形式

村民の一部分が一箇所に集り住んだ場合である。此の二つの形式は互に大分異なるが兩方ともシノイクスモス(Synokismos) (聚住)と呼ばれ、又何れの場合にもポリスの名が用ひられた。此の際祖先の墳墓の地を捨て、聚住するを肯ぜぬ者も多かつた事は、聚住が屢々強制を伴つて居る事である。か様な地方殘留者も原則としては彼等がポリス住民と同族である以上は別に政權上の差別は無かつたと考ふ可きであらう。支配者たる市民(Astoi)の支配せらるゝ周圍の田園との間の著しい政治的差別が生じたのは、植民市の様にポリス住民と地方民が異族の場合であつた。有名なクレタのゴルチュン(Gortyn)の法は、市民たる者は都市に住む可きことを定めて居る。そして地方にあつて農耕に従事するものは日雇労働者(Thetes)か、奴隸(Douloi)<sup>(2)</sup>であるか、大地主の家來(Chentel)であるか、とにかく皆參政權なき人々であつた。<sup>(3)</sup>

か様に發生した都市は、外部に對しては自由(eleutheria)を、内部的には、自分自身の法に隨つて生活する事、即ち自治(autonomia)を要求し、之に自給自足(autarkeia)の方針が加はつて、いはゆる都市國家(Stadtstaat-City state)の形成となつたのである。

都市國家の發生

第四章 ギリシャ史の『中古的』時代

四

今までの部族會議に代つて、市民が必要な場合に、容易に民會に呼び出されるに至つた(民會 Ekklesia は *ekkalein* 「呼び出す」と言ふ語から出たものである)。

なほ、か様な都市國家の結成は、ギリシャ本土では比較的文化的のひらけた東部地方に早く起り、西部のアカルナニヤ(Aetna)・エトリヤ(Aetolia)地方は、永く村落生活を續けた。

- (1) メガラ(Megara)の市が他の五村落を支配して居たのは、此の一例であらう。MegaraはMegaron(二五頁を看よ)の複數の形で、宮殿の義。此の宮殿が中心となつたのであらう。
- (2) 古代社會構成の重要々素たる奴隸は、既に此の時代から交戦、掠奪の結果存在したが未だ、その數は少かつた。
- (3) ギリシャ本土の例をとれば、スパルタのペリオイコイ(四一頁)は此の一例である。尤も是等の政權なき人々の聚落も Polis 又は Ptolethron と呼ばれた。ラコニヤ、アッチカの如き大地域が一都市の下に統一されたのは、Synoikismos 以外の事情が與つて居る。(後章九一頁参照。)

貴族階級の發生

新來民族が定住に移つた始めに於ては、土地は部族の共有であつて、毎年又は或定ま

○年頃だからである。其の發生が當時文化的に本土より進んで居た小アジアの植民地である事は明かであるが、それ以上の詳細に關しては近代のホメルス研究の開祖ともいふべきウォルフ Friedrich August Wolf の Prolegomena ad Homerum (1795) 出現以來、今日に至るまで、學者間に意見の一致を見ない。

例へばかの「ホメルス」のイリアス(Ilias) オヂッセイヤ(Odysssea)は、イオニヤの方言を主とし、諸所にエオリスの方言が見える所から、或る學者はかゝる叙事詩は、イオニヤ、エオリス兩方言の混淆せる地方、殊にかつてエオリス人の勢力範圍であつて、後イオニヤ人の地となつたスミルナ(Smyrna)地方に發生したものだらうと説く。又一方ホメルスの叙事詩に於て、テッサリヤ及び同地方の信仰が優越せること一例へばアキレウス(Achilleus)はテッサリヤの出であり、神々がオリンパス(Olympus)山に住み、ムーサ(Mousa)もオリンパス山の北麓に起原すると言はれるから、ある學者はテッサリヤから出たエオリス植民地が、英雄詩の本來の誕生地であると結論する。(Meyer G. d. A. II S. 399) 是等の多くの議論に立入ることは、到底此の小冊子に許されない

ホメルスに關する諸説

第三節 『中古的』時代の文化

五

から、たゞ學者間に一般に認められて居る研究の成果を紹介するに留めよう。其の一は十八世紀末にウォルフ (Wolf) が喝破せる如く、吾々に傳はる叙事詩は、決してホメルス一人の作ではなく、數世紀の永い發達の結果であると言ふことである。ミケネ時代に既に叙事詩の先驅者の存在したことは先に述べた(三〇頁)。最初是等の歌は、堅琴(Phor-ninx) に合せて、吟遊詩人によつて王侯の朝廷で歌はれた。次に八世紀の頃堅琴はやめられ、其の代りに詩は棒で拍子を取り乍ら暗誦されるやうになつた。之を爲して巡歴したのがラプソードイ(Rhapsodoi)であつて、彼等の手である息の切り場(caesura)のある六脚韻(Hexameter)が完成したのであつた。又彼等の手で叙事詩自身に多くの變改追補が行はれたことは、少しくホメルスに親しんだ人の、容易に肯定し得る所である。

數多い神話、傳説を題材とした叙事詩の中、今日完全に傳はつて居るのは、いはゆるホメルスの「イリヤス」と「オヂッセイ」である。「イリヤス」に於てはテッサリヤの英雄アキレウスに關する傳説が、最も古い要素であり、之にヘレナ(Helena)の掠奪、トロイ戦争の傳説が結び付けられたものであり、「イリヤス」がヘラス本土に齎らされてからは、

「イリヤス」と  
「オヂッセイ」

つた時期に、土地は抽籤<sup>(1)</sup>によつて自由なる部族民の間に分配せられた。しかし定住久しきに互るや次第に種族血縁の觀念が薄らぎ、土地の私有が起るや、所有地の不平等はここに貴族の階級を發生せしめた。槍、劍、甲冑が高價となり戦車が用ゐられるにつれ、戦争は經濟的に豊で多くの従者を養ひ得る人々の專業となり、戰場に於ても一騎打ちの風が盛であつた。<sup>(2)</sup>同時にかの「部族の指揮者」であつた王が、益々時勢に不適當となり、王が、彼の側に貴族の階級から役人を任用するにいたり、<sup>(3)</sup>貴族の権力は益々伸張し遂に八―七世紀の頃に「王政」は貴族政治に代らるゝに至つた。尤も此の王權の制限、貴族の擡頭は、地方に依つて差別があり、都市の興起と密接な關係がある。小アジアの海岸やアルゴリス、アッチカ、ポエオチャには、それが最も著しく、ロクリスや、エリス、アルカヂヤの如き西部地方には、原始的狀態が久しく續いたらしい。又原始的共産的色彩を保存したスパルタ、クレタに於ても、騎士・貴族階級の發生を見ることは無かつた。

(1) 後世まで私人の私有地が Kleros (籤の義) と呼ばれたのは此の事情を示す。

(2) Iliad. 三卷の Paris と Menelaos の一騎打ち (Monomakhia) は此の一例である。

(3) アッチカの六人の立法者(Themothetai)、スバルタの五人の監督官(Ephoroi)、クレタの諸國の十人の Kosmoi は此の例である。スバルタに二人の王のあるのも、此の事情によるか。

經濟情態の逆轉

吾々は次に中古の經濟狀態を一瞥しよう。中古の初期は一般に原始狀態への復歸であつたが、經濟方面は特に左様であつた。小アジア植民地は別として、ギリシヤ本土に於てはミケネ時代に榮えた東方との交通は一時全く衰退し、ヘレネスは大體農業本位の原始的な家内經濟に満足して居た。農業は頗る粗笨的であつたが、五穀の外に既に葡萄、無花果、オリーブの栽培を知つて居た。又牧畜も仲々盛で、家畜は貴族の主なる財産である。其の結果手工業は衰退したが、ドーリヤ人の南下した頃からギリシヤ人が鐵の使用を始めたことは特記さる可きである。交換經濟は漸く九—八世紀の頃になつてフェニキヤ人がエーゲ海に活躍して、東方物貨を齎らすやうになつて、徐々に興つて來たが、はじめはミケネ時代のやうに貴金屬でなく、牛の皮其の他の獸皮が媒介物に用ゐられた。尤も後には銅、鐵も用ゐられて居る。<sup>(3)</sup>

(1) 此の證據は Iliad, Odyssey の隨處に見える。然し「人の爲に働く人—工人、職人」(Dō-miourgoi) も早くから存した。

(2) フェニキヤ人の活動は、近年の研究により、比較的新しい時代に、そして以前より狭い範圍に限られんとして居る。

(3) Iliad VI 236 に Glaukos の黄金製の甲冑は、百匹の牛の値があり、Diomedes の銅製のそれは、九頭の牛の値と言はれて居る。尤も VII 473 にはアケーヤ人が銅やかゞやく鐵で酒を購ふ話が見える。

第三節 『中古的』時代の文化

造形美術

民族移動の齎した文化の沈滯は、造形美術の方面に於て最も明瞭である。ミケネ時代のキクロプスの城壁のやうなものは、何處にも作られず、城壁には土壘と木柵が用ゐられたらしい。此の時代から神殿が作らるゝやうになつたが(後章)、みな木造であつた。石造建築は七世紀に至つてはじめて起つて來る。神像も亦木で刻まれた(xoanon)。壺の文様も此の時代の初期には著しい退歩を示して居る。ミケネ時代の豊富な意匠は失はれて、

原始的な幾何學的な文様が好んで用ゐらるゝに至つた。此の様式は、ミケネ時代末期の線描き様式と結び附いて居るのであるが、其の粗野な手法に由つて、むしろ原始時代の幾何學的な文様を偲ばせる。是は古き藝術が減じて、新しいものゝ起らうとしてゐる時代の様式であり、上古末—中古初のビザンツのキリスト教藝術に比較せらる可きものであつた。しかもか様な新興の藝術の萌芽は、早くもアッチカのやうに民族移動の影響著しからざる地に見えて居る。かのデピロン (Dipylon)<sup>(1)</sup> 式の壺は、幾何學的な文様を高度に發達せしめたものであつて、壺面の細長い帯の間に人物、動物の列や、進んでは日常生活の場面—葬式や戦争等—を描いたものである。其の堅苦しい形式化された手法は、ミケネ時代末期の手法を偲ばせる。

かくて幾何學的な様式が此の時代を永く支配して居たとは言へ、エーゲ海の島々や特にイオニヤ地方に於ては、古い様式がまだ生き残り、又東方からの影響が全く絶たれたわけではなかつた。かくて主として此の地方に起つた東方風の様式が、次第にギリシヤ全土に弘まり、遂に幾何學的な様式を全く驅逐するのを見るのである。此の新様式の特徴は、

ギリシヤに見ない東洋産の野獸や、其他他東方の空想の産んだ奇怪な動物例へばスフィンクス (Sphinx)、キマイラ (Chimaira) や、多頭の蛇等を、裝飾の主題とせることである。是は主として九世紀以來フェニキヤ人のエーゲ海活躍が盛となつたことに由因して居ると考へられる。しかも是等の東方的主題の作に於ても、ギリシヤ的精神の失はれて居らぬのは、見逃すべからざることである。

(1) 此の様式の壺は、多數アテネ西北の城門 Dipylon から出土した。故に此の名がある。

此の時代にヘレネスが文字の使用をはじめたことは、文化史的に一大躍進を爲したものであつた。ギリシヤ文字がフェニキヤ人の音標文字を眞似た物であることは、周知の事實であるが、それは兩者の字形の類似せる他、ヘレネスが文字のことをフォイニケイア (Phoinikeia) と呼んだと言ふヘロドツスの記事 (V. 58) に由つても確められる。

此の文字使用の行はれたのは、多分紀元前九世紀の頃であらう。今日遺物の上に残つて居る文字の最も古いものは八世紀のものである。フェニキヤの文字は二十二箇の子音から成る。セム人、ハム人の言語は子音の結合によつて單語の意味をあらはす爲、文字も子



ギリシヤ文字  
の統一

音のみでもこと足りるのであるが、ギリシヤ語では母音が不可欠である。其のため彼等はフェニキヤ文字の中でギリシヤ語に不用な息音の記號 (aleph, he, jod, hain) と a. e. i. の母音を表はし、*α* 音は *van* (*ν*) 音の記號から變化させた文字であらした。一體にギリシヤ文字の發達は、ギリシヤの地勢が複雑な爲、各地各様であつたに違ひないが、遂に五世紀の初からイオニヤ人の地方の文字が、漸次文學に、私用に、又官廳に於て、全へラスに用ゐられるやうになつた。アテネに於ても、四〇三年 (エウクリデス *Euclides* のアルコンの時) に、イオニヤ文字を公用にも、學校の教育にも用ゐることに定まつた。なほ最初ギリシヤ文字は、ギリシヤの商人がフェニキヤの商人と取引するために用ゐられたらしく、*S* 文字が各種ある所から見ても、ヘラスの各地で使用が獨立に發生したと考へ得る。貴族は永い間文字を使用しなかつたらしい。公用に用ひられた最古の例は、紀元前七七六年にオリンピアの勝利者の表を書いたのにあると言はれてゐる。

次に中古の文化を代表する叙事詩を考察しよう。叙事詩の發達は文字の使用とは別である。何故ならば之は永く口から口へと傳へられて文字に書き誌されたのはやつと七〇

*Epic*

叙事詩の發生

本土の様々の説話が之に織り込まれた。然し吾々があの二十四歌からなる長大なる叙事詩を、一つの統一として矛盾を感じずに味ひ得るのは、實に一人の偉大なる詩人の頭腦のお蔭であらう。それがホメルスであらうと何人であらうと<sup>(1)</sup>。同様の事はオデッセイに就いてもいはれる。「オデッセイ」の内容は「イリアス」の内容より新しい時代を反映して居ることと、従がつて其の形成が幾分後れることとは大體認められて居る。

此の「中古的」時代の章に於て、吾々は「ホメルス」の諸處を史料として引合ひに出すのであるが、實にホメルスは過去のことを歌つて居りながら、其の中に多く現在の社會、政治状態を描いて居る結果、「中古的」時代の最も重要な史料となるのである。殊にオデッセイはさうである。歴史家は其の爲に、ホメルスの中の古き要素と、新しき要素とをふるひ分けることが、何より必要なのである。然し吾々はかの美しい統一體の四脚を切り放ち、皮をはいでうるさい吟味を加へる前に、先づ彼を精讀翫味することが、「ホメルス」を、更にギリシヤ人を理解する爲に最も善き手引となるであらう。<sup>(2)</sup>

(1) ホメルスと言ふ個人の名は、早く六五〇年頃のアルキロクス (*Archilochus* 一四頁参照)

ホメルス中の  
中古的要素

の断片一五二 (Bergk) に見えて居る。多分彼は實在者で、又歌ひ手であつたらう。ヘロドツス (II. 53) にしたがへば、彼自身より四〇〇年前の人と言ふから、八三〇年頃の人物となる。

(2) ホメルスのギリシャ人に及ぼした影響は非常なものであつた。八、七、六世紀に於て多くの傳説、殊にヘラス本土のものをホメルス式に扱つたキクロイ (Kyklois) が作られ、又ラプソドイ等が各地の神々の祭に於て、其の地の神を讚美した歌は、「ホメルスの讚歌 (Homeric hymn)」として傳はつて居る。特に五世紀以來ホメルスが教科書に用ゐられたことは忘れなくてはならない。ローマ帝政時代にもパピロス研究の教ふる所に依ると、最もよく讀まれた本はホメルスであつた。

ヘシオツス  
ホメルスと並び稱せられるヘシオツス (Hesiodus) は、同じくエポス (叙事詩) の形を踏襲しつゝ、最早ホメルスの無邪氣さは無く、教訓詩とも言ふ可きものを作つて居る。彼はポエオチヤのアスクラ (Askra) の人であつた。年代は明かでないが、其の作の内容から推すと、七〇〇年以後の人とは考へられぬが、ホメルスよりは大分後の人であり、中古と言ふよりはむしろ過渡期 (八二頁) 的色彩が濃厚である。ホメルスと異つて彼は其の作に己の名を名のつた最初の詩人であり、ギリシャ文化史に現れた最初の個人である

と言ふ點が注目に價する。

『神統記』  
彼には二つの作がある。其の一は『神統記』(Theogonia) である。女神ミューズ (Muse) の天啓によつて作られたと言ふ此の作は、ホメルスに依つてヘラス全土に流布せられたオリムプスの神々と、詩人の郷土の神々との不一致に心を悩ました彼が、此の兩者更にすべての神々を天地開闢に遡つて、組織立てようとした試みで、哲學的宇宙論 (一一九頁) の先驅とも見做し得るものである。此の詩形は彼の獨創にかゝる所で後世いはゆる「系譜的叙事詩」の手本となつたものである。

『ヘルガ』  
第二の作は『ヘルガ』(仕事 Erga) と呼ばれ、同胞ペルセス (Perseus) が彼のうけた遺産を奪はうとし、裁判官が其の不正を匡さぬのを憤り、此の詩を以て處世の教訓を與へんとしたもので、貴族的なホメルスと異つて、平民的立場にたつて勞働の貴さを歌つて居る。<sup>(1)</sup> なほ「神の正義」と言ふ思想がはじめて窺はれる點や、<sup>(2)</sup> 人間の過去を黄金、銀、青銅、勇士、鐵の五つの代に分ち考へて居ることはギリシャ思想史上特筆大書す可き地位を、此の詩に與へて居る。

第四章 ギリシヤ史の『中古的』時代

- (1) 「労働は恥に非ず怠惰こそ恥なれ」(Erga. 311) の有名な一句が、全作の基調をなして居る。
  - (2) 波多野博士、西洋宗教思想史、卷一、四〇頁。
  - (3) 五つの時代に就いては原隨園氏「ギリシヤ史研究」七、「ヘシオドスの仕事の一考究」に詳し。
- コロフォン (Colophon) の人クセノファネス (Xenophanes) は、其の戯言 (Silloi) の中で、『ホメルスとヘシオドスは、盗む、姦通する、互ひに欺く等、人間の間では恥づべき事を神に歸した』と嘲つて居る。更にヘロドツスは言ふ、(II. 53) 『ホメルスとヘシオドスは、神系を作り、神々に形容詞を附し、其の姿形を描いた最初の人であつた』と。誠に然り。かのオリンパス山に住む、餘りに人間的な神々は、全く詩人の頭腦の産物であつた。しかも叙事詩が、後世の人々に大變愛好せられた結果、神々は各、固有の活動範圍をもち、喜怒哀樂に身を任せる人間的存在として是認せらるるに至つた。ゼウスを中心として神の系譜が出来上つたのは、中古の王を中心にとりまく貴族社會の反映であると考へられる。然し吾々はか様な華やかな、主として貴族社會に認められた神々の他に、デメテル (Demeter)、ペルセフォネ (Persephone)、ディオニスス (Dionysus) のやうな下界の (Chthonisch) 神々があり、民間信仰の地方的神々の在存することを忘れてはならない。此の地方的な神々は、叙事詩に誌されて居らぬ結果、容易に知り難いのであるが、ミケネ時代から既に其の萌芽を見、かの物神 (Fetich) や獸神とも、密接な關係があるらしい。<sup>(1)</sup>

オリンパス山の神々と異つて、かゝる地方神は其の地方民にとつては全能の神であつたこと言ふ迄もない。か様の地方神信仰の爲に、ミケネ時代に盛であつた死者崇拜、靈の崇拜は著しく衰退した。イオニヤ人生活の特色である現世享樂の思想も、之に與つて力があらう。現にイオニヤ地方では火葬の風が起つて居るのを見るのである。<sup>(2)</sup>

一方神々を擬人して崇拜する風が盛となつた結果、此處に神像を刻むこととなり、次いで神々に住家を與ふる必要が起つた。此處に於て始めて神殿 (Naos) の發生を見たのである。此の神殿を守る爲には、僧侶 (Hierous) が任命された。然しギリシヤ人の思想の一大特色をなして居るのは、特別の僧侶と言ふ階級—俗人の上に立つ神聖視された階級—の發生を許さず、市民は誰でも僧として祭祀に與かり得たことである。従つてギリシヤ人の間には、固定した神學的な教義と言ふものの發生を見ず、各人各様の見解が許されて

居たのである。又ギリシヤ人の他民族の宗教に對する寛大な態度も、同じ思想から出たのであつた。

神殿の守護が僧侶に委ねられた後も、犠牲を供へるのは王の仕事であり、又家族に於ては父の仕事であつた。特に豫言者(Mantis)は尊敬を受けた。豫言には夢占ひや、鳥の飛び方による占法等様々あつた。しかし犠牲の内臓によつて吉凶を豫言する法は、バビロニアに起原するが、ホメルス時代にはまだ傳つて居らぬ。なほ一定の土地に結びついた豫言は、ホメルス時代既に見える。エピルスのドドナ(Dodona)に於ける豫言はそれである。此處ではゼウスが櫂の葉音の中に、彼の意味を告げると考へられて居た。デルフィ(Delphi)のアポロの豫言は七世紀頃から始めて重要なものとなつた。

(1) 『ホメルス』に「アテネを『梟の目したる』(Glaukopis)、『ヘラ(Hera)を『牛の日したる』(Boopis)と呼んで居るのは、アテネ、アルゴスに於ける地方神と叙事詩との結合を暗示する。

(2) 『靈の崇拜』に就いては、E. Rhode の名著 *Psyche* 十版1925を看よ。なほギリシヤ宗教史に就いては波多野精一博士の『西洋宗教思想史』第一卷「希臘の卷」がよき手引とならう。

(3) 神殿—naosの語は多分naio—住む—の語から來たらうと言はれる。殊に都市又は山城の守護神の場合に、早く神殿が出來たらしく—Odyssey VII. 81に女神アテネがアクロポリスのエレクテウスの家に這入る記事が見える。

(4) 『夢も亦ゼウスより來ぬ』(Ilias. I 63)と言ふ美しく有名な句を想起せよ。然しOdyssey IV 415のテレマホス(Telemachos)の言葉や、『祖國を護ると言ふ前兆こそ最善の兆』と言ふヘクトル(Hector)の言葉をよむと、啓蒙せられた人々が、既に占術を疑の眼を以て見て居たことがわかる。

## 競技會の盛行

西洋中古に貴族の間で盛に闘武會が催されたやうに、この時代のヘレネスの生活には、「競技」が缺く可からざる生活の要素となつて居た。勿論競技會の圖は、クレタの遺物にも見え、エジプトにも此の風があるが、裸體となつて肉體の完成を求め、競技の勝利者が一生涯非常な榮譽を擔ふと言ふのは、全くギリシヤ人の創めた習慣であつた。古典の傳ふる所に依ると、オリンピア(Olympia)の勝利者の表は、七七六年から記録されたと言ふ。尤もこのゼウスの爲に四年毎に催された競技も、最初は全く地方的のものであつたらうが、次第にペロポネッス全土に、それから全ヘラスに名立たるに至つた。此の外

六世紀以來デルフィでは、アポロの爲に、ピチヤ(Pythia)の競技が起り、(毎四年)、其の他イストムス(Isthmus)、ネメヤ(Nemea)にも二年毎に催された。是等の競技に於て、各都市の代表者が武事の他、文事をも競ひ、ギリシャ文化の進歩に、又民族的精神の結成に、貢献したのは誰も知る所であらう。

## 第五章 過渡時代

### 第一節 東方諸國の興亡

中古の末期—八世紀半から六世紀半に互る—は、ギリシャ人の植民市建設によつて著しい時代である。之を説くには、かの二千年紀以後の東方、並に西方の形勢を、ギリシヤとの關係を中心に、ざつと一瞥しておく必要がある。

先づ中古に於けるギリシヤへの東方文化の仲介に大いに貢献したフェニキヤ人を見るに、以前はフェニキヤ人は二千年紀の半頃冒險的航海者として東西に大發展をしたと考へられたが、近頃の研究によると、實は十二世紀始の頃、ハッチ帝國が崩壊し、ラメス三世以後エジプトがシリヤの領土を失ひ、益々無力に向ひ、更にエーゲ海に覇權を揮つて居たクレタの勢力が、アケーヤ人に依り覆へされた時、始めてフェニキヤ人へ活躍の番が廻つて來たのであつた。キプルス島は當然彼等の第一に手を着けた植民地であつたが、それ

フェニキヤ人の活躍

十世紀

1000年

以外の地には東部地中海では彼等の植民地の存在は確實に證明出來ないのである。つまり此の方面では、彼等は單なる商業取引をするに停まつたと考へられる。彼等がギリシヤ人にとつて航海業の師であつたと言ふ説もあるが、ギリシヤ語に澤山ある船に關する言葉の中に、フェニキヤからの借用語を一つも含まぬので、疑ふべき餘地もある。フェニキヤ人は又西方に於ては九、八世紀の頃、ウチカ (Utica) とカルタゴ (Carthago) を建設し、ジブラルタル海峡の後方にガデス (Gades, Gadeira) の市を作つたが、是等はエトルリヤ人とともに將來ギリシヤ人の好敵手となる運命を擔つて居た。

(註) 彼等がバルト海岸の琥珀産地や錫に富むブリタニヤの島へ出かけたと言ふ説は、近年疑はれて居る。例へば R. Hennig: Die Anfänge des Kulturellen — und Handelsverkehrs in der Mittelmeerwelt. Historische Zeitschrift Bd. 139 (1929) を看よ。

一方二千年紀の末、チグラトピレセル一世 (Tigratpileser) 以來、擡頭したアッシリヤはアッシェルナシルパル (Assurnasirpal) (883—859) の出現によつて、古代初めての世界帝國を建設するに至つた。サルゴン王 (Sargon) はキプルス島の七つのギリシヤ都市の王

アッシリヤ人の世界帝國建設

二十世紀

エジプトの獨立回復

から、バビロンに於て贈物を受けたといふから (709 B.C.)、彼がギリシヤ人と接觸した最初の東方の君主であつた。アッサルハドン王 (Assarhadon) の時にはエジプトもアッシリヤの屬州となつた (670 B.C.)。しかしアッシェルバニル王 (Assurbanipal) (668—626 B.C.) の時になると、既にエジプトはプサメチク (Psammetich) によつてアッシリヤから獨立した。彼はリヂヤのメルムナダイ (Mermnadai) 王朝を立てたギゲス (Gyges) と同盟し、イオニヤのギリシヤ人傭兵の協力を得、當時アッシリヤがキンメリヤ人 (Cimmerian) の侵入に悩んで居るのを利用して、目的を果したのである。プサメチクは是等のギリシヤ傭兵に多額の報酬を與へて、ナイル河口に定住することを許した。是から後のナウクラチス (Naucratis) の市が出來るのである (七八頁)。此のプサメチクはエジプト王となり、第二十六王朝を開いたが、大變復古主義を厲行し、エジプト藝術も再びかの「古王國」時代の面影を示し、優秀な作を出すに至つた。ヘレネスが丁度かゝる時にエジプトと直接接觸するに至つたことは、注目す可きである。

此の頃東方に於ては、九世紀以來擡頭しかけたメヂヤ人がキヤクサレス (Cyxares)

第一節 東方諸國の興亡

七

メヂヤの興起

の下に、七世紀の終りに一國に統一せられた。六二五年頃には、ナボポラッサル (Nabopolassar) はバビロンに新バビロニア王國を建設した。かくてキヤクサレスはナボポラッサルと同盟して、衰弱したアッシリヤに攻撃を加へ、六一四年にはアッシル (Assur) の古都を、六一二年にはニネヴ (Nineve) を降して破壊した。(在來の六〇六年説の誤なることは、最近の發掘文書から確められた)。かくてアッシリヤ帝國は滅亡し、リヂヤ、エジプト、メヂヤ、新バビロニア四國對立の時期となる。キヤクサレスとリヂヤのアリヤッテス (Alyattes) も亦、小アジアに於て、國境を争つたが、ターレス (Thales) の日蝕の豫言によつて有名となつたハリス (Halys) 河の戰(五八五年五月二十八日)で兩軍は和解し、此の河が兩國の境と定められた。アリヤッテスは此の後、力を西方に用ゐ、ギダス以來の方針に従つて、小アジアのギリシヤ植民市を降さんとした。其の中の小さなものは早速リヂヤに服したが、スミルナ (Smyrna)、エフェスス (Ephesus) の如きは、勇敢に抵抗した。然し是等もアリヤッテスの子クロエスス (Croesus) (五六〇—五四六) の時には、みな陥つて、唯、ミレツスだけは獨立を維持した。服従せる諸市は、リヂヤに貢を納めるこ

## 四國對立

リヂヤとギリシヤ人の植民市

となつたが、兩者の關係は後のペルシヤの支配以後と異つて圓滿であつた。ただギダス以來小アジアの内地が、ギリシヤの商業に對して、塞がれたことは打撃であつた。リヂヤにはじめて貨幣經濟が起りギリシヤ諸市に傳つた事は後に説かう。

## ペルシヤの興起

然し此のリヂヤの主權は永く續かなかつた。ペルシヤのキルス (Cyrus) は五五三年にメヂヤ王アスチャゲス (Astyages) に反抗し、五五〇年遂に同王國を覆し、ペルシヤの種族を糾合してペルシヤ王と號した。リヂヤ、エジプト、バビロニアは互に同盟して新興ペルシヤに當らんとした。クロエススの戰備中ギリシヤ人は、勝利を約束する豫言を與へて好意を示し、又スパルタも援軍を送ることを約した。然しクロエススは同盟軍の來るのを待たないで、ハリス河を越えて獨力キルスと戰つて敗れ、再度ヘルムス (Hermus) の野に敗れて、首府サルデス (Sardes) はペルシヤ軍の手に歸した。次いでキルスは小アジアのギリシヤ諸市に同盟を申込んだが、ミレツス以外は之を拒んだので、マザレス (Mazares)、ハルバグス (Harpagus) の兩將に之を降させ、ペルシヤに納貢、從軍の義務を負はしめた。ヘレネスにとつては、此の支配者の交迭は大變な禍を齎らすこととなり、延

いてはかのペルシヤ戦役の一因となつたのである。

キルスは其の後東北方國境のサカ人(Sakai)と戦つて居たが、五二九年に交戦中歿するや其の子カンビセス(Cambyses)が位に即き、五二五年にはエジプトを併合した。彼がエジプトに居る間に、魔術師のガウマタ(Gaumata)が王位を篡奪し、一時ペルシヤ國內は亂れたが、王族の一人ダリウス以下七人の貴族が起つてガウマタを殺し、ダリウスが王となつて國の統一は再び回復した。

吾々はかの『ペルシヤ戦役』をよりよく理解する爲に此處にペルシヤ帝國の機構を一瞥しておきたい。ダリウスの支配した世界帝國は、インヅス河からナイル河に及び、其の廣さに於て前古未曾有であつたばかりでなく、其の統治の上からも遙に在來の諸國にすぐれて居た。彼は被征服民族に對しては、『諸國の王』、『諸王の王』の稱號を用ゐたが、ペルシヤ人に對しては族長と言つた地位に立つて居た。ペルシヤ人に次いではメヂヤ人が國內で優遇され、此の兩者がペルシヤ軍の中堅を爲して居た。ペルシヤ軍は騎士と歩兵の弓隊とを主とし、槍は餘り用ゐなかつた。王の意志は即ち法律であつたが、最高官

ダリウスの世界帝國

其の統治組織

吏からなる諮問會議があつた。全帝國は二十餘の屬州に分たれ、之を文武の權を兼ねたサトラップ(Satrap)が治めた。そこでカリヤ、リキヤにあるギリシヤ諸市も亦一つのサトラップ領に入つた(イオニヤ州)。各サトラップ領は定額の租税を納めたが、ペルシヤ人は免税されて居た。ダリウスは亦海上に目を注いだ事を忘れてはならない。此の爲に彼はスキラックス(Scythax)と言ふ者をしてインヅス河口から紅海の北端まで航海させ、又エジプトのネロ二世(Necho)が手をつけて完成しなかつたナイル河と紅海とを結ぶ運河を完成した。なほ彼がダレイコス(Dareikos)と呼ばれる、金貨を發行したことや、帝國內に完全なる驛傳の制を布いたことや、『王の眼』『王の耳』と呼ばれる按察使を遣して、サトラップの政治を監督させたことなどは、何人も知る所である。

## 第二節 ギリシヤ人の第二次海外大發展

八世紀の半から六世紀半かけての、ヘレネスの地中海岸、黒海沿岸への發展は、アレクサンドル大王東征後の東方への發展とともに、ギリシヤ人植民史上の最も華々しい頁

第二次海外大發展の特色

第二節 ギリシヤ人の第二次海外大發展



の、是は近世に於ける白人の植民地經營にも比す可きものがある。勿論ミケネ時代に於ても、人口の増加と政治的發展の結果、ヘレネスは多島海の島々から小アジアへとひろまつた。然し今度の發展は、それが『都市』からの新市建設の運動として行はれたことと、其の主因が經濟的なる點とに於て、前回とは頗る趣を異にし、其の分布地域の廣大なことが、到底比較にならぬのである。人口の増加が、今回も其の一因乃至は間接の原因を爲せることは察するに難く無い。<sup>(1)</sup>或場合都市内部の黨派の争も、之を助成したであらう。

然し最も直接な原因は、八世紀以來のギリシヤの經濟的發展であつた。蓋し山脈重疊たるギリシヤに於ては、フェキア人の場合と同じく、その住民が原料の加工、商品の交換媒介によつて利潤を求むるに至つたのは至極當然であつた。かくて小アジアに於て農業的エオリスに代つて次第に商業的イオニヤが擡頭したやうに、ヘラス本土に於ても、商工業都市が漸く盛となり、原料を購入して、生産品を手廣く賣捌く必要が痛感せらるるやうになつた。嚮にも觸れた様にギリシヤ古史に屢見ゆる海賊(Thuk. I. 4.7.8)から

次第に商業が分離し、合理化されて此處にはゆる資本主義の萌芽を見るに至り、活潑なる都市建設を促した。その結果として生れた地中海沿岸各都市間の大規模な商業取引に刺戟されて七世紀以來、貨幣制度が起つて、商工業に便利するに及び此の新制度はまた都市建設の運動をして益熾烈ならしめたのである。ほゞ六世紀半頃になつて、其の運動が下火となるのは、人口増加の緩和や多數の既設都市の活躍範圍に新市の割込みが困難となつたこと等考へられるが、此の場合は特に前節に述べた政治的關係が重要である。即ち東方に於てはペルシヤ帝國の建設が、西方に於てはカルタゴの發展が、ヘレネスの自由なる活動を阻止したからである。

斯様なわけで、今回の植民は大部分商業植民であり、個々の都市から行はれたのである。市民の一部分が建設者 (Oikistes) に率ゐられて、母市から出かけて行き、植民市 (Apoklia) を新天地に建設したのであつた。都市が建設される前に、先づ商業取引所 (Emporion) が作られ、有望と考へられた處に、都市が作られたと考へられる。なほ此の頃からヘレネスの信仰を受けたデルフィの託宣を伺つて、新市の建設にかゝることも大

分行はれたらしい (Herodot. V. 42)。後世新市建設に與へられたデルフィの託宣と稱するものが澤山存して居たが、是等はみな偽作である。植民地の位置が決定すると、神域を取りのける地が分割され、抽籤で新市民に與へられた。土着民はシラクサ (Syracusae)、下イタリヤ、シザンチウム等に見るやうに農奴とされ、市民の爲に地を耕すのであった。神殿の祭壇に燃える火は、わざ／＼母市から齎されたもので、其の他宗教儀式、曆、フィレの組織等に於て、新市は母市と密接な關係を保つて居た。たゞ政治的には新市は原則として獨立に活動し、母市に依存するやうなことは無かつた。<sup>(2)</sup> 新市の市民は最早母市の市民では無く、隨つて後世のクレルコス (Kleroukhos) — 都市の市民にして他市に土地を有し、移住せる者、例へばレムヌス島 (Lemnos) に於けるアテネ市民のやうな — は全然區別されねばならない。此の植民市の自主獨立の精神は、フェニキヤ人の植民市が數百年の間、フェニキヤの母市に依つて支持せられて來たのとは、著しい對照を爲すもので、西部地中海諸處に於てギリシヤ人がフェニキヤ人の繩張り内に侵入することの出來た主なる原因は、此の點に歸す可きであらう。勿論フェニキヤ人の商品に對するギリシヤ商

品の優越も、與つて力があつたであらうが。

植民に活躍せし諸市

以下二世紀(七五〇頃—五五〇頃)に互つて建設された主なる植民市と、此の植民運動の原動力となつた商業取引の前提たる母市、娘市の農業工業的生産品とを述べよう。此の運動に最も活躍せるものは、イオニヤのミレツス (Miletus)、エウボエヤ島のカルキス (Calchis)、エレトリア (Eretria) の二市、及び地峽附近のメガラ (Megara) とコリント (Corinth) などであつた。是等は悉く海岸にあるか又はそれに近い商工業市である。先づ黒海沿岸の植民は殆ど皆ミレツス市の事業であつた。羊毛、毛氈工業にすぐれたミレツスは當時文化的にも商業的にも、時代の尖端に立つて居たが、リヂヤ王國が起つて以來(六九頁参照)、東方内地との聯絡を斷たれ、其の代償を求める爲に、活潑なる植民に移つたと考へられる。<sup>(3)</sup> 先づキジクス (Cyzicus) アビュス (Abydus) を夫々プロポンチス (Propontis) 及びヘレスポント海峽 (Hellespontus) の南岸に建て、次いで黒海 (Pontus Euxinus) に入り、南岸にシノペ (Sinope) — 是からトラペズス (Trapezus) が出來た — を建設し、西岸から北岸へとトミ (Tomi)、オルビヤ (Olbia)、チラス (Tyras)、テオドシヤ (Theodosia)、

黒海方面の植民市

パンチカペーウム (Panticapaeum) 等而建て、東岸にはディオスクリヤス (Dioscurias) を建てた。ミレツス人がヘレスポントと黒海岸とに作つた都市は、大小九十を下らぬと言はれる (Plinius N. H. V. 112)。かくて黒海南岸の諸市は、此の方面からメソポタミヤ地方と連絡をとり、北岸の諸市は此の地方の氣候が寒冷な爲、葡萄、オリーブの栽培も思ふ様にならず、人口數も決して増加せず、ギリシヤ文化に貢献する所は無かつたが、ロシア地方から木材、穀物、毛皮、奴隸等を輸送するのが其の使命であつた。ロシア地方の穀物は後世プロトメーウス家によつて、エジプトの農業が大發展をする(三〇一頁)まで、ギリシヤの都市國家の食糧問題を解決したのであつた。なほミレツス商人のロシア沿岸發展は、南ロシアから中央アジア、支那北疆に弘まつて居た遊牧のスキタイ人 (Seythians) の文化に影響する所が少くなかつた。スキタイ人研究の盛な今日、是は注目すべき事實である。<sup>(4)</sup> なほメガラ市民も此の方面にビザンチウム (Byzantium)、カルケドン (Calchedon)、ポントスのヘラクレーヤ (Heraclea Pontica) を建設して居る。此の中ビザンチウムは黒海産の鮪の取引を以て聞えた。

エーゲ海北岸  
方面の植民市

金礦、良材、沃野に恵まれたトラキヤ海岸には、エウボエヤのカルキスとエレクトリヤの二市が農業植民地を開き、カルキヂケ半島 (Chalcidice) とマケドニヤ (Macedonia) 海岸も、ポチデーヤ (Potidaea) (フリントの植民市) やスタギーラ (Stagira) (アンドロス島の植民) 等を除いては、全部エウボエヤ島から植民された。(Chalcidice の名は Chalcis から來て居る)。前面のタスス (Thasus) の島は、パルス (Parus) 島から、六六〇年頃植民された。イオニヤ人はキリキヤ (Cilicia) 海岸から東部へも進出を試みたが、アッシリヤ王サンヘリブ (Sanherib) により撃退せられたと、ベロッスス (Berosus) (三二二頁) は傳へて居る。シリヤの海岸は當時アッシリヤの勢力範圍であつた爲、一つも植民地を作ることが出来なかつたが、フェニキヤ海岸で彼等が商業を營んで居たことは、舊約の傳ふる所である。(Ezechiel. 27. 13. 15)

豊饒なナイルの谷は、早くからギリシヤ人の目指す所であつたらしく (Od. 14. 257 ff. 17. 426 ff.)。ところが前節に述べた事情から(六七頁)、此處に活動の天地が彼等に開かれた。先づミレツス人はナイルの河口に城壁を築いて市場を開いた後、プサメチクに

エジプトに於  
けるヘレネス

許されてナウクラチスの市場を作り、其の後又ギリシヤ人最負であつたアマシス (Amasis) 王は此處にギリシヤ商人の定住を許した。定住せずして唯、互市の利を得んとする者は、市外に各市別に地域を與へられ、エオリヤ人、イオニヤ人、ドーリヤ人の各都市から頗る多數の商賈が集つた。アレクサンドリヤの市が、四世紀末に出来るまで、ナウクラチスはエジプト唯一のギリシヤ人の市で、其の商業の殷盛と、様々の人々の集つた所は、今日の上海を思はせるものがある。

## キレナイカ

アフリカ北岸のキレナイカ (Cyrenaica) には、テラ (Thera) 島のドーリヤ人が七世紀に植民してキレネ (Cyrene) と是から分れたバルカ (Barca) とをつくつた。同島の母市は未だ王政を續けて居たので、植民地にも王政 (バットス家 Battadai) が行はれた。キレネ市は農牧、リビヤとの交易、殊に王の專賣であるシルフィオン (Siphion—古代人に喜ばれた食用植物) の輸出に依り仲々豊かであつた。

## 西地中海方面

次に眼を西方に向くれば、此の方面には既に二千年紀の頃から、ギリシヤ人が交通して居たことは、シシリ、下イタリア地方に於けるミケネ時代の遺物の發見が之を示し

て居る。然し永續的な植民の起つたのは、矢張り此の時代からであらう。シシリに最も早く現はれたのは金屬、陶器工業にすぐれたカルキス人で、東岸にナクスス (Naxos)、カタナ (Catana) 等を建て、又シラクサ市の前面のオルチギヤ (Orthygia) 島を占領した。カンパニヤ海岸のクメ (Cumae) も亦彼等の建てたもので、ラテン人、エトルリヤ人等に文化的に少からざる影響を與へた(五頁参照)。ホメルスにその富を謳はれ(II. II. 570)、ギリシヤに於ける軍艦の創始者と傳へられる(Thuk. I. 13) ロリント人がやゝ後れて西方に活動し、有名なシラクサ (Syracusae) 市を建設した。なほコリント人はコルキラ (Corcyra) レウカス (Leucas) アンブラキヤ (Ambracia) 等、イオニヤ海方面の植民にも力をを用ゐて居る。

以上は皆商業植民市であるが、イタリアのタレンツム灣一帯には農業植民地が出来た。是はペロポネッススのアケーヤ人及び中部ギリシヤ人が開いたもので、メタポンツム (Metapontum)、シバリス (Sybaris)、クロトン (Croton) 等であつた。是等の諸市は、其の性質上内地深く發展し、遂にチルレニヤ海 (Mare Tyrrhenium) まで達し、テリナ (Teri-

南イタリアの  
農業植民地

na) ポシドニヤ (Posidonia, Paestum) を建てた。又タラス (タレンツム) (Taras, Lt. Tarentum) がスパルタ唯一の植民市であるのは注意すべきである。なほイオニヤのフォケーヤ (Phocaea) 市民は、イタリアを過ぎて、今のフランスのローヌ (Rhône) 河の河口近くに、マッサリヤ (Massalia) を建設した。是が今日のマルセイユの起原である。

斯様にギリシヤ人が新天地に分布し、到る處土着民と接觸した結果、彼等に民族的自覺が生じたのは争へぬことである。かくてイリヤスの有名な『船の表』<sup>(5)</sup> (Katalogos Neon. II. 530) の『全ヘレネス』 (Panhellenes) と言ふ字を見出す。デルフィ神殿が民族の『共同の爐』 (he koine hestia) として信仰せられ、此處を中心に、全ヘラス本土を包含する宗教同盟 (Amphiktyonia、元來近住者同盟の義) が發生し、アポロの託宣が政治的にもある勢力を振ふに至るのは、此の旺盛な植民地建設の行はれつゝあつた七世紀以來である。同じく八世紀の中から、デルス島のアポロ信仰を中心に、島嶼、イオニヤ、アッチカ等を包含する宗教的結合が出来た。一方ギリシヤ語を語るぬ民族は彼等の言語が不快な所から、擬音的にバルバロイ (Barbaroi) と呼ばるゝに至つた。 (Ilias II. 867. Kares barba-

ギリシヤ人の  
散布と民族的  
自覺

rophiatoi)

知識の開發

なほ此の植民市建設に伴ふ探求航海は、ヘレネスの見聞知識を廣むるに大變役立つた。六世紀になつてミレツスを中心として、イオニヤ地方に、自然哲學や科學が勃興したのは、上述のやうなミレツス人の盛なる探險航海と密接な關係のあることは何人も否みえぬであらう。

- (1) Beloch (Gr. Gesch. I. 1. S. 231) は人口關係を重視し、今回の植民も其の初に於ては商業的活動を目的としたのではなく、みな豊沃な土地を求むる農業植民地建設であつたと斷言して居る。(Odys. VI. 10 参照) (Xenophon, Ergea 376 ff.) に見ゆる、子供を一人に限らしめる主張の如きは人口の過剰を暗示する。
- (2) コリントが其の植民市ポチデヤに毎年監督官 (epidemiourgoi) を送つたり (Thuk. I. 56) 植民市が母市に貢を拂つたり (Xenophon, Anabasis V. 5. 10) するのは例外である。
- (3) 史學雜誌二十五編一號に於て、『イオニヤ叛亂の原因』と題して紹介しておいたから参照せられたい。是は Lenschau 氏の見解である。
- (4) 例へば支那古代の角形飲器兕觥や漢代の騎射狩獵圖の Flying gallop の意匠等はギリシヤ—スキタイ系ではなからうかと言はれる。

(5) イリヤス第二卷の『船の表』はイリオンを攻圍するヘレネスの軍勢を一々國別に挙げたもので、當時の政局を知るに貴重の資料とされるが、幾分後世の作と認められて居る。

### 第三節 政治的社會的大變動

前節に述べた様に植民運動が盛に行はれた頃には、キレネを植民したテラ島の外には、最早王政は見られなかつた。王政の廢止の事情は(九一頁参照)各地決して一樣ではないが、概して平和的に貴族との妥協に依つて行はれたらしい。アテネに於て『王』がバシレウス(Basileus)の名で、第二のアルコン(Archon)として残つて居たことや、コリント及びイオニヤのエフェスス、エリトラー(Erythrae)に於て、王の一族が貴族中に有力な地位を占めて居たことは此の事情を物語る。かくて貴族の優越、政權獨占の時代が現出した。然し次に述べる種々の經濟的現象は、漸く平民の擡頭を馴致し、特異な政治的變遷を展開し、五世紀に至つて遂に平民の勝利となつた。吾々は此の期間を總括して過渡期と呼ぼう。

王政より貴族  
政への過渡

奴隸使役の風

過渡期に見られる一の現象は奴隸(doulos)の使用である。ホメルスには未だ奴隸賣買の記事はなく、捕虜の如きも多く身代金みしろを取つて敵に戻すか、或は殺戮する風があつた。然るに植民地建設によつて一層進展した商工業は、到底自由市民の僅少な、貴重な労働で、其の要求を満足することが出来なくなつた。其の上ギリシヤ人が新に發展したボントス地方、トラキヤ海岸、シシリ、南部イタリアは善き奴隸の供給地であつた。かくて今迄に見なかつた奴隸賣買の風が起つたのである。キウス(Chios)島は最初に奴隸を輸入したので有名であるが(Athenaios VI. 265)コリント、ヒギナ(Aegina)、ミナツス、カルキス等の工業市も皆之を用ゐるやうになつた。然しまだ自由民の生業を壓迫する程ではなかつたと考へられる。<sup>(1)</sup>

(1) 奴隸の使用は、特に此の早い時代に就いては餘り誇張して考へられてはならぬ。彼等は勿論主人の財産であつたが、家族の一員と見做されたことは doulos の他に oiketai(元來「家の人」の義)と言ふ名の存する事が示して居る。なほ Meyer の Kleine Schriften Bd. 1 の Die Sklaverei im Altertum を参照せよ。

奴隸にも増して社會變動を促進したものは、貨幣の使用であつた。是は先に觸れた様

## 貨幣の流通

にギリシヤ人の商業的活躍の影響の中に生れたらしくリヂヤに於てメルムナード王朝の初代の頃(七〇〇頃)に始まり(Herod. I. 94)、やがてイオニヤの植民地を経て、ギリシヤ本土の商業都市に廣まつた。最初小アジャに於ては、エレクトロン(electron 金に銀を混ぜたもの)の貨幣が行はれたが、やがて金、銀貨が現れた。前章にも觸れたやうに、(一八頁)銅、鐵を秤量貨幣として又は一定の形で、交換媒介に用ゐることは、以前から行はれて居たが、今や主權者の證明を附した小さな圓形の貨幣の出現した事は正に劃期的事件であつた。在來の銅鐵に代つて、貴金屬の金銀が用ゐらるゝに至つたことも、植民地の大發展に伴ふ大規模の商工業には、頗る便利であつたに違ひ無い。

斯様な奴隸使用、貨幣流通は、家畜の數と所有地の廣大とを勢力の基礎として居た貴族の地位を動搖せしめたことは察するに難くない。彼等の中でも時代の趨勢を悟る者は、自ら移住者を率ゐて新天地を開拓し、又自身商工業に従事した。然し一般平民(demos)が商工業を營み、富を蓄積して侮り難い勢力を得るに至つたことが、此の過渡期の特徴であり、一切の社會問題は茲に端を發して居る。いはゆる『金即ち人』の時勢となつた。

## 平民の擡頭

人々は最早門地に依らず、富の大小に依り評價さるゝに至つた。<sup>(1)</sup> 斯様な平民の擡頭に加へて以前貴族と平民との利害の調停者とも言ふべき位置に立つて居つた『王』は、最早存在しなかつた。之に永く政權獨占に腐敗した貴族の專横と利己的行動とが加はつて、平民との抗争は次第に尖鋭化したのである。吾々は此の社會的趨勢がいかなる結果を生んだかを考察せねばならぬ。

(1) 六世紀後半のメガラの貴族テオグニス(Theognis)は時勢を察して自ら商業に従つたが失敗し、その鬱憤を叙情詩の中に洩らして居る。その一節(185 ff.)は當時の社會状態を知る上に頗る有益であるから左に意譯しよう。

曰く『貴き者も持參金多ければ賤き者の娘を娶り、「生れ高き」女も生れ賤しき富人の妻となつて恥ぢず。是黄金を尊ぶ故ぞ。……宜なる哉、市民の門地は地に墜ちぬ。貴きと賤しきとのけぢめ失せれば』と。

平民の要求は先づ第一に成文法の制定を促した。在來の習慣法は全く貴族の行使する所であり、一定の成文なきため、裁判官たる貴族の氣儘や偽誓、賄賂等によつて、一般平民には耐へ難きものとなつて居た。<sup>(1)</sup> かくて七世紀を通じてギリシヤの多くの市に於て、

## 成文法の制定

## 第三節 政治的社會的大變動

成文法制定が行はれた。此の際市民の一人、又は外部の調停者に全權が委ねられ、彼の意思に依つてきつぱりと法文が定められた。<sup>(2)</sup> 有名な立法家としては下イタリヤのロクリ (Locri) のザレウクス (Zaleucus)、シシリイのカタナ (Catana) のカロンドス (Charondas)、アテネのドラコン (Dracon)、ソロン (Solon)、ミチレネ (Mylene) のピタクス (Pittacus) 等の名が傳はつて居るが、是等以外の諸市でも時勢に従つて、夫々成文法が出来たと考へられる。なほクレタ島のゴルチンの法律は、刻文の形で保存せられ (古い斷片は七世紀に達する。一八八四年發見の十二板法は五世紀に刻まれたもの) ギリシヤ法制史上最も重要な史料である。

- (1) 讀者はかの詩人ヘシオズスが、ペルセスとの裁判沙汰に就いて洩らした不平を想起せよ。
- (2) 是等の法律も、其の内容から言へば、未だ幼稚なもので復讐法とも言ふ可き性質を帯び、頗る慘酷な刑法が多かつた。矢張り被害者の告發が、裁判の前提であつた。なほ Beloch (Gr. Gesch. I 1 S. 350) の様に Zaleucus, Charondas, Dracon 等の名を、スバルタの Lycurgus (106頁) 同様に、語原學的に解釋して、其の實在を否定する考には賛同出来なく。

僭主(チュラン  
ノス)の出現

成文法を獲得した平民は、次いで政權上の平等を求めた。然し完全な民主政治に達するまでには、様々な曲折が無ければならなかつた。かの僭主(チュランノス Tyrannos) は實に此の政争の産物である。「チュランノス」と言ふ語は、小アジア方面からの借用語と言はれる。勿論其の當初に於ては今日の「暴君」の義は無く、多く貴族に屬して其黨與と不和となり、平民に投じて其の信頼を得、クーデターに依つて都市の獨裁權を篡奪した人物を指すのであつた。君主 (Monarchos) 王 (Basileus) と同義に用ゐられた場合も多いが、之は本來王とちがつて、正統 (legitimate) なものでない爲、其の地位を獲得し維持するには、仲々苦心を要し、彼等はしばしば武力によつて身邊を警戒せねばならなかつた。然し人民の信頼を獲得するものは、決して凡庸な輩のよくする所ではない。初代のチュランノスは多く有能の士で七賢人(一一八頁)の中に數へらるゝものもあり、政治の改革に、又は植民地の建設に盡力し、又詩人を聘して文物の興隆を圖る等母國の發展に貢献する所が多かつた。然し僭主の子孫は早くも貴族的生活に馴れて父祖の業を忘れ、一層の權力伸張を要求する民衆にとつては邪魔物視せられ勝であつた。その爲め

僭主の人物



僭主政治はせいぐ一代か二代続いたのみで、三代と続いたものは殆どなかった。其の子孫は多く追放せられ、タイラント殺害者は人民から非常な歓迎を受けたのである。

多くの社會的現象と同じく、此の僭主も亦最初小アジアのイオニヤに現れた。リヂヤの王朝に對し獨立を維持する爲には、都市内部の黨争を和解せしめることが必要であり、強力な一人者の出現を可能ならしめた。なほ隣のメルムナード朝の諸王の財寶と權勢も亦僭主に一の手本を示したに違ひない。かくて七世紀末には、ミレツスには僭主の模範と言はれたトラシブルス(Thrasylus)が現はれ、サムスにはポリクラテス(Polyrates)が現はれ、ともに母國を非常な繁昌に導いた。前者は頑強にリヂヤに對抗して母國の獨立を保ち(六八頁)、ポンツス方面への大植民も、多く彼の下で爲された。後者は非常に殘忍な一面があつたが、サムスをして當時エーゲ海上の覇者たらしめたのである。やがてペルシヤ人が支配權を伸ばした時、彼等は好んでギリシヤ都市に自己の好む僭主を入れ、之を利用して市民中のペルシヤに反抗する分子を鎮撫させた。(一一一頁)。

ヘラス本土を見るにコリント市では九十年にわたるバックヤダイ(Bacchiadae)の支

小アジア方面  
の名僭主

ヘラス本土の  
僭主

配が、六五七年頃其の一族キプセルス(Kypselus)により仆され、其の子ペリアンドルス(Periandrus)が其の後を繼いだ。七賢人の一人に數へらるゝ此の僭主も傳承により毀譽様々であるが、彼が市民に奴隸輸入を禁じたと言ふ事實は注目し價しよう。コリント市は内政改革、海外植民の着々行はれた此の僭主の時代を以て其の勢力の絶頂となすことが出来る。メガラ市も農民と貴族との抗争が僭主テアゲネス(Theagenes)を生んだ(六五〇頃)。シキオン(Sicyon)は元來商業市では無かつたが、富裕となつた農民と貴族との抗争は、此處にもクリステネス(Clisthenes)等の僭主を生んだ。なほエビダウルス(Epidaurus)のプロクレス(Procles)、フリウス(Phlius)のレオン(Leon)等、皆僭主であり、アテネでも後れ馳せに、六世紀の半になつて、ピシストラツス(Pisistratus)の僭主政を見た(後述)。

シシリヤ方面は東方より稍々後れて僭主が出た。此處では、イオニヤに似て、カルタゴ人やエトルリヤ人(Etrusci)等の異民族に對して母市を保護する必要上、軍事的指揮官の地位が、僭主發生の媒介となつたらしい。中でもアクラガス(Acragas)のフラリ

シシリヤの僭  
主

ス (Phalaris)、シラクサのゲロン (Gelon)、ゲラ (Gela) のヒエロン (Hieron) 等が著名である。

以上概観し來つた過渡期の政治的變遷は、アテネに就いて最も明瞭に窺ふことが出来る。尤も九、八世紀と、七世紀前半に就いては、此處でも傳説と偶然に傳はつた記事とが散見するだけであるが、其の後に就いては、一八八〇年エジプトのファユーム (Fayoum) から發見されたアリストテレス (Aristoteles) の「アテネ人の憲政」<sup>(1)</sup> (Athenaion Politeia Ath. Pol. と略記す) のパピロス斷簡が多くの光明を齎らしたのである。故に吾々はしばらく此のアテネの發展を跡づけて見よう。

(1) 原隨園氏の本史料の譯『アテナイ人の國家』(岩波文庫)は、詳細な註釋を附して、過渡期から民主政完成までのアテネの政局、政治機關を知るのに頗る便利である。本小冊子は到底是等の制度研究の詳細に立ち入ることが出来ぬ故、讀者は同書を参照せられよ。なほ本資料を中心にして、アテネの制度を研究したものに Wilamowitz Moellendorf の “Aristoteles und Athen” の名著がある。

アッチカのやうな廣大な地域が、アテネ一市の下に統一されたことは、第四章に述べた

都市の興起とは、別に觀察されねばならない。考古學の教ふる所に依ると、アッチカのアカルネー (Acharnae) や、トリクス (Thoricus) や、エレウシス (Eleusis) には、かつてアテネからは獨立せる主權者が住んで居たのである。<sup>(1)</sup>

『テセウス (Theseus) のシノイクスモス』の名で傳はるアッチカの統一も比較的後世まで繰り下げられるかも知れない。王政時代、貴族政時代に關して傳はる所は、傳説に過ぎず、王政から貴族政への轉換を示す終身のアルコン、十年任期のアルコンの實在も疑はれて居る。とにかく王權が平和裏に貴族の手に移つたことは、第二位のアルコンがバシレウス(王)と呼ばれて、宗教事務を掌つて居るので分る。之に第三位のアルコン、ポレマルクス (Polēmarchus) (軍事を扱ふ) と、六人の立法官 (Thesmothetai) が加つて九人の官僚が成立した。之と王政時代から續いたアレウパゴス (Areopagos) 會議とが、貴族政時代の行政機關であつた。

(1) アテネのエレクテウス (Erechtheus) とエレウシスのエウモルプス (Eumolpus) の戰の傳説を想起せよ。

キロンの失敗

アッチカに於ては、比較的永く貴族政治が維持せられ、商工業的發展も、永い間近隣のメガラやエギナ、コリントに立ち後れて居たらしい。<sup>(1)</sup>他の諸市が盛に植民に熱中して居るとき、アテネからは一つも新市が出来て居らぬのである。然し七世紀の後半になって、貴族の地位が漸く動搖の兆を示した。此の機運に乗じて僭主たらんとしたのがキロン (Cylon) であつた。彼は六四〇年のオリムピヤ競技の勝者であり、(Eusebius. 1. 198) メガラの僭主テアゲネスの女婿となり、岳父に倣ひ、彼の後援を得、又同志を募つてアテネにクーデターを試みたが、豫期に反して農民が政府に忠實であつた爲に失敗し、アクロポリスにかこまれ、彼自身は逃れたが、朋輩は時のアルコン、メガクレス (Megacles) に殺された。<sup>(2)</sup>

(1) 勿論アッチカにも商工業は起りかけて居た。農産にはオリヅ油があり、又デビロン式陶器(五二頁)の製造も盛であつた。アルクメオン (Alkmeon) がサルデスに於て、クロエスス王から莫大な黄金を獲た話 (Herod. VI. 125) は、リヂャとの商業關係を暗示して居る。

(2) アルクメオンと其の一族は、神殿に於てキロンの一派を殺戮した爲、ミロン (Myron) に告發され、ソロン(九四頁)の大赦まで追放せられてゐた。キロンの事件は、此のアルクメオン家の瀆神罪 (agos) に關係して、偶然に傳つて居るので (Herod. V. 71. Thuk. I. 112) 年代其の他ははつきりしないが、ペロッパのやうに (Gr. Gesch. I. S. 369) 六世紀に繰り下げるのはどうかと思ふ。

ドラコンの法律

六二四年頃(アリストアイクモス (Aristaichmos) のアルコンの時、Ath. Pol. IV) ドラコンの立法が行はれた。『アテナイ人の憲政』四章に述べてあるドラコンの法律 (Politeia) の内容は、明かに五世紀の寡頭主義的捏造であるが、彼の立法家としての存在は決して疑はる可きでは無い。<sup>(2)</sup>彼の法律は血を以て書かれたと言はれた程に、頗る苛酷なものはあつたが、殺人に關して、謀殺と過失致死とを區別したのは、著しい進歩であつた。とにかく斯様に成文法が出来た結果、民衆は司法權の公正を贏ち得、社會の秩序は進んだに違ひない。

(1) 原氏譯本註 P. 112 以下に詳し。

(2) Beloch 一派は、Dracon の名が蛇、龍を意味する結果、是はアクロポリスに祀らるゝ蛇神エレクトテウスの啓示として、アテネの法が考へられたことを示すに過ぎぬと言ふが此の懷

疑的態度は一般に認められなす。(Meyer: G. d. A. II. S. 641.)

然しドラコンの法は、其の基調に於て貴族社會の慣習を成文とせるものであつたから、漸く擡頭し來るアッチカの商工階級の要求を満すことは出来なかつた。當時貨幣制度が廣く行はれた結果、自由農民が借金を拂ひ得ないで、奴隸に賣らるゝものが多く、一方には大地主に隸屬して移住權なく、收穫の六分の五を拂ふ農民(Hektemoroi)の地位も改善される必要に迫られて居た。

此の頃漸く商業的發展の緒についたアテネ人は、ヘレスポント方面に進出して、シゲイオン(Sigeion)を占領し、永い間ミチレネ人と争つたが、遂に其の領有を認められた。又アッチカの直前に横はるサラミス(Salamis)島は、メガラが有つてゐたが、アテネ人は之に眼を注ぎ、メガラ人から奪はうとしたが失敗した。此の時(六世紀初頭)アッチカの古王家メドンチデー(Medontidae)の末裔で、隆興しかけた商人階級に屬するソロン(Solon)といふ者が奮起し、人々をばげまして遂にサラミスをアッチカの領土となした。<sup>(1)</sup>ソロンは此の成功に依つて大いに名聲を高めた結果、五九四年<sup>(2)</sup>貴族平民兩派は彼をアルコンに

選び、『調停者』として社會の改革を行ふ様全權を委ねた。彼が貴族の出であり、同時に商人であつたことは、特に此の役に好都合であつた。且つ彼は非常な理想主義者であり、憂國の士であつた。一黨に偏せずチュランノス(僭主)となる野心も無く、よく大改革を行つて社會の弊害を除き得たのである。彼を民主主義の開祖とするのは後世の考で、其の誤なることは以下によつて明かとならう。

彼の爲すべき改革の中最も重大なのは、貸借法であつたが、彼は勇敢にも當時の一切の負債を帳消しとし(Seisachtheia)、負債に對して身體を束縛することを禁止し、現在奴隸となつてゐた農民を自由の地位にかへし、外國に賣られた者を購ひ返した。次にヘクテモロイ(九四頁)を全部解放して自由民と爲した。然らば彼は是等の新自由農民に與ふ可き地を、何處から得來つたか? それは大貴族地主の所有地を制限し、剩餘を沒收して之に充てたのであらうと推測せられる。當時激昂した民衆は、土地の均分を要求したが、ソロンは決して之に耳を藉さず、中庸の道を探つたのである。『何事も適度に』(meden agan)と言ふ諺が彼の言葉として傳つて居る。更に彼はアッチカ住民のすべてを

市民の四階級  
制定各階級の義務  
と権利

アテネ市民とし都市と地方との政權上の差別を撤廢した。以上によつて農民の不平は緩和せられた。次に商人階級の政權要求に對して、彼は完全なる金權制度(Timokratia)を布き、收入によつて市民を四級に分つた。第一級は自己の所有地から五百樽の收穫(固形、液状を問はず)を作る者、第二級は三百樽を作る者、第三級は二百樽を作る者で、其の以下が第四級であつた。<sup>(3)</sup>かくて市民の權利義務も、此の四級によりて差等があつた。上の三級は武装して戰場に出る義務があり、第一級ペンタコシオメディムノイ(Pentakosionmedimnoi—五百樽の人)と第二級ヒッペイス(Hippeis—騎士級)とは騎士として、第三級ゼウギタイ(Zeugitai)は重歩兵として出征した。第四級はテタイ(Thetai)と呼ばれ、戦時には水夫となるか又はせいぜい輕歩兵として働いた。政權も亦之に應じて定められ、大官になりうるのは上の三級に限られ、殊にアルコンとアクロポリスのアテネ神殿の財務官(Tanarai)には第一級の者だけがなれた。九人のアルコンは以前はアレウパゴスに依つて選舉せられたが、これからはアツチカ四フィレの各フィレが十人づつを選出し、計四〇名の候補者から、抽籤によつて定められた。テタイ級も民會と陪審裁判に參與するに

至つたのは(Plut. Solon. 18)、頗る注目すべきことで、民衆擡頭の端緒を爲した。其の他四百人會議が、ソロンにより作られたが、其の内容はよく分らない。

ソロンは以上の他度量の改革も行ひ、商業に便した。即ち外國からアツチカへの移住者にある制限の下に市民權を與へた爲、多數の商工業者がアツチカに移住し來つた他、彼は今までのアルゴスのフェイドンの法を廢し、エウボエヤの幣制度量を採用し、是によつて、エウボエヤ、カルキデケ、コリント、シシリーとの貿易を盛ならしめた。又刑法の方面では、殺人に關する、ドラコン法を改めて、時宜に適するやうにし、又一種の彈劾法(nomos eisangelias)を定めて、市民の不正を除くこととした。ソロンの法律は其の後ギリシヤ各市に行はれ、殊にデルス同盟(一五一頁)の時代には同盟諸市に採用せられた。ローマの十二銅板法にも其の影響が見え、アレクサンドリヤ市(三〇一頁)の法律にも其の痕跡が認められる。

- (1) サラミス島に關する繫争が決定したのは、後に述ぶるピストラッスの時であつた。
- (2) ソロン、アルコンの年代に關しては、史料記述の矛盾から定説が無い。原氏譯『アテナイ

ソロン法律の  
公布

人の國家』一三五頁を見よ。

- (3) 此の階級別は全く農耕地の大小によつたもので、新興の商工階級は問題となつて居らない。それで多分五八一年頃當時の相場により一ドラクマ(Drachma 約四十錢)を穀物一樽(medimnos)に當るとし、商工階級もその年收によりソロンの四階級に入れられたらしむ。(Glottz: The Greek city P.121)

ソロンの改革  
に對する不平

アッチカの三  
黨

かくソロンの改革は多方面に互り、穩健で時宜に適して居たものの、民衆は土地均分(anadasmus ges)の望みを失ひ、貴族は自己の損失の大なるを憤り、共に不満の色があつた。ソロンが政治詩を作つて人々をなだめ(Ath. Pol. 12)、自ら慰めつゝ外國に放浪の旅に立つて後、政争は再び起り、アルコン選挙の行はれぬ年もあつた。當時アッチカは凡そ三つの黨派に分れて居た。其の一は海岸黨(Parahoi)で、アルクメオン家のメガクレス(Megacles)に率ゐられ、商工業を營む中流階級であつた。其の二はリクルグス(Lycurgus)に率ゐる平原黨(Pediakoi)で、大地主より成り、貴族政治への復歸を求めて居た。第三は山地黨(Diakrioi)で、急進的な民主主義を好む者であつた。ピンス

ピストラツ  
ス僭主となる

トラツス(Pisistratus)が其の領袖であつた。

其の海外發展  
策

其の内政

此の最後のピストラツスは、遂に他の二派を壓して、チュランノス(僭主)となる事に成功した(五六一年)。其の後反對派の策動によつて失脚し、アテネから追放されたが、<sup>(1)</sup>トラキヤ沿岸に於て金山を占領し、十分の資金を得て、自己の根據地なるアッチカ北部に上陸し、パレネ(Pallene)の役に敵を破り、再び僭主となり、五二八年に及んだ。ピストラツスの統治は、他の多くの僭主のその如く、アテネ市にとり最も花々しい一時期を劃するものであつた。在來萌芽を見た海外發展策は、彼に由つて熱心に遂行せられ、サラミス島は完全にアテネの有と決定し(九四頁)、貴族の一人ミルチャデス(Miltiades)は、彼との諒解の下に、ヘレスポントを扼するトラキヤのケルソンネスス(Chersonnesus)を占領して、一の侯國を作つた。此の政策の結果アテネの商工業がいかに隆盛となつたかは、イタリヤ、黒海岸、ナウクラチスに於ける考古學的發見の示す所である。彼は又内政にも留意し、特に農民が田園をすてて、市に集中するのを防止し、資金を與へて閑地を耕作せしめ、村々に裁判所を設け、自分も屢々村々に出て民情を視察したら

しい。たゞ十分の一の税（一説5%。Thuk. VI 54）を取り立てたのは、僭主として已むを得なかつたらう。<sup>(2)</sup> 彼は五六六年既にパンアテネヤ（Panathenaea）の祭を創めて居るが、（Eusebios による。Ol. 53. 3）僭主となつて後も、盛に文藝を保護し、市を飾り、水道を起した。（是等はなほ後の『過渡期文化』の節で説く）。とにかく彼の統治は民主的な博愛溫和なものとして、後世から『クロノス（Kronos）の時代』<sup>(3)</sup>を以て目せられて居たのである。

(1) Ath. Pol. (14-15.) (Herod. I 60. 61) の記事を其のまま信ずれば彼は二度追放せられたわけであるが、是は一度の追放に關する色々の記事が、二度の出來事と誤解せられた結果と考へられる。（Beloch: Gr. Gesch. I 2. S. 288 ff; Meyer. G. d. A. II. S. 772）（原氏「アテナイ人の國家」註 P. 142 以下）。

(2) ヘレネスに於ては元來市民は直接税は課せられなかつた。尤も國家危急の場合には財産税が課せられたが。同時に役人の仕事は皆無報酬であつた。是は貴族政治時代の遺風と考へられる。

(3) ヘシオツスの『仕事』(Erga) 106-120 に見える豊穰平和祝福されたる黄金時代。

ピシストラッ  
スの二子—ア  
テネ僭主政治  
の末路

ピシストラッスの死後、其の正妻の子ヒッパルクス（Hipparchus）とヒッピーアス（Hippias）が、父の業を繼いだ。ヒッピーアスは政治家肌であつたが、ヒッパルクスは好色家で文藝を愛好し、詩人アナクレオン（Anacreon）、シモニデス（Simonides）をアテネに招いた。ヒッパルクスがハルモデウス（Harmodius）とアリストゲイトン（Aristogiton）に殺害せられたのも、決して政治の上に關した事ではなく、ある男色關係からであつた（Ath. Pol. 18）。此の事件の後、ヒッピーアスは漸く苛酷暴戾となつて多くの人を追放、殺戮し、後世いはゆるタイラントの振舞ひがあつた。身の危険を防ぐ爲に、彼はアッチカのムニキア（Munichia）に要塞を作り、又ペルシヤと結託した。此の結果亡命中のアルクメオン家の貴族はスパルタ王クレオメネス（Cleomenes）の後援を得てアテネに歸り、人民と共にヒッピーアス一族をアクロポリスに圍み、遂に一族を亡命させた。かくてヒッピーアスはペルシヤに逃れ、アテネの僭主政治は四十九年にして終つた。

僭主追放後アテネに於ては僭主の友であつたチサンドルス（Tisandrus）の子イサゴラス（Isagoras）とアルクメオン家の一族クリステネス（Clisthenes）とが互に政權を争つた。

イサゴラスは一時クレオメネス王と結托して政權を握つたが、アテネ民衆は之に反抗し、遂に兩者と其の與黨を退去せしめ、政權はクリステネスに歸した。

そこでクリステネスは其の改革の抱負を實現することができた。彼は貴族の出であるが、よく時勢を洞察し、完全に貴族の政權を打破することを方針とし、フィレ制度の改造が、彼の改革の眼目となつたのである。在來アッチカの四つのフィレ(Phylae)は、上古の血縁觀念こそ既に失せては居たが、貴族活動の地盤であり、その爲に、アッチカ内に地方的利害の反目が止まなかつた。彼は斷然この組織を破壊し、先づアッチカ全土を都市せ、區域(Astu)、海岸(Paralia)、内地(Mesogeia)の三部に分ち、此の各々を十のトリッチュエス(Tritunes)に分つた。かくて上の三地方の中の一つづつから、抽籤に依つて各、一のトリッチュエスを取り出し、地域的に遠く離れた此の三つのトリッチュエスを組合せて、新しい一つのフィレを作つた。そこで在來の四つのフィレに代つて、十のフィレができた。此のフィレは更に多數のデモス(Demos 村のやうなもの)を含んで居る。<sup>(1)</sup>此度のフィレは名前こそ前代のそれを存して居るが、全く機械的な結合であつた爲、最早貴族が多年有つ

てゐた權力を振ふ餘地が無くなつたのである。之に由つてソロンが目指した(九六頁)都鄙の政治上の平等は完成され、デモスに屬する者即ちアテネ市民となつたのである。今まで市民の中に入らなかつた奴隸や、移住者の子孫も市民に數へられ、此の主義を徹底する爲、市民は今までのやうに、氏族名と父の名を自分の名に附することをやめ、其の代り自分の屬するデモスの名を附する定めとなつた。

フィレ改造に伴なつて行はれた改革として、ソロンの四百人のブーレー(Boule)の代りに、各フィレから五十人づつを出して、五百人會議が出来、又各フィレから一人、都合十人のストラテゴス(Strategos 將軍)が選舉されることとなつた。各フィレから出た五十人は、プリュタネイス(Prytaneis)と呼ばれ、一年の十分の一づつ政務を執つた。

最後にクリステネスに就いて有名なのは、オストラキスモス(Ostrakismos)といふ危険人物放逐法の創始である。<sup>(2)</sup>是は新に生れ出た民主主義の擁護の爲に、ピシストラツス一派の僭主の再現を防止する手段であつて、毎年民會に諮るに、國內に僭主とならうといふ野心家の存在する恐あるか否かを以てし、若し其の恐があると決定するときは、日を



定めて市場に於て、オストラキスモスを行ふのである。其の方法は市民が附近に散在する陶器の破片 (Ostraka) を拾つて、それに野心家と思はれる者の名を記して投票するのである。其の結果或人の名が六千票以上に記された場合には、其の人は市から追放せらるゝ定めであつた。<sup>(3)</sup> 此の制度が實施せられたのは、遙か後の四八八年であつたが、後之が本來の目的を離れて、政争の具に供せらるるに至り (二一五頁)、約一世紀にして廢滅するに至つた。

## (1)

ヘロドツスは各フィレは十のデモスから成つて居ると言ふが (V. 69)、是は誤らしい。ストラボは一七四デモイ存在したと言ふ。各デモスは獨立の政治區域で、其の頭デマルコス (Demarchos) の下に、獨立の財産や神々を持つて居た。

## (2)

オストラキスモスは Ath. Pol. 22 に依れば、クリステネス創始後二〇年を経て、はじめて實用せられて居る。是は怪しいとして、其の創始年代を繰り下げる考がある。(Beloch: Gr. Gesch. II<sup>2</sup> 1 S. 29)。然し定説ではない。要するに此の制度の起源に就いては古典の記述が不充分である。

(3) 是は Philochorus (F. H. G. I. P. 396) によつて Plutarchus Aristides. 7. 参照。

以上吾々は過渡期の典型的な政治的、社會的變遷を經來つたアテネの歴史を見た。然し一方には是と並んで全く反對な道を進んだ國のあることを忘れてはならない。それは即ちスパルタである。しかもスパルタはアテネと相並んで七—四世紀の間、ギリシヤ史上に最も重要な活動を爲して居るから、吾々は此處に其の歴史を一應顧みねばならぬ。吾々は典雅なるアテネに對して武骨、素朴、原始的なスパルタを考へる。然しか様な特異な生活が残つたのには、それ相應の歴史的理由が存在するのである。

タイゲツス (Taygetus) 山とパルノン (Parion) 山は、はさまるゝエウロタスの谷に侵入したドーリヤ人の一派 (二八頁) は、先住民のアケーヤ人を征服して、此處に一の征服國家を建設した。土地は新來者の間に抽籤で分たれ、先住民はヘロット (Heilotai 隸民) に下され、農奴の如く主人の土地にしばらく主人に一定の收穫を納めねばならなかつた。又地方の都市に住み、商工に従ふ者はペリオイコイ (Perioikoi) と呼ばれ、身體は自由であつたが、政權は持たなかつた。小數のスパルタ人は是等の隸民の上に搾取者として地主として生活して居た。たゞ彼等の恐るゝ所は、被征服民の數が自己よりも遙に大で、

又盛に増加することであつた。<sup>(1)</sup> 此の内部の危険に對する恐怖と外部に向つての征服慾とは、スパルタ人をして極端なる軍事的國家を成立せしめ、<sup>(2)</sup> これはゆる『リクルグス (Lycurgus) 法』の規定に依つて、一切の奢侈と經濟的活躍とを卑下せしむるに至つた。傳説に言ふ立法家「リクルグス」が實在の人物ではなくて、四世紀の思想的産物であることは、最早學界の定説である。傳説の作者が誰であるにせよ、それは四世紀の民主政に對する反動時代のスパルタ崇拜主義と、特異なるスパルタ生活を説明せんとする努力との産物と見做してよからう。<sup>(2)</sup> 吾々は傳説の假面を排して、彼等の生活の真相を窺はう。

(1) 假にヘロドツス (IX 23) によると、プラテーエーの役 (一四六頁) に出陣したスパルタ人は五千人、ヘロットは三萬五千人で市民一人に對し七人の比である。なほ此のヘロットを解放する事は國家の權限に屬し各所有者には許されなかつた。吾々は此處にもスパルタ的なるものを認める。

(2) 此の傳説が四世紀のエフォルス (Ephorus) に至つて、始めてまともまつて記述せられて居ることが、立法家實在否定の有力な證據である。リクルグスの名はラコニヤに於けるゼウス、リュカイオス (Zeus Lykaios) 崇拜と關係があると言はれる。なほ詳細は原隨園氏著、「ギリシヤ

史研究」中の「リュケルゴス傳説と其の文化史的意義」を見よ。

先づ其の政治組織を見るに王は原始時代の『人民の指導者 (dux)』乃至は『同等者中の第一人者』 (Primus inter pares) の性質を永く持續し、外戦には軍隊を率ゐて出征した。スパルタには古來二つの王家 (アギアダイ Agiadai とエウリポンチダイ Euryponticai) が存して居るが、其の發生の事情は詳でない。太古の「長老會」も亦貴族會其の他に變形しないで、其のまゝ維持され、後世では六十歳以上の長老二十八名と、二人の王から成り、元老院 (Gerousia) と呼ばれた。自由民の平等の原則も此處では維持せられ、三拾歳以上のスパルタ人は悉く平等者 (honorioi) であり、古の部族會議に當るアラ (apella) と云ふ會議を開いて國事を議した。スパルタ人の間にも勿論時を経るに従ひ貧富の差別を生じたが、被征服階級に對して彼等は常に自ら貴族階級を以て任じて居たらしいことは、スパルタが他市の政争に際して、いつも貴族、寡頭主義を後援し、民主的色彩の濃厚な僭主政治を顛覆するを天職と考へて居た (一〇一頁) ので明かである。

斯様な政治組織を持つたスパルタには、正當な意味のポリス (polis) は發達しなかつ

スパルタ人の  
指導精神と日  
常生活

た。スパルタの市も元來隣接する五箇村の結合で、城壁を廻らざるを以て誇として居た。此處でも二人の王は時代につれて次第に「役人」乃至「將軍」の地位に下つたが、之に代り政治の實權を握つて居たのは、毎年改選せられる五人の監督官(Ephoroi)であつた。政治組織と俱に、彼等の日常生活も亦特異なものであつた。國家觀念、義務觀念、名譽觀念、是等が一切を規定する指導精神であつた。虚弱なる赤子が國家の利益の爲に棄てられたことや、兒童が満七歳に達して母の手から國家の養育所に委ねられ、年齢別の「群」(agelai)に分屬して、身心を鍛鍊し、苦痛に耐ふるやう訓練せられたことは何人も知る所である。太古以來の共同食事(susitia, phitia)の風も永く保存せられ、各人が所有地の産物を持ち寄つて同じ天幕の下で食事した。二十歳に達した青年は兵士の仲間に入れられたが、嚴格なる規律は此處でも毫も變らなかつた。戰場に於て持場所を退く如きは、殊に不名譽の事とせられた。女子も此處では體育及び音樂等に從ひ、國家の爲よき子を生む事がその第一の務であつた。此の爲には一妻多夫的行爲迄も許されたりし古典は傳へて居る (Xenophon : Lakedaimonion Politeia I.8-9 等)。

スパルタの國  
境擴張

第一回メッ  
セニヤ戦役

吾々は此の特異な軍國主義國家スパルタが、外部に向つていかに侵略の手を伸したかを觀察せねばならぬ。スパルタの政治史は八世紀頃から幾分分明となる。此の頃スパルタはアルゴス、アルカヂヤ方面へと國境擴張を心がけて居たが、スパルタ人の人口が増加して、新なる土地が必要となつたとき、彼等を最も誘つたのはタイゲツス山の彼方、豊饒なるメッセニヤ (Messenia) の平野であつた。其の結果八世紀の後半、いはゆる第一回メッセニヤ戦役が起り、スパルタ王テオポンプス (Theopompus) は二十年の苦戦の後、イトメ (Ithome) の城を降して、メッセニヤ征服を完成した (Tyrtaios frg. V Bergk.)。メッセニヤ人は獨立を失ひ、ラコニヤの先住民同様ヘロットの地位に下され、收穫の半をスパルタ人に納むることとなつた。しかし斯様な屈辱は、メッセニヤ人の永く耐へ得る所では無かつた。七世紀の半になつて、彼等はスパルタの敵アルゴス、アルカヂヤの後援を得て獨立回復の爲の大叛亂を起し、いはゆる第二回メッセニヤ戦役となつたのである。此の頃アルゴスには有名なフェイドン (Pheidon) が王であつた。彼はアルゴスをペロポネッス中第一の強國とし、エギナ (Aegina) の島をもアルゴス領とした。當時アルゴスが經

アルゴスの隆  
盛

第二回メッセ  
ニヤ戦役

濟的にもいかに優越であつたかは、いはゆるフェイドンの度量衡が廣く分布したのでも分る。此のフェイドン王がメッセニヤ蜂起の有力な影武者であつたことは容易に想像せられる。事實此のメッセニヤ戦役の間、スパルタとアルゴスはキヌリア(Cynuria)の地方を争つて居るのである。然し一方スパルタにも有名な詩人將軍チルタイウス(Tyrtaeus)<sup>(1)</sup>があつて、其の軍詩を以て士氣を鼓舞し、犠牲多き戦を続けつゝも、遂にメッセニヤ人を鎮壓しおほせたのであつた。然し此の一戦はスパルタ人に餘程苦い経験を嘗めさせたらしく、此の時からスパルタ政策の大轉換を見るのである。先づ内部的には、スパルタ人の一部は、此の永い戦の爲に所有地を荒され、土地再分割の聲が喧しかつたらしい(Tyrtaeus 'Eunomia')。最近のパピロス研究は、此の事情を始めて明らかにしたが是に由ると在來「リクルグス改革」の主眼と考へられて居たドーリヤの古來の三つのフィレを五つの新フィレに代へたのは、實に此の時の事なのである。此の大改革は丁度上述のアテネのクリステネスの改革に匹敵するもので、在來の血族觀念に基づくフィレを打破し、ラコニヤの五箇村落の地域的區分の上に、新フィレを作つたので、スパルタ人の平等は、はじめて完成を

スパルタに於ける  
フィレの  
改定

## 兵制改革

見たのである。かゝる改革と共に、兵制の變化も漸次行はれたらしい。一騎打的の風は次第に失せて、有名なスパルタの密集方陣(Phalanx)へと移つて行つた。此の戦術はやはり平等の原理から生れたものと考へられる。なほエフォロスの權力も此の頃から漸く増大して來たらしい。是には六世紀の半に、此の役に就いた傑物ケイロン(Cheilon)の手腕も與つて居ると思はれる。

此の第二回メッセニヤ戦役の残した重大な結果は、スパルタ人のヘロットに對する極端な、病的な恐怖であつた。實に「リクルグス」の法の多くは、此のヘロットに對する恐怖から此の叛亂後講ぜられた對策であつたと考へられるのである。例へばスパルタはさきに植民地タラス(タレンツム)を下イタリヤに建設して居り、七世紀の中にもテルパンドルス(Terpandrus)、アルクマン(Alcman)の如き外國詩人が、スパルタに滞在して居る。斯様に活潑に外國と交渉して居たスパルタが、急に鎖國主義に移つたのは、全く階級闘争の盛に行はれた外國都市との交通により革命蜂起の火の粉が飛んで來ることを恐れた爲に他ならない。貨幣經濟の侵入を阻止して、僅かに鐵錢のみを國內に流通せしめ

スパルタの社  
會的變化

## 第三節 政治的社會的大變動

第五章 過渡時代

たと言ふことも、やはり此の邊と關聯があらう。

しかし斯様な内憂にも拘はらず、「スパルタ式」訓育は著々其の効果をあらはし、六世紀後半にはスパルタは名實ともにペロポネッスの覇者となつた。即ち先づ強敵アルゴスを破つた後、ペロポネッスの多くの市と同盟が結ばれ、スパルタを覇者としていはゆるペロポネッス同盟が成立したのである。かくてスパルタは六世紀の世界にヘラス第一等の強國として、自他ともに許す所となつた。<sup>(3)</sup> 東方にペルシヤの侵略的帝國が建設された時、貴族的スパルタと民主的アテネとが、國家結成を完了して居たと言ふことは、ギリシヤ人の自由、—やがてはかの古典文化の發揮の爲に、評價し得ざる好都合なことであつたと言ふ可きである。

- (1) チルタイウスはストラボに依ると(VIII. 4. 10)自ら軍を率ゐたと言ふ。故にスパルタ人のやうであるが、他の多くの古典は彼をアテネ人と傳へて居る。
- (2) Wilamowitz の研究による。(Sitzungsbericht der Preussischen Akademie der Wissenschaften. 1918. XXXVI. S. 728 ff.)
- (3) ペルシヤ戦役までエーゲ海世界に於て、ヘラスの最強國はアテネでなく、スパルタである。

と考へられたことは、クロエッス(Herod. I. 69)や、イオニヤの諸市(Herod. V 55)や、スキタイ人(Herod. VI 84)がペルシヤに對抗するため、スパルタに求援したので分る。

第四節 過渡期の文化

過渡期文化の  
特色

七世紀六世紀が政治生活に於て過渡期であり、民權が伸張し、ギリシヤ史特有の僭主の出現をみたやうに、文化的發展に於ても、此の時代は、下層階級への文化の普及、文化の地方的な發達、及び個人的意識の解放に於て、著しい特色を示して居る。其の點で此の時代の文化はイタリヤのルネッサンスの文化との興味ある類似を示して居る。例へば詩の方面を考へて見ると、前代の叙事詩に對して抒情詩の發生及び隆盛を見るのである。是には勿論當時小アジア(リヂヤとフリギヤ)からの影響を受けて、音樂が大いに發達し、子弟教育の課目にも教へられるに至つたことも、密接な關係があるが、共通な民族的意識の型にはまつた叙事詩が、漸く時代の要求を満たし得ず、詩人個性の流露たる抒情詩に地を譲つたと見られるのである。此の抒情詩の開祖と考へられたのは七世紀の半、パルス

第四節 過渡期の文化

抒情詩の發生

島(Parus)から出たアルキロクス(Archilochus)であつた。彼は流浪してタスス島(Thasus)の植民に加つた一人であつたが(七七頁)、自己の苦き経験を、熱情をこめてエレゲイヤ(Elegeia)六脚韻と五脚韻より成る)とイヤンボス(Tambos)の形に盛つて居る。なほサモスのシモニデス(Simonides)や、エフェッスのヒッポナックス(Hipponax)(六世紀)等の名も擧ぐべきである。是等詩人の中には、其の情熱に富む詩句をもつて、母國の爲の死を最大の榮光とたゞへ、國人を奮起せしめたものもある。先に述べたスパルタのチルタエウスが是であり、七世紀エフェッスのカリヌス(Callinus)も、かゝるエレゲイヤを作つて、青年をキンメリヤ人との戦に起たしめて居る。六世紀も亦多くの詩人を生んだ。スミルナのミムネルムス(Mimnerus)は、此の世紀の初頭に屬し、享樂的な戀愛詩を以て鳴り、アッチカのソロンは彼のエレゲイヤを以て自己の改革の業を辯護し、七賢人の一に數へらるゝ彼の眞摯な態度を偲ばせて居るし、メガラの貴族テオゲニス(Theognis)の悲歌は同市の黨争を描き、六世紀の史料として見る可きものである。ソロンと同時代にレスブス島には、アルカエウス(Alcaeus)と有名なサッフォー(Sappho)とが出た。

女流詩人サッ  
フォー

貴族主義者であつたアルカエウスは僭主を仆すべきことを歌ひ、サッフォーはたゞにギリシヤばかりでなく、世界における最大の女流詩人として、其の完璧なる詩句に依つて、抒情詩の最高點を示して居る。一般にギリシヤでは婦人の社會的地位が認められず、政治的にも文化的にも殆ど何等の貢獻をして居らぬ中に、サッフォーのみは誠に特異の地位を占めて居るのである。六世紀の末にはアナクレオン(Anacreon)が出て、僭主等に喜ばれ、又ピンダルス(Pindarus)はオリンピヤ其の他の競技の勝者に捧げられた頌詩(Epithikia)を以て特に有名である。其の他祭祀に伴ふ舞踏の爲のコーラスも次第に發達し、七世紀ではスパルタに居たアルクマン(Alcman)が知られ、六世紀にはステシコルス(Stesichorus)、イビクス(Ibycus)の名が傳はつて居る。

次に吾々は過渡期の宗教を考察せねばならぬ。中古以來の叙事詩の影響は、益々廣く行はれて行つたが、一方此の時代の平民の擡頭に應じて、オリンプスの神々に對して農民的信仰の出現したことが、特徴を爲して居る。デメテル(Demeter)とデオニス(Dionysus)の信仰、及び後者から派生したオルフェウス教(Orphik)が是である。是等の信仰

エレウシスの  
祕法オルフェウス  
教

が、「靈魂不死」「死後の生活」を中心問題として居るのは、あの現世的なオリンプスの神々の信仰とは著しい對照を爲して居る。其の結果、祕法(Mysteria)が行はれ、信者は之に由つて「彼岸の生活」に就いての確信を得たのであつた。エレウシス(Eleusis)に於けるデメテルの祕法は、奪はれたるペルセフォネ(Persephone)をデメテルが見出すことを、劇に仕組んで信徒に見せ、之によつて、信徒を『母なる大地の子』とならしめたのである。ヂオニソスの信仰は元來トラキヤに行はれたもので、草木が冬枯の後、春を迎へて復活するやうに、神も亦期を定めて死して地下に隠れ、再び地上に現れて生命を新たにする。

そこで此の神との合一を得ることに由つて、人々は「不死」となることができたので、其の儀式は暗の山上に行はれ、頗る狂熱野蠻性を帯びて居た。信徒は主として婦人で失神するまで、騒がしき舞踏に狂ひ廻り、此の狂亂の状態の中に、エクスタシス(Ekstasis、魂の脱離)とエンツウシアスモス(Enthousiasmos、神に充たされる事)を得、神の永遠の生に與かり得ると考へた。此のトラキヤの信仰がギリシヤに傳はつて醇化され、恐らく東方からの影響も加はつて、七世紀の頃に發生したのがオルフェウス教であつた。此の

神との合一

宗派の最大特色は、一定の教義を有したことで、此の點は非ギリシヤ的とも言ふべく、むしろ東方宗教を思はせる。此の教義は宗教詩の形で書き下され、此の宗派の開祖と考へられた詩人オルフェウス(Orpheus)の作と信ぜられて居た。是によると、此の世では人の魂は「墓場、Sema」に過ぎぬ肉體(Soma)に宿つて居るが、本來不死のものであるから、永遠に輪廻轉生の苦を嘗めねばならぬ。一度ハデス(Hades、冥府)に下つた後も又上界に現はれ、新しい身體に宿る。たゞオルフェウスの啓示せる儀禮に従ひ、清淨な生活を送つた者の靈のみが再生を免れ、神となつて永遠の幸福に與り得るといふのが此の教の要旨であつた。此の教の魅力はいかなる人々にも、奴隸にも此の幸福を約束したことで、其の爲に下層階級の間にも廣く行はれた。アテネはピシストラッスの下に、オノマクリッス(Ononacritus)の力によつて、此の宗派の重要な中心となつた。なほ此の教義がピタゴラス(Pythagoras)、プラトーン(Plato)等の哲人に影響して居ることを忘れてはならない。

かやうな神へ向つての合一の努力が、神祕教の間にひろまつた一方には、ヘシオヅス

## 神人の隔絶

に既に見えた(五九頁)神の正義、神人隔絶の觀念も漸く人々に反省され、ピンダルスをして『ゼウスの如くならうと願ふな。神にならうと求むるな。はかなき者にははかなき事こそふさはしけれ(I. 5 20)』と言はしめた。是からしておこれる者に對する「神の妬」(phthonos theou)の思想が起り、かの七賢人に歸せられて居る『汝自身を知れ』(Gnothi seauton)、『何事も適度』に(Meden agan)、『中庸こそ最上なれ』(Metron ariston)の句に言ひ表された倫理思想も、現實社會問題を反映する(九五頁)他に、やはり之と一脈相通するものであらうか？。

託宣をうかゞふ風習も前代以來引つゞいて益々盛となつた。ドドナに代つたデルフィのアポロンの託宣が最も信仰せられ、託宣の法も籤による法から靈感に依るそれへと變化した。しかし託宣が人心を完全に支配したことは、やがて政治問題が少數のデルフィ關係者に握らるゝこととなり、其の弊はペルシヤ戦役の時に殊に痛感せられた。<sup>(2)</sup>又日常生活に於けるヘレネスの自由獨行の精神も、亦之によつて阻害せられた。

(1) 「七賢人」は六世紀の前半に屬する人々で、傳承により七人必ずしも同じでないが一例をと

## 託宣の威力

れば、ミレツスのタレス、アテネのソロン、プリエネ(Priene)のピヤス(Bias)、ミチレネのピタタクス(Pittacus)、リンデス(Lindus)のクレオプルス(Cleobulus)、コリントのペリアンドルス(Periandrus)、スパルタのケイロン(Cheilon)である。上の句はデルフィのアポロン神殿の壁に刻まれてあつたと言ふ。

(2) ビシストラツス家追放の時(一〇一頁)、アルクメオン家はデルフィに献金して、彼等を動かして、スパルタに出兵するやうに託宣せしめた(Ath. pol. 19)。託宣の悪用は早くから見られるのである。

か様にオルフェウス教がひろく信ぜられ、託宣が人心を支配した時、東方イオニヤに『自然哲學』が起つて、自由なる思考を擁護したことは、ギリシヤ文化の發展の上に、非常に重大な意義を持つことである。彼等は在來の神話的世界觀に不満を感じ、はじめて自然現象を法則に支配せらるるものとして考察し、各、自己の名乗を揚げて、物質の實體、いはゆるフュシス(Physis)『自然』、或はアルケー(Arkhe)『始め』とは何ぞやといふやうな、純科學的問題に研鑽の刃を向けたのであつた。此の際彼等のとつた方法は、勿論歸納的ではなく、思索的ではあつたが、純粹な學問としての科學研究を創始した點に於て、

## 科學研究の創始



彼等は世界文化史上に、非常に光榮ある地位を占むるのである。<sup>(1)</sup>今是等の自然哲學者が提出した多くの興味ある主張を一々紹介する逡はないが、大體の傾向を略述すると、最初かやうの研究が、イオニヤのミレツスに起つたのは、當時のミレツス市の繁榮と密接な關係があらう(八一頁)。タレス(Thales 六一五年頃生る)は此處に學校をひらき、萬有根源の問題を研究した。彼は『水(Hydor)』を以て物質の根源としたと言はれる。彼の弟子アナクシマンドルス(Anaximandrus(六一〇年頃生る))は、物質自身の中に永遠の運動があつて、物質を動かすと考へ、之を無限者(To apeiron)と呼んだ。アナクシマンドルスの弟子のアナクシメネス(Anaximenes)は、空氣(Aer)を萬物の實體と考へて居る。是等の哲學者等はオルフェウス教徒等と異つて、其の哲學的見地から靈魂不死を否認して居ることは注意すべきである。ミレツス派とは別に、コロフォン(Colophon)に生れ、ひろくギリシヤ本土を流浪したと自稱するクセノファネス(Xenophanes)は、オリンプスの神々に對する辛辣なる非難攻撃(六〇頁參照)を以て有名であり、其の主張には一神教的色彩が窺はれる。(Aristot. *Metaphys.* 1. 5)サモス島に生れた有名なピタゴラ

ス(Pythagoras 五七〇頃—五〇〇頃)は、南イタリヤのクロトンに移住して、オルフェウス教に似た一の宗教團體を作つた。此の團體の人々は、淨めの儀式を行ひ、又嚴格に規定された生活を送つた。見逃してならぬのは、彼等の間で音樂と數學とが頗る重視されたことで、是は恐らく魂の淨め的手段であつたらしい。數學研究は遂に『萬物は數也』といふ主張を導出し、更に『數の神祕』が研究さるゝに至つた。後者は四世紀のプラトーンに影響を與へて居る(二六五頁)。

か様な形而上學研究の他に、「史學」の萌芽とも言ふべきものが見えて居る事を附記しよう。ミレツスのヘカタエウス(Hecataeus)は黒海岸からエジプトまで廣く各地を歴訪し、見聞する所を採録したが、其の態度は疑はしいもの、興味あるものをして、眞實を求むるに在つたのである。<sup>(3)</sup>

(1) 是等の思想家を、單なる學究と考ふるのは誤である。タレス、ピタゴラス、其の他はみな政治にも關與して居る。然し彼等にとつて學問研究は、それ自身目的ある生活内容であつたことは疑ひない。之に反してバビロニヤ、エジプトに於ては、天文、醫學其の他は著しい進

第五章 過渡時代

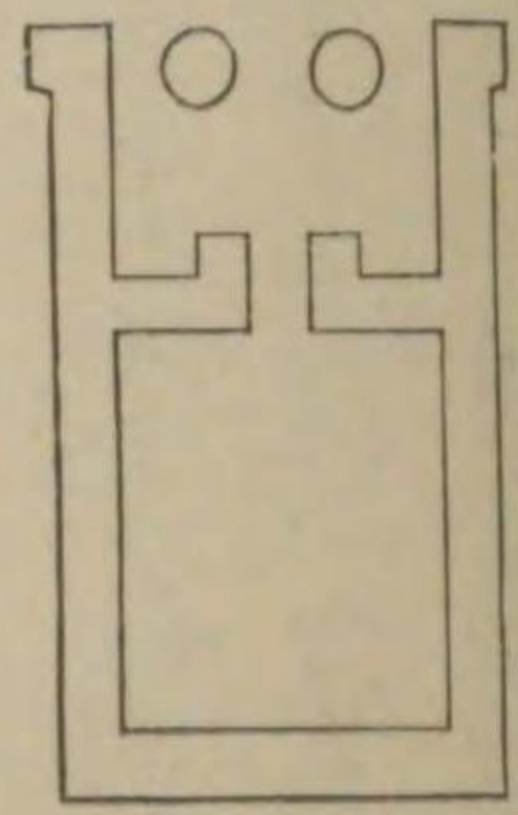
歩をとげて居るけれども、之を純粹科學研究と呼ぶことには躊躇した。

- (2) 是等の自然哲學者、ソフィスト等は一括して Vorsokratiker と呼ばれる。彼等の散佚せる斷片は有名な Diels: Die Fragmente der Vorsokratiker. Gr. und Deutsch. 3. Aufl. 2 Bde. に頗る丹念に蒐集せられて居る。なほ波多野博士西洋宗教思想史卷一、八四頁以下參照。
- (3) 彼の態度を窺ふ爲に、彼の「系譜」(Genealogia) の劈頭に見ゆる有名な言葉を引かう。曰く「ミレツス人ヘカタエウスは次の如く語る。余の書く所は余の眞實と考ふる所也。ヘレスの語る所は多様にして、余の見る所にては一笑に附す可きもの故」と。(F. H. G. Bd. 1. P. 26)

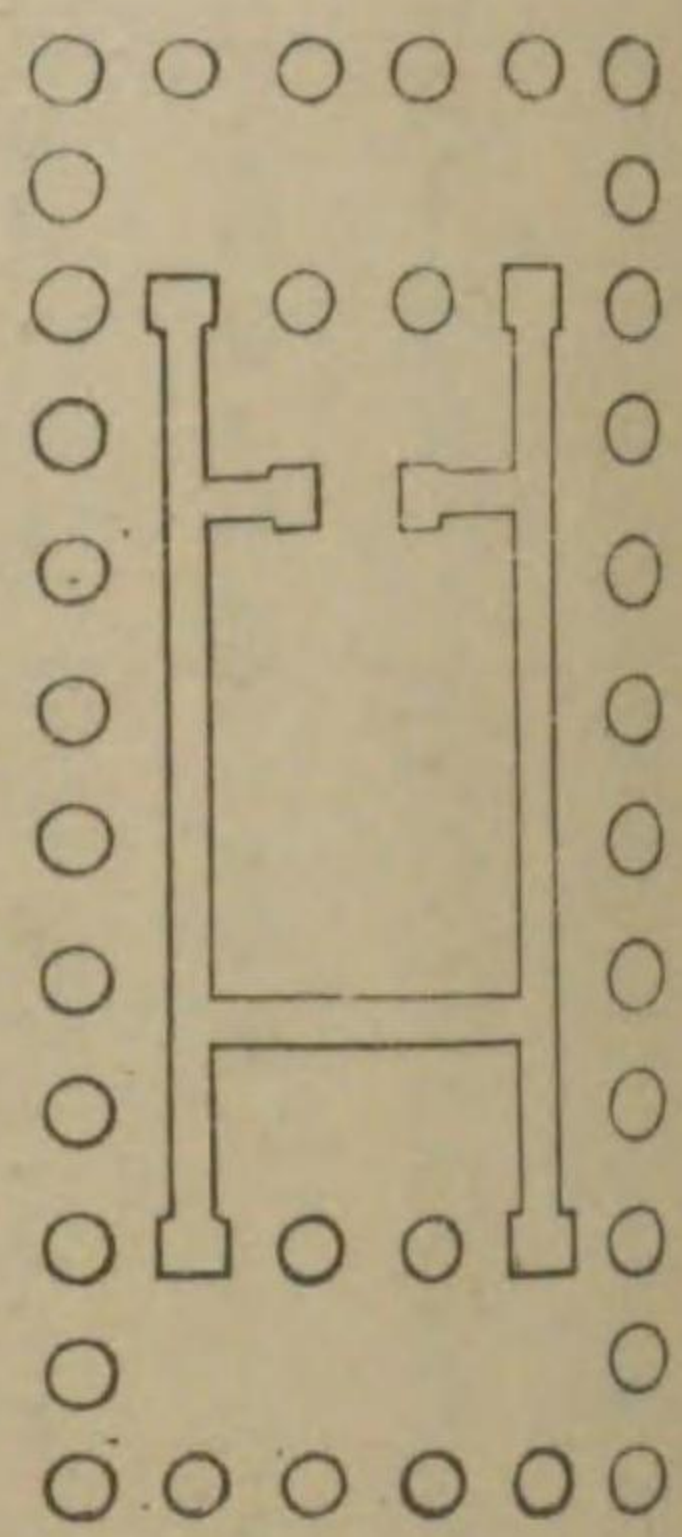
古拙時代

次に造形美術の方面を考察すると、此の方面ではいはゆる「古典時代」の傑作への前期をなす時代で、總括して「古拙時代」(アルケイク時代、Archaic) と呼ばれて居る。建築に就いて見ても、かの莊麗なるギリシヤ建築の型のものが、漸く生れて來た時代である。中古の章に述べたやうに、そしてギリシヤ建築史を通じて一般にさうであるが、問題になる建築は主として、『神の住家』たる神殿である。七世紀以來屋根などの外は、木、又は粘土の代りに漸次石が用ゐらるるやうになつて、神殿の見る可きものが起つた。

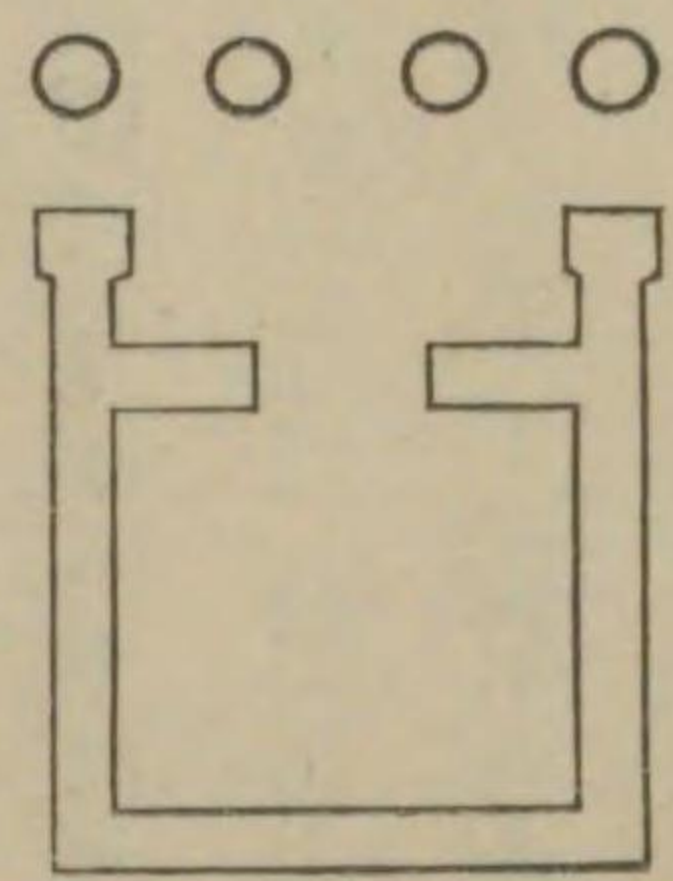
神殿の諸様式



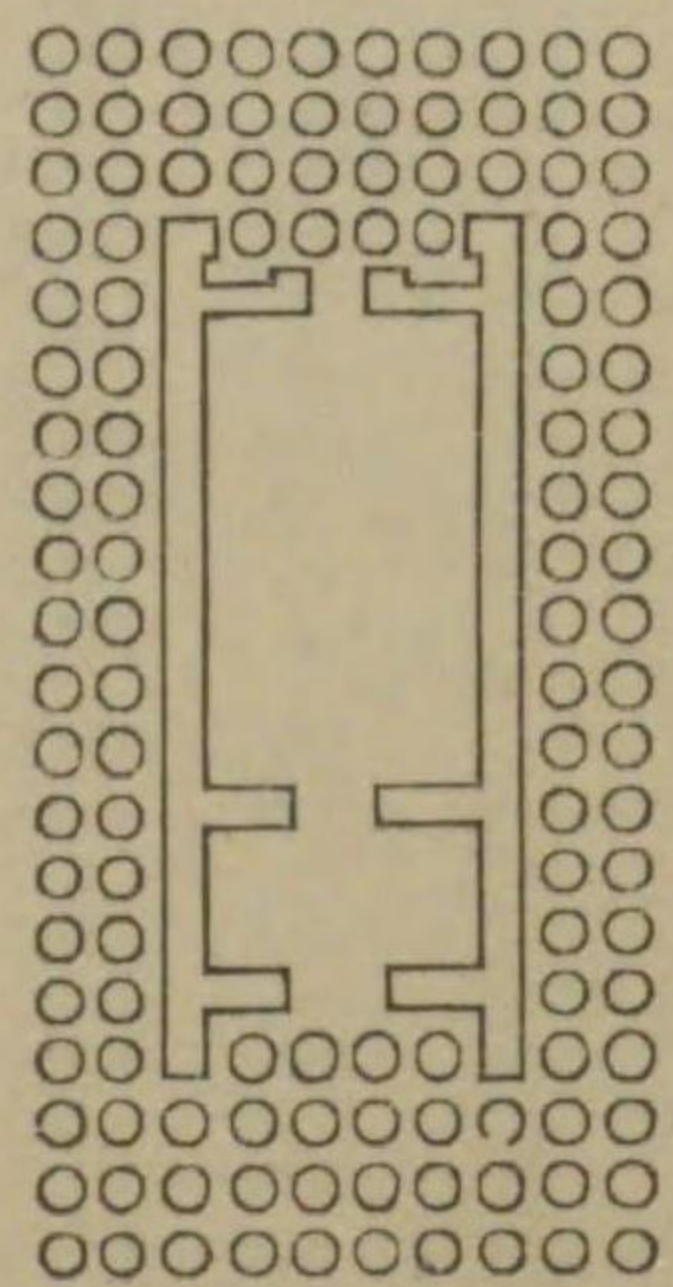
圖一第 式柱二面前



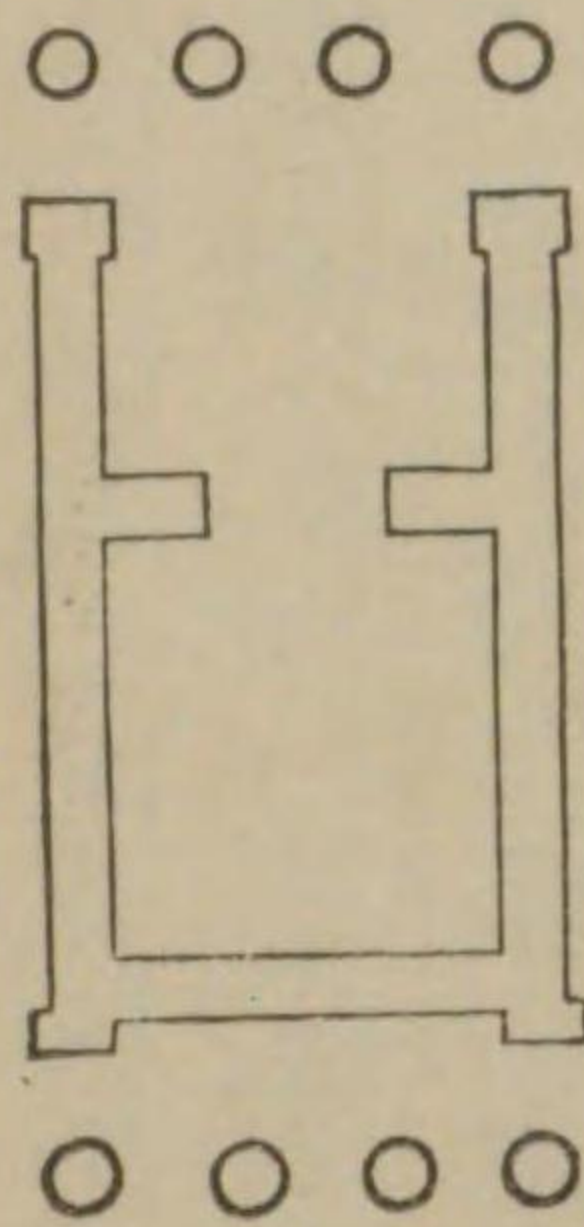
圖四第 式翼周



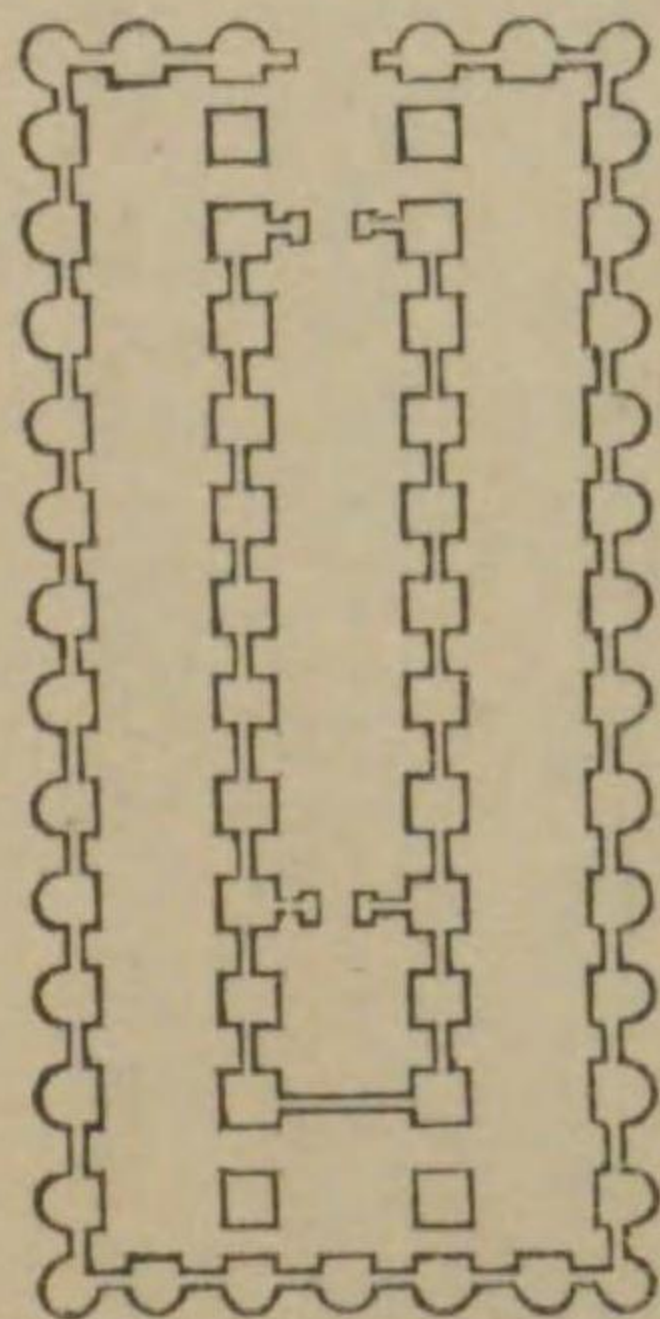
圖二第 式柱四面前



圖五第 式翼周重



圖三第 式柱四面兩



圖六第 式翼周重僞

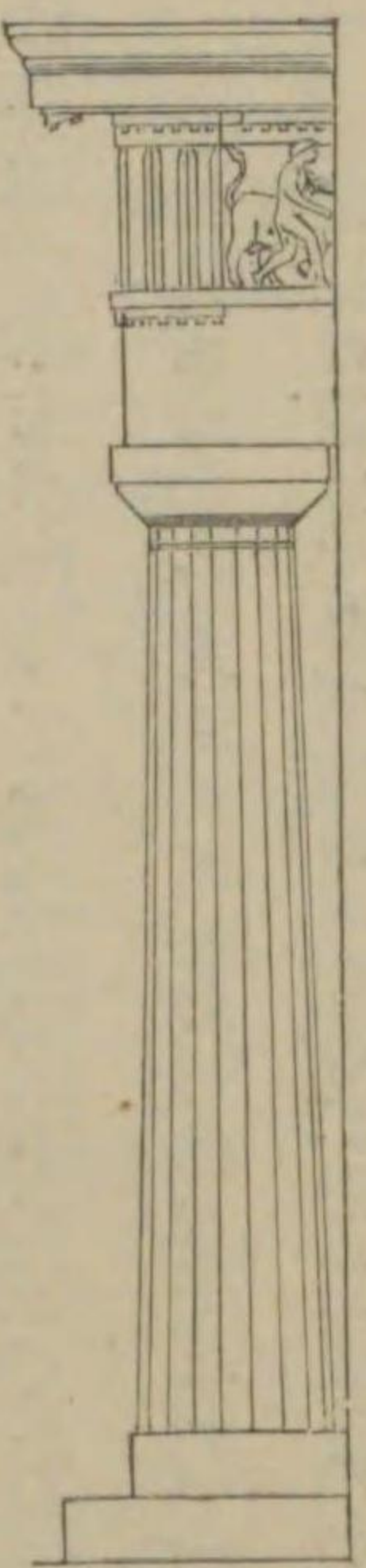
第四節 過渡期の文化

其の最も簡単な形は、壁で囲まれた内室(Cella)と、之につゞく前室(Pronaos)と入口の二本の圓柱の三要素から成つた(In antis 前面二柱式、第一圖)。是から圓柱が四本となり(前面四柱式 Prostyle 第二圖)、更に四本の圓柱が内室の後方にも加へられる両面四柱式 (Amphiprostyle 第三圖)となり、やがて前室に對應するやうに、内室の後方に入口の開いた後室(Opisthodomos)が加へられ、全體が柱列で圍まるるやうになつた(周翼式 Peripteral 第四圖)。イオニヤに於ては更に二重の柱列を以て圍むことが行はれた。(重周翼式 Dipteral 第五圖)。此の變形で列柱が壁面から半面を出して居る形式がある。是が偽重周翼式(Pseudo-peripteral 第六圖)で、此の例は少數である。<sup>(1)</sup>

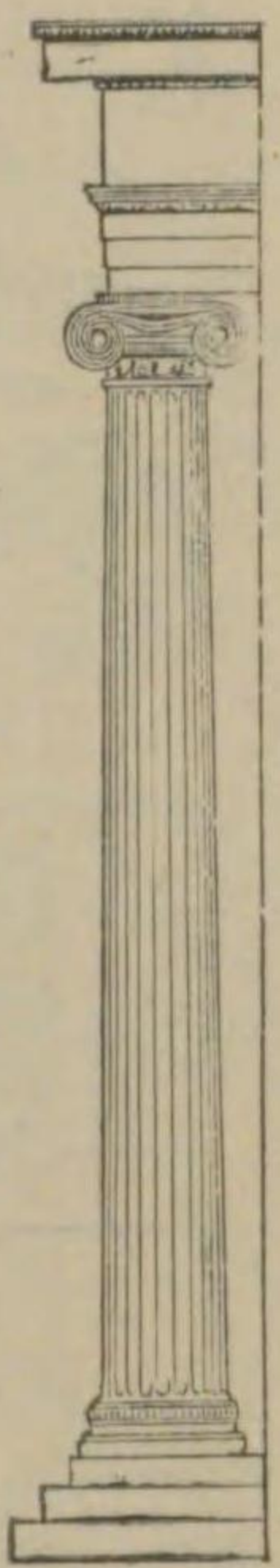
以上は構造發展から見た類別であるが、建築の細部から言へば、ギリシヤ各地各様の發達があつたらしい。しかし六世紀以後の建築は、いはゆるドーリヤ式か、イオニヤ式か、或は此の兩者を折衷せるものと言ひ得るのである。ヴィトルヴィウス (Vitruvius) アウツス時代の建築家上の構造分は、ドーリヤ式を男に、イオニヤ式を女に譬へたと言ふが、洵に前者は莊重を、後者は優雅を主眼として居る。兩様式の差異は、主として其の圓柱

ドーリヤ式と  
イオニヤ式の  
建築

に存し、ドーリヤ式は多分ミケネ時代クレタ式木柱の發達したもので、クレタでは上部が太かつたのが逆に下部が太くなり、柱身の半より下の方にエンタシス (Entasis 胴張)がある(第七圖)。イオニヤ式の柱は名の示すやうにイオニヤ地方に發達したもので、柱頭の渦卷は東方の影響を示して居る(第八圖)。なほドーリヤ式では列柱の上にアーキト



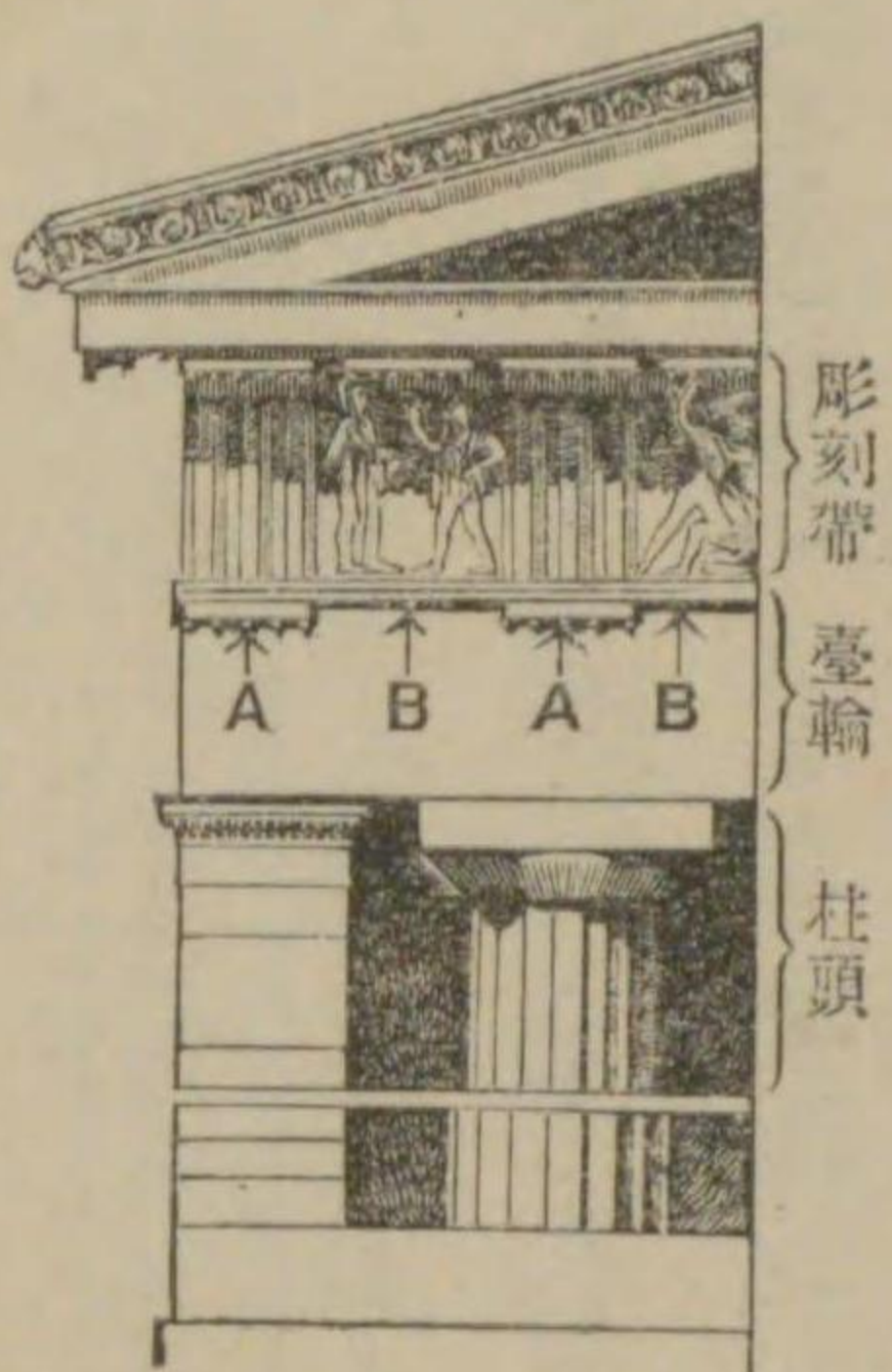
第七圖  
ドーリヤ式



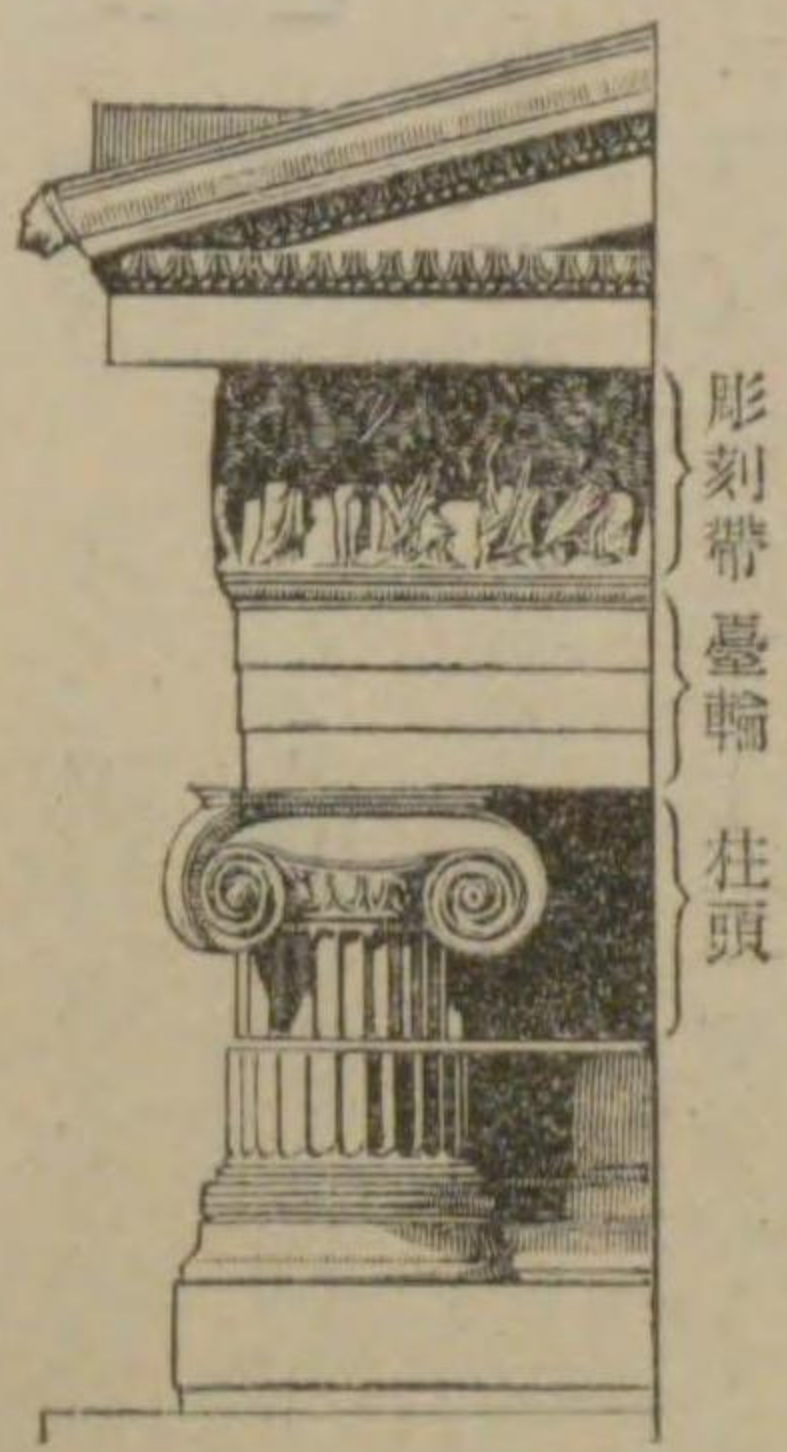
第八圖  
イオニヤ式

九圖B)とに分れて、兩者が一つおきに列んで居る。イオニヤ式のフリーズには此がないのである(第十圖)。ドーリヤ式はペロポネソスの外、ヘラス本土一帯、下イタリヤ、シリールまでひろまつた。故にアテネのアクロポリスのアテナ古神殿(五六〇)も、オリンピアのヘラ神殿 (Heraion) (十世紀)も皆此の様式である。イオニヤ式は小アジア沿岸

からエーゲ海の島々を支配し、此處では東方の影響から巨大建築を作る傾向が起つた。エフェソスのアルテミス(Artemis)神殿(五六〇)の如きが是であつた。なほデルフィに



圖九第



圖十第

は各地の諸市が競つて献納物の庫を建てたので、兩様式の建物が見受けられる。

(1) Peripteral 式は必ず前面列柱六本以上、Dipteral 式は八本以上と定まつて居る。なほ側面柱の数は、必ず前面の数の二倍を下らぬのが規則である。Dipteral 式はドーリア式には一つも無い。ドーリア式では六柱式が最も普通である(バルテノン<sup>(1)</sup>は例外で八柱式)。

彫刻

神殿建築と相並んで彫刻も此の頃石刻となり、漸く見るべきものが出来た。其の最初は中世の章に説いた柱形の木造神像(Xoana)の影響が尙ほ著しく、座像の出来たのはやゝ後世のことに屬する。なほ此の時代にはエジプトの影響が頗る有力であつたことは、

其の二大系

かのアポロンと通常言はれる両手を下げて左足を前に出した男の像と、エジプト彫刻との類似が明瞭に物語つて居る。今此の時代の遺物により、稚拙から漸次優雅へ發達する徑路を辿つて見よう。彫刻に於てもドーリア系、イオニヤ系の大體の區別が妥當する。ドーリア系で可なり粗野な趣を示して居るのはシシリイのセリヌス(Selinus)のドーリア式神殿のメトローペの浮彫である。メヅーサ(Medusa)を殺すペルセウス(Perseus)の如き、まだ頗る稚拙であるが、牡牛に乗るエウロパの圖は稍、進歩の跡が見える。イオニヤに残る遺物では、ブランキダエ(Branchidae)のアポロ神殿への聖道の兩側を飾つた座像がある。是は略、五五〇年頃の作で、大理石座像の最も古き例である。マグネシヤ(Magnesia)のバツクレス(Bathukles)といふ名手は、ラコニヤに招かれて、アミクラエのアポロ神像の座を作つたと言はれる(五〇〇頃)。イオニヤ派の影響はリキヤのクサントス(Xanthus)出土のいはゆる「ハービー墓」(Harpy tomb)(五二〇頃)にも窺はれる。然しイオニヤ系の最もよき發達を示してくれるのは、アテネのアクロポリスである。思ふにピシストラッス家が文藝美術を奨勵して、ペルシヤに壓迫せられたイオニヤ諸市の

アテネの作品

第四節 過渡期の文化

彫刻家をアテネに招いたことが、之に大關係があらう。かやうな六世紀の作品は、ペルシャ戦後新神殿建築の基礎を固めるのに利用されたが、それが十九世紀末に發掘されて、アテネ美術史上に光明を與ふることになった。出土品の多くは着衣の婦人像で、アテナ信者か又は女僧が奉獻せるものである。是等のアテネ—イオニヤ系作品は、其の着衣の驚嘆すべき巧な表現や、やはらかい眼元、口元に依つて後年の素晴らしい傑作の先驅たるに應はしい。是等の中にはかの僭主を殺したアリストデイトンとハルモデウスの像を作つたと傳へらるゝアンテノル(Antenor)の銘のある婦人像も出土して居る。

アルゴス、シキオン派はドーリヤ系で、競技者の像を得意としたが、主として青銅の鑄造物であつたため、殆ど遺物が存しない。<sup>(2)</sup> 文献によるとアルゴスのアゲラダス(Ageladas)が著名で、ミロン(Myron)、フィヂヤス(Phidias)、ポリクリツス(Polyclitus)の師と傳へられて居る。シキオン生れのカナクス(Canachus)もすぐれて居たらしい。

最後にエギナ島を忘れてはならない。こゝでは文献に據ると、カルロン(Callon)、オナタス(Onatas)等の名手が出で、特に後者の名は、エーゲ海に廣く響いて居た。此の派の

ペロポネッス派

エギナの遺物

作品は、同島のアルテミス・アファイヤ(Aphaia)の神殿(ドーリヤ式)の東西破風裝飾によつて充分窺はれる。是はトロイ關係の神話をあらはしたもので、アテネ派とペロポネッス派の競技者像の兩方の影響を受けて居り、戰士の筋肉の表現の如き既に頗る巧である。年代は稍下りサラミス戦直後で、確證は無いが多分オナタスの作であらう。

- (1) 大理石の用ゐられたのは六〇〇年以後で、やはりイオニヤに始まつたらしい。最初はナクスス(Naxos)島のを、後にはパルス(Parus)島のを用ゐた。本土でも大理石が用ゐられたが、それは頗る徐々で、完全に大理石の支配するに至つたのは、ペリクレス時代である。ヘラス一帯の美しい大理石が、其の美術發達に大關係のあつたことは言ふまでもない。

- (2) 鑄金術もイオニヤから傳はつたもので、サムスのロイクス(Rhoicus)とテオドルス(Theodorus)が創始者と言はれるが、實はエジプトの技術を學んだに過ぎない。

最後に繪畫に就いて略述しよう。建築の一部分(破風等)や、彫刻の眼、顔等に彩色を施して効果を高めることが行はれたが、遺憾ながら今日の遺物からは、はつきり窺ふことが出来ぬ。かやうな應用方面の他、眞の意味の繪畫も早く描かれたことは、サムスのマンドロクレス(Mandrocles)が、ダリウス王のスキタイ征討の時のボスポルス通過の圖

繪畫

を描いて、故郷のヘラ神殿を飾った (Herod. IV. 88) ので明かである。然し是も遺物は存しない。今日最もよく研究することのできるのは、地中海沿岸各地から無數に出土した陶器の裝飾畫である。陶器面の飾繪として、此の時代には様々の神話、叙事詩の一節を扱った寓意畫が好んで用ゐられた。然し有名な、シルフィオン輸出を監督するキレネのアルケシラス (Arkesilas) 二世の圖のやうな日常生活を題とせるものもある。

はじめはイオニヤとコリントの陶器が、各地市場に幅を利かして居たが、六世紀半からピシストラツスの下にアテネが擡頭して、之を凌駕するに至つた。

此處では墨繪の壺 (Black-figured vases) の製作が起り、人物を黒色に描いて、細部を刻み込んだ線と白色とではす術が完成した (六〇〇—五〇〇頃)。六世紀末から赤繪の壺 (Red-figured vases) も作られ、やがて前者を壓倒するに至つた。 (五二〇—四〇〇頃)。なほ此の時代の壺に何某の『作』 (...Epoiese) と銘打つてあるのは、東方の作品に見られぬ、個性尊重の風を現すもので、いかにもギリシヤ人の作らしい感を與へる。

アテネの陶器

## 第六章 ペルシヤ戰役

## 第一節 イオニヤの叛亂

ギリシヤ最負で寛大であつたりヂヤ王國が滅亡して、小アジア沿岸のギリシヤ都市が、ペルシヤの知事 (サトラップ) に治めらるるやうになつて以來、彼等はペルシヤに貢税を納め従軍の義務を負はせられたのみならず、ペルシヤは各都市の僭主を後援して、市民をペルシヤから離叛せしめぬ策をとつて居た。かくて都市内部の自治すら失はれつゝあつた。然しかゝる政治的理由のみが、平和の愛好者たるべき商業的イオニヤ人をして、干戈を執つてペルシヤ人に向はしめたとは考へられない。之には裏面に見遁し難い經濟的原因が潜在して居たのである。<sup>(2)</sup> リヂヤ王國建設以來、イオニヤ諸市はボンツス方面の植民に依つて、失はれた兩河地方との商業利益の代償を得、又新にボンツス北岸から兩河地方と間接に交通して居た。其の他エジプトに於けるミレツスの優越、下イタリヤの

叛亂の政治的  
原因其の經濟的  
原因

## 第一節 イオニヤの叛亂

シバリス(Sybaris)市との聯絡、ミレツスと親和であつたメガラ市のプロポンチス(Pro-pontis マルモラ海)沿岸の植民市(ビザンチウム等)は、ミレツス其の他の商業を非常に殷盛ならしめた。然るにペルシヤ帝國が興るに及んで、エジプトが征服され、ナウクラチスは昔日の面影なく、ダリウスのスキタイ征伐はボントス方面の諸市に打撃を與へ、ビザンチウムもペルシヤの手に入り、同じ頃西方に於て、ミレツス産織物の最良市場であつたシバリス市は、隣市クロトン(Croton)に破壊せられて居る(五一一年)。一方ペルシヤは力の及ぶ限りフェニキヤの商業を保護して、イオニヤの商業を阻害した。<sup>(3)</sup>是等種種の原因により、イオニヤ商業が非常の悲境に陥つた時、紀元前五〇〇年かのアリストタゴラス(Aristagoras)の事件が起つて、叛亂の誘因となつたのである。アリストタゴラスはミレツスの僭主となり、サルデスのペルシヤの知事アルタフェルネス(Artaphernes)に説いて、ナクスス(Naxos)島遠征を企てたが、一箇月餘の攻圍も効を奏しなかつたので、ペルシヤ人に對する己の地位の不安を感じたので、イオニヤ人の心中を考量して、急に彼等と結托し、ペルシヤに叛旗を掲ぐるに至つた。ペルシヤの實力を知るヘカタエウス

アリストタゴラスの擧兵

(Hecataeus) (一一二頁)の警告にも拘はらず、小アジアのギリシヤ都市は續々叛亂に加盟した。然し此の擧たるや、ヘラス本土の後援なくては、到底成功の見込みがないので、アリストタゴラスは自ら本土に來り、スパルタ、アテネ其の他に求援したが、スパルタは之に應ぜず、アテネが二十隻、エレクトリヤが五隻の船を送つたのみであつた。<sup>(4)</sup>

最初はペルシヤの戦備が緩慢であつたため、離叛者の旗色がよく、サルデスを占領して之を灰燼に歸した。然し、やがてラーデ(Lade)の海戦(四九五)で同盟軍は全滅し、次の年には叛亂の中心ミレツス市も陥落し、破壊せられた。四九三年には獨立を保つた最後の諸市も降り、以前のペルシヤ知事の統治が完全に復興せられたのである。

(1) 是等の僭主とペルシヤとの關係は、かのダリウスのスキタイ遠征の時、ミレツスの僭主ヒスチアエウス(Histiæus)等が、イステル(ドナウ)河に架した橋を破壊せよといふミルチヤデスの忠告をしりぞけた言葉でわかる。(Herod. IV. 137)

(2) 以下の頗る手際のない經濟的解釋は、Thomas Lenschau 氏の創見であつて(Klio XIII. 180 ff.) 史學雜誌廿五編一號に全譯して紹介して置いた故參照せられたい。たゞ在來説かれ

叛亂の經過

た政治的事情も、亦重大な要因であることは疑無い。

(3) Lenschau氏はフェニキヤ人がペルシヤに忠實なる海軍を供したのは、ダリウスが彼等の商業を特別に保護せる代償であらうと解して居る。カルタゴが急にギリシヤ植民市に對し猛烈なる態度をとれるも(五三五年の Alalia の役—一四八頁参考)、やはりペルシヤと關聯があると説く。

(4) スバルタは傳統の孤立主義の外、當時仇敵アルゴスとの戦が將に起らんとして居た。アテネはアルクメオン家がペルシヤに逃れたヒピヤスを恐れた爲、應援隊を送つたが、やがて僭主派がアテネの政權を握るや、速に其の艦隊をイオニヤから引揚げさせた。

ヘロドツスの記事を信ずれば(VI. 43-45)、翌四九二年春ペルシヤ王ダリウスは其の女婿マルドニウス(Mardonius)を遣つて、キリキヤを出發し、海陸並行してイオニヤ、ヘレスポントを過ぎ、トラキヤ海岸に沿うて南下し、ヘラス本土を衝き、アテネ、エレクトリヤ兩市を懲罰せしめんとしたが、アトス(Athos)岬を廻航する時、暴風の爲に艦隊が難破し大いに兵員を損したので、マルドニウスは目的を達せずしてアジヤに歸つた。是がいはゆる第一回ペルシヤ戦役である。此の記事は在來一般に認められて來たが、其の後の

いはゆる第一  
回ペルシヤ戦  
役

研究(主としてペロッホ氏の)に依つて、其の疑はしいことが明かになつた。ペロッホによれば、マルドニウスはヘラス本土を討たんとしたのではなく、トラキヤ海岸の鎮撫を命ぜられたので、其の目的を充分に果して歸國の途上、あの災難に遭つたのである。<sup>(1)</sup>

(1) 此の記事に最初疑を挿んだのは Welzhofer(Jahrb. f. Phil. Bd. 143. 1891)であるといふ。ペロッホが提出して居る論據は次の様である。(Gr. Gesch. II<sup>2</sup> 2. S. 84) (1)キリキヤを吞み出れば、ヘレスポントに着くのは六月頃、是はアテネを攻めるには時期がおそ過ぎる。アトスの岬でペルシヤ兵が寒氣で (rhiigei) 死んだとある故十一月頃である。此の頃には艦隊の攻撃行動は行はれぬ故、暴風は、ヘロドツスの記事とちがひ、マルドニウスの歸路に於て起つたらしい。(2)北方からアテネ等をうつには中部ギリシヤを服せねばならぬ。之には兵員が少くな過ぎる。(3)ダリウスがマルドニウスの歸國後に使をやつて、ヘラスの服従を求めて居ること(Herod. VI. 48)は、此のマルドニウスの出兵がアテネ遠征ではなことを示す等。但し Ed. Meyer はヘロドツスの記事を眞なりとして、此の見解に反對して居る(G. d. A. III. S. 324 註)



## 第二節 マラトンの戦

イオニヤ叛亂以來の紛擾が完全に鎮靜せられたのち、ペルシヤ大王はアテネ、エレクトリヤ二市の懲罰を、メヂヤ人ダチス(Datis)とアルタフェルネス(Artaphernes)の兩人に命ずることとなつた。それでいはゆる第二回ペルシヤ戦役が起つた(四九〇)。たゞし大王の目的は二市の懲罰であつて、決してヘラス全土の征服では無かつた。

アテネに於ては其の間にアルクメオン家が再び退けられ、ピシストラツス派のヒッパルクスがアルコンとなり(四九六—九五)、イオニヤ叛亂後援から手を引いた(一三三頁)。然しアテネはペルシヤの難をのがれて、トラキヤのケルソネスス(Chersonesus)から歸つて來たミルチャデス(Miltiades)——かの王國を立てた同名人の後裔(九九頁)——に於て有爲なる指揮者を得た。彼は四九〇年ストラテゴスの一人に選ばれたが、ペルシヤ軍に就いての経験から、彼等の弓隊に對するに槍隊を以てするの有利を説き、又アテネ市内には僭主派とアルクメオン家とが結託して彼に反對して居たので、城壁内に立籠らずに、平

いはゆる第二回ペルシヤ戦役

ミルチャデスの作戦計畫

マラトンの戦

地で敵を迎ふる策をとつた。一方ペルシヤ軍は、四九〇年キリキヤを出發しナクスス、デルスを降し、エレクトリヤ市を破壊して、ヒッピヤスの教示によりアッチカ北部のマラトンの野に上陸した。アテネは急使を派してスパルタの來援を求めたが、スパルタは満月となるまでは出兵出來ぬとの理由で應じなかつた。たゞボエオテヤのプラテーエー(Plataea)市から出た僅の援兵を加へて、アテネ軍はミルチャデスの指揮の下に、有名なマラトンの會戦を決行した。此の會戦の狀況に就いては、餘り確かな事は分らないが、有名な戦史家デルブリック(Hans Delbrück)の研究と、<sup>(1)</sup>此の會戦の戦死者の墓であるソロス(Soros)の發掘は、稍其の真相を明かにした。之によるとヘロドツスの記事は大分當てにならぬもので、ペルシヤ軍の數も、運送船でエーゲ海を運ばれたことを考へると、まづ一萬五千位、之に對するギリシヤ軍も一萬位であつたらしい(Delbrückの説)。ペルシヤ軍は成る可くスパルタ軍の到着前に決戦するが得策な爲め、攻撃の火蓋を切り開戦の遷延を望むギリシヤ軍に向つて進んで來た。ミルチャデスは之を迎へて、却つて逆襲に出で、ペルシヤ軍の矢の雨の間を抜けてペルシヤ軍に迫り、之と白兵戦を演じた。是

が勝利の因であつた。手薄なギリシヤ中軍は破られたが、重装せる槍兵の密集隊から成る兩翼は、聯絡に乏しいペルシヤの弓隊を完全に打ち破つた。敵は逃れて急いで船に乗り込まうとし、此處で亦一合戦行はれた。ダチスは上船した味方を以て、スニウム(Sunium)岬を廻り、アテネを衝かうと試みたが、ミルチャデスが速に軍をかへしてアテネを守つて居るのをファレルム(Phalerum)沖から望見して歸國するより他なかつた。戦後間もなくスパルタ軍が到着したが、すでに事畢れるを知り、アテネ人を賞揚して歸國した。此の合戦の精神的影響は偉大なものであつたに違ひない。アテネが獨力で大敵を退けたことは、今後同市の隆盛の土臺を据ゑた様なものであつた。

ペルシヤ軍の  
歸國

(1) Hans Delbrück: Perser-und Burgunderkriege 1867 が基礎的研究である。

(2) Herod. VI. 121 によると、此の戦役の際にアルクメオン家がペルシヤ軍と通じ、ペンテリコン(Pentelicon)山上から、光る楯を以て、ペルシヤ軍に相圖したといふ。ヘロドツスはヒッピヤスを追放したアルクメオン家の行爲とは解しかねると言つて居るが、當時新に歸國したミルチャデスに依つて勢力を失つた彼等が、ヒッピヤスとペルシヤ軍との力で、アテネに勢力を回復しようと試みたのであるかも知れない。(Meyer: Forschungen. I 198 註)

### 第三節 クセルクセスの遠征

ギリシヤ史家の傳ふる所によると、ペルシヤはマラトンの戦からクセルクセスの遠征に至る十年間、専心ギリシヤ討伐の準備をして居たやうであるが、四八六年にはエジプトに叛亂が起り、ダリウスの死(四八五年)後、其の子クセルクセスがやつと之を鎮定した。次の年にはバビロニヤにまた叛亂が起つた。是等がみな静まつた後、始めて大王はギリシヤ討伐の準備にかゝることが出来たのである。さうして此度こそは單なる膺懲ではなく、實にギリシヤをペルシヤの一屬州としてしまはうと思つたのである。實にギリシヤ人がペルシヤの東方的支配の下に萎縮し去らないで、自由なヘレネスとなり、文運の花を咲かせ得たのは、此の外夷の侵入を幸運にも撃退し得た結果である。故にギリシヤ文化の後世に對する貢獻を考ふる者は、此の一戦が世界史的に、いかに重大な意義を有するかを理解するであらう。

此の民族の危急存亡の秋に當つて、過渡期以來ペロポネッスに覇を唱へたスパルタと

いはゆる第三  
回ペルシヤ戦  
役の意義

新興のアテネとが、心を合せて外敵に當つたことは、常に分立主義に禍されたギリシヤ史上に珍しいことで、四世紀の汎ヘラス主義者イソクラテスが、此の時期を理想的時代と賞讃して居るのも道理がある(Isoc. Panegyricus. 80-81. 85)。殊にアテネに於て此の危機に直面して、テミストクレス (Themistocles) と言ふギリシヤ史上最もすぐれた軍略家・政治家のあらはれたことも、決して低く評價せられてはならぬ。マラトンの勇將ミルチヤデスが、其の後、パルス島 (Parus) 攻撃を試みて失敗し、失脚して死んだ後、貴族のリコミダエ家 (Lycomidae) の出であるテミストクレスが、國民の先頭に立ち、先づアテネの結束を固むるために、オストラキスマスに依り盛に僭主の黨派を追放した。テミストクレスは先に四九三—二年アルコンとなり、フェニキヤ海軍イオニヤ海軍を従へたペルシヤに當るには、海軍を起すことの絶対必要なるを説き、ピレウス (Piraeus) の築港を開始した。然し彼の此の政策にも、反對者が無いわけでは無かつた。海軍擴張の結果は、船員はソロンの第四階級たるテタイ(九六頁)から採らねばならず、是は必然的に上の三階級に對して第四階級大衆の擡頭、即ち上層三階級の特權喪失を來さねばならぬ。

テミストクレス  
の海軍擴張  
策

アリスチデス  
の反對

此の上層階級の利益の爲に、海軍策に反對して陸軍主義を取つたのがアリスチデス (Aristides) であつたが、遂にテミストクレスの説が勝を制し、彼はオストラキスマスの犠牲となつた。此の頃アテネに軍制改革が行はれたことも見遁がしてはならない。四八七—六年九人のアルコンは豫選を経た後抽籤で選ばれることとなり (Ath. Pol. 22)、各フィレの選舉による十人のストラテゴスの地位が高まつたが、此の十人の中の一人は『最高司令官』として、全人民から選舉せられることとなつた。<sup>(1)</sup> 是は恐らく四八〇年代の緊急な政局の産物であらうが、之によつて統帥權が確立し、テミストクレスは此の『最高司令官』に選ばれたので、軍事ばかりでなく政治に於ても永く民衆の指導者となつた。四八三—二年ラウリウム (Laurium) 銀山から多量の銀の餘剰が生じたので、彼は之を市民に分配しようといふ説を却ぞけ、百隻 (Ath. Pol. Herod. VII. 144 は二百隻と言ふ) の三段櫂船 (Trieres) を造らせた。艦隊は一年半許にして出來上り、<sup>(2)</sup> アテネは一躍ヘラス第一の海軍國となり、かのサラミス (Salamis) の勝利も、實に此の艦隊が存在したから得られたのであつた。

- (1) 此の『最高司令官』の創設は、直接所傳がないが、ペロッホの研究 (Gr. Gesch. II<sup>2</sup> 1. S. 28) により明かとなつた。
- (2) Herod. VII. 144 等に依ると、此の建艦の直接の目的はエギナと戦ふ爲であつた。エギナはアテネの有力な商業の敵手で、アテネは此の前にも交戦した。その時には、コリントから二十隻の船を借らねばならなかつた。此の事實はテミストクレスが、其の策を人民に主張するに有利であつたらう。

ペルシヤ大軍の侵入を前に控へて、スパルタ、アテネの協力は幸にできたけれども、其の他の諸市に至つては、各々勝手の行動をとり、アルゴスやアケーヤは中立を取り、テッサリアのアレウアダエ (Aleuadae) 家は、ペルシヤ側について居た。デルフィは決して望ましい豫言は與へないで、却つて戦争の中止を勧めた。然しアテネ、スパルタ及び之と行動を俱にする小さな都市は、四八一年イストモスに同盟を結び、互に在來の交戦を中止し、心を合せて外夷に當るべきことを約し、スパルタに海陸の指揮權を委ねた。

四八三年以來ギリシヤ征討に取り掛つて居たクセルクセスは、四八〇年春親ら大軍を率ゐてサルデスを出發し、ヘレスポントに舟橋を架して陸軍を渡らせ、海軍は豫ねて開

アテネ、スパ  
ルタ等の對ペ  
ルシヤ同盟

ペルシヤ大軍  
の進發

鑿したアトス岬の根元を通らせ、兩軍並び進んで南下した。其の兵數に就いてはギリシヤ史家の傳へて居る所は、<sup>(1)</sup>皆途方もない誇張に過ぎない。實際は十萬位の戰士に輜重兵が加はつた位であつたらう。とにかくペルシヤ軍が、其の數に於てギリシヤ軍に比して、遙かに優勢であつたことは明かである。

ペルシヤ軍の南下の報傳はるや、ギリシヤ人は一時テッサリアの北境のテンペ (Tempe) の關門を守つたが、やがて此處の保ち難いことがわかつた。然し戦が愈々目睫の間に迫つて來ても、ギリシヤ側の作戦に就いての意見は、決して一致しなかつた。スパルタ及びペロポネソスの諸市は、中部ギリシヤを放棄し、イストモスに全力を注いで、ペロポネソスを保全しようと主張したが、是は勿論アテネ其の他の應ずる所ではなかつた。スパルタはアテネの海軍力を借る必要があつたから、讓歩して中部ギリシヤのマリス (Malis) 灣に面するテルモピレー (Thermopylae) の關門を守る爲に、王レオニダス (Leonidas) を派遣した。然し王につけたスパルタ兵は僅に三百人で、それに他のペロポネソスの兵を合せて四千人、なほそれに中部ギリシヤの兵を合しても約七千に過ぎなかつた。

スパルタの希  
望

この寡兵で、ペルシヤの數萬の大軍を喰止めようとするのであつたから、言はゞスパルタは王を同盟軍の犠牲に供したやうなものであつた。レオニダス以下が勇敢に奮戦したにも拘はらず、内通者が敵に間道を教へた爲に、王以下スパルタ兵が悉く戦死したことは、其處に立てられた有名な戦死者をとむらふ詩句(Herod. VII. 228)とともに、何人も知る通りである。然し王以下の三日に互たる抵抗奮戦は、ペルシヤ軍に多大の打撃を與へたばかりでなく、精神的にギリシヤ軍の士氣を鼓舞するに與つて大いに力があつたらう。

ギリシヤ艦隊はスパルタ人エウリビヤデス(Eurybiades)の下にエウボエヤ島の北端のアルテミシウム(Artemisium)の岬の沖合で、ペルシヤ艦隊を迎へ、交戦三日に及んだが、思ふやうな勝利が得られず、テルモビレーも遂に陥つたと聞き、サラミス灣に退いた。一方クセルクセスはテルモビレーを通つてアッチカへ殺到したので、テミストクレスはアテネの老弱婦女子をサラミス島や、ペロポネススに避難させ、男子は艦隊に乗り込ませて、サラミス灣で最後の決戦を行ふこととなつた。彼等はアテネ市がペルシヤ人の手によつて、灰燼に歸するのを傍觀せねばならなかつた。此の際テミストクレスの策

は、ペルシヤ艦隊を狹隘なるサラミス灣に誘ひ込んで、こゝで一大決戦を行ふにあつたが、ペロポネスス人等はイストムスに退かうと主張した。然しテミストクレスの威嚇と口説とによつて彼等もやつとサラミス灣に停まることとなつた。幸ひペルシヤ海軍がファレルム(Phalerum)沖からサラミス灣に入り込んで來、アッチカを背にしてギリシヤ艦隊と對峙し、遂に世界史上の最大海戦の一なるサラミスの海戦<sup>(2)</sup>となつたのである(四八〇年九月末)。此の戦にテミストクレスの策が完全に實行せられ、ペルシヤ海軍は狭い灣内で自由なる行動をとることが出來ず、先づアテネ艦隊が左翼に於て敵の中堅フェニキヤ艦隊を破つたのを始めとして、ペルシヤ軍は完全なる敗北を見たのである。必勝を期して陸上から戦況を觀て居た王クセルクセスは、急遽アジヤへと逃れ歸つた。此の時テミストクレスは艦隊を送つてヘレスポントを占領し、又イオニヤ人を離叛せしめるやう主張したが、またもペロポネスス人の反對に會つて實行せられなかつた。一方ペルシヤ陸軍はテッサリヤへと退いて冬陣した。

(1) ペルシヤ軍の數に就いては、ヘロドツスは全數五百萬、其の中歩兵百七十萬(VII. 60)騎兵

八萬(VII. 87)と言ふ。クテシヤス(Ctesias)も矢張り八十萬以上と言ふ(23)。皆甚だしい誇大である。

(2) サラミス海戦に就いては、箕作元八博士の精細なる研究がある(史學雜誌、十九編、一一號、一二號、二十二篇、五號)。之によれば兩軍艦隊の数はギリシヤ側が三五〇隻位、ペルシヤ側が五五〇隻位で、其の間に非常な優劣はなかつた。なほ此の海戦の史料としては、自ら之に参加した詩人エスキルス(Aeschylus)の悲劇「ペルサイ」(Persai) (290以下)が最も重要である。テミストクレスが祕密の使をクセルクセスにやつて、ペルシヤ艦隊をサラミス灣に誘つたと言ふ、エスキルスの記事も事實であらうと考へられる。

テッサリヤに冬籠りしたマルドニウスは、やがて四七九年春南下して再度アッチカを荒掠し、ボエオチャに入つてプラテーエーの東に陣した。此處で海上のサラミスに當る陸上の決戦が行はれた。スパルタの攝政パウサニ阿斯(Pausanias)の軍略が効を奏し、ペルシヤ軍は完全に敗れて、マルドニウス自ら戦死した。ペルシヤ軍が敗走するや、ギリシヤ聯合軍はペルシヤの遺したおびたゞしい戦利品を分ち、神々に對して感謝した後、ペルシヤ側についたテーベ市を圍み、ペルシヤ側に立つた寡頭主義者を引渡させて、イス

## プラテーエーの戦

トムスで殺した。

プラテーエー戦の直後、レオチキダス(Leotychidas)の下に、デルス島に停つて居たギリシヤ艦隊はサムス島に進みミカレ(Mycale)岬に上陸して居たペルシヤ海兵と戦つて(陸戦)之を全滅せしめた。此の一戦によつて、イオニヤ獨立の基礎が置かれたのである。

## アテネの功績

以上の戦績を概観するに此の外夷撃退には、スパルタも非常の貢献を爲して居るけれども、精神的にアテネの態度が優れて居たことは否み得ない。(Herod. VIII. 144参照)。アテネが海陸兩軍の指揮權をスパルタに譲つたればこそ、聯合軍の活躍も可能であつたのである。ヘロドツスはアテネ市民權を與へられたのであるから、其の態度には、アテネ偏重の氣味もあらうけれども、彼が第七卷一三九節に述べて居る名言、即ちアテネが海上に於てペルシヤ艦隊を敗つて居なかつたならば、スパルタがいかにイストムスを堅く守らうとも、結局全ギリシヤはペルシヤの羈絆の下に立つに至つたらうといふ主張は、間違ひのない所であらう。

## ミカレの戦

サラミスの戦と同じ頃、西方のギリシヤ人は、カルタゴとエトルリヤ人とに對して輝やかな勝利を得た。カルタゴは六世紀の間、リビヤ沿岸イスパニヤ南岸に有力な植民を行ひ、ギリシヤ人の西進に對し、頑強な抵抗を爲した。フォケーヤ (Phocaea) 市がペルシヤの難をのがれるため、自分の建てたコルシカのアラリヤ (Alalia) に再度植民を送らうとした時、カルタゴはエトルリヤと同盟して之を阻止せんとし、五四〇年頃アラリヤの海戦となり、ギリシヤ側は敗れて下イタリヤに向ひ、エレヤ (Elea) 市を建てた。

(PB4B) 参照

然し五世紀初以來、シラクサのゲロン (Gelon) と其の舅アクラガス (Acragas) のテロン (Theron) は、僭主としてシシリ島のギリシヤ都市の大部に非常な勢力を振ひ、遂に有名なヒメラ (Himera) の戦(四八〇年頃)でハミルカル (Hamilkar) に率ゐらるゝカルタゴ軍に決定的勝利を得た。<sup>(1)</sup> 此の一戦の歴史的意義は、全くサラミスの戦やプラテーエーの戦に匹敵するので、時人が之をサラミスの役と同月同日に行はれたと信じた (Herod. VII. 166) のも無理はない。ゲロンの弟で其の後を繼いだヒエロン (Hieron) は、四七四年クメ (Cumae) 沖の海戦で、エトルリヤ海軍を全滅させ、エトルリヤ族の衰亡を促がした。

(1) 後世史家 (Diodorus. XI. 1. 4. Ephorus Frg. 111) の傳ふる所では、クセルクセスがカルタゴと同盟條約 (Synthekai) を結んで、同時にギリシヤ人を討たんとしたとあるが、是は事實では無いらし。五世紀の人で、而も下イタリヤのツリイ (Thurii) に移住したヘロドツスに依ると (VII. 165)、ハミルカルの出征は、全くテロンのためにヒメラ市から逐はれた僭主テリルス (Terillus) を後援せんが爲に来つたので、ペルシヤとの關係は無いのである。ただゲロンをしてギリシヤ本土の同盟軍に加はつて、クセルクセスに當らしめようといふ計畫は事實あつたのである (Herod. VII. 157-163)。之と對照するやうにペルシヤ、カルタゴ同盟説が捏造されたのではあるまいか。

## 第七章 アッチカ帝國と民主政治の流行

## 第一節 デルス同盟の成立とアテネの活躍

ペルシヤのギリシヤに對する攻撃戰が、大體四七九年を以て終了したと見ると、是から四三一年にペロポネス戰役が起るまで丁度五十年である。此の期間はいはゆるペンテコンタエチー(Pentekontaetie、五十年期の義)であつて、其の前半にはペルシヤに對するギリシヤの攻撃戰があり、又早くもスパルタ、アテネの間に干戈が交へられる等、決して平和の時代とは言ひ難いが、概觀すれば、空前の外夷侵入を撃攘し得て、ギリシヤ人の民族意識は燃え立ち、其の優越感は最も強く、<sup>(1)</sup>後年のコリント同盟に至るまで、未だ見ざる大きな政治的結合が完成し、一方ギリシヤ文化の最高潮に達せる時代である。たゞ前章の結末に述べたやうに、外夷撃攘に大功のあつたアテネの勢威が大に振ひ、從

『五十年期』の概觀

來ギリシヤの一等國を以て任ぜるスパルタを凌駕するに至つた結果、此處に融和し難き兩頭駢列(Dualism)を生じ、やがて両者が平衡を保ち難くなつて、かのペロポネス戰役となるのである。

(1) 外敵との戰の後のギリシヤ民族の優越感は、ロドッス(VII. 8—18)の、『クセルクセスの夢』の説話や、エスキルスの『ペルシヤ人』(584以下714. 743. 1003. 行)等に最も明瞭に窺はれる。

ミカレの戰に由つてイオニヤの獨立が復活した後、ギリシヤ人はペルシヤに隣接せる此の地方の同胞を保護せねばならなくなつた。然るにスパルタは其の傳來の主義が、<sup>(1)</sup>かかる事業に不適當であつたばかりでなく、其の頃同盟艦隊を指揮して東方に出動して居たパウサニヤス(Pausanias)が其の傲慢な態度に由つてイオニヤ人の反感を買つた結果、此の同胞保護の事業は、當然新興アテネが引受けることとなつた。かくてアリスチデス(Aristides)の力によつて、四七八—七年にはゆるデルス同盟(League of Delus)が成立した。同盟加入諸市は皆自治獨立であつたが、原則としては各市とも戦艦を提供するこ

デルス同盟の成立



ととし、それができないものは献金 (Phoroi) を以て之に代へ、献金から成る共同資金は、之を同盟の本部なるデルス島に保管した。此の同盟は平時も艦隊を備へ、定期に會議 (Synhodos) を開いたので、戦時のみに活動したペロポネソス同盟とは其の性質が全く異つたものであつた。

(1) スパルタが此の際イオニヤ諸市に、ギリシヤ本土に移住するやうに忠告したことは、同國傳統の態度 (一一一頁) を物語つて居る。パウサニヤスは一旦スパルタ政府に召喚せられた後、個人として、小アジアに渡り、ペルシヤと通じて居たが、發覺して故國に歸り、ヘロットを煽動して政權を握らうとしたが失敗し、遂に一神殿に閉ぢこめられて餓死した。吾々は此處にもヘレネスの個人主義的性格の一例を見る。

ペルシヤ戦役後アテネでは、當然テミストクレスが最も聲望があつた。彼の目的は専らアテネ市をギリシヤに於ける覇者とするものであり、其のためにはスパルタとの衝突をも辭しない覺悟であつた。<sup>(1)</sup> 當時ミルチャデスの子キモン (Cimon) も、其の財力によつて人民を買収し、人望を集めて居たが、彼は其の貴族的立場からテミストクレスに反對し、スパルタとの協調を主張して居た。テミストクレスは、其の個性と、貴族に對する

テミストクレスの聲望と其の放逐

キモンの活躍と其の追放

反感も手傳つたらうが、その聲望の餘りに大なるため市民の嫉視を受け、四七〇年親ペルシヤ主義 (Medismos) の疑ありといふ名義で、オストラキスマスに會つてアテネから逐はれた。そこでキモンの主張が始めて實現する番となつた。彼は前にトラキヤ方面に出勤して、デルス同盟を擴張したが、今度は東方に出勤して、パンフィリヤのエウリメドン (Eurymedon) 河口に於て、ペルシヤの大艦隊を全滅し、カリヤトリキヤとを同盟に入れて歸つた (四六〇年代の半頃)。其の後スパルタに於ては、ヘロットとメッセニヤ人とが蜂起し、スパルタは獨力で鎮撫しかねてアテネに援兵を乞ふた。スパルタ好きのキモンは、直ちに之に應じペロポネソスに出勤したが、スパルタはアテネの勢力に危惧を感じ、折角やつて來た援兵を辭退して歸國させた (四六一)。アテネ市民は、此の無禮なスパルタの仕打を憤り、キモンに責を負はせ、今度は彼をオストラキスマスにかけて追放した。

キモンが援兵を率ゐて出勤して居る間に、アテネに於ては急激な民主主義的改革が行はれた (四六二年)。サラミスの海戦は實にアテネの第四階級の力で戦はれたもので、さ

きにアリスチデスの豫想したやうに(一四一頁)、必然彼等の社會的地位を向上させずには置かなかつた。唯、ペルシヤ戦役以來、アテネ市民の指導に與かつて力があり(ATH. Pol. 23)、常に保守的態度を持して來たアレオパゴス會議が、一切の改革の阻止者であつた。此處に於て急進派の頭エフィアルテス(Ephialtes)<sup>(2)</sup>はブレー、民會に於て同會議を彈劾し、遂に其の政治的權力を奪ひ、たゞ重罪に對する判決權のみを残し與へ、今後一切の司法政治問題は民會(Ekklesia)、五百人會議(Bule)、ヘリアイヤ(Helisia)<sup>(3)</sup>に委ねらるゝこととなつた。エフィアルテスは四六二年殺害されたが、その後六年、四五七年から九人のアルコンは何等の豫選なしに抽籤され、ゼウギタイ(農民級)からも抽籤せられることとなつた。

キモン失脚後もアテネはペルシヤに對する攻撃戦をつゞけ、當時ペルシヤに叛いて獨立戦を起したエジプトのイナルス(Inarus)の招きに應じ、艦隊を送つて、彼とともにメンフィスを圍んで居た。

一方キモンのスパルタ後援が失敗して後、アテネはスパルタとの從來の同盟をきつぱ

り斷絶し、やがて兩者の間に干戈が交へられるに至つた。いはゆる第一回ペロポネスス戦役である。最初アテネ軍はタナグラ(Tanagra)で敗れたが、オイノフィタ(Oinophytas)の戦にポエオチャ軍を撃破して、中部ギリシヤに對する勢力を確立した。同じ頃アテネの商賣仇であつたエギナ(Aegina)市も、アテネに攻圍され、デルス同盟に加入させられて、重い献金を課せられた。又アテネの商業を西方に發展せしむるために、ニセーヤ(Nisaea)(メガラ港)、トロイゼン(Troizen)が占領され、在來コリントの勢力範圍だつたイオニヤ海、コリント灣方面の諸地にアテネの勢力が植付けられた。然しエジプトでは事情が異り、四五年ギリシヤ軍はメンフィスに於て全滅の運命に會ひ、アテネの海軍も衰へたので、デルス同盟は不安を感じ、其の共同資金をデルス島からアテネに遷さねばならなかつた。キモンは四五年追放から歸つて、その主義に従ひ、先づスパルタと五年の和約を結び(此の時スパルタはアルゴスと三十年の和を結んだ)三度艦隊を率ゐてキブルス島に向つたが(四四九)、島のキチウム(Citium)市を攻圍中に病死した。

キモンの死に依つてアテネの政權を完全に掌握したのが、有名なペリクレス (Pericles) である。彼はエフィアルテスと共に、アレオパゴスの權力剝奪に與つて居たらしいが、民黨の領袖としての活動は比較的小さかつた。エフィアルテスの死とキモンの追放は、漸く彼に擡頭の途を開いた。彼の母はアルクメオン家に屬し、彼自身貴族的雰圍氣の中に育つたが、彼の伯父クリステネスの感化は、遂に彼をして典型的な民黨首領たらしめた。キモン追放の後、アテネがキモン流の「民族主義」からエジプト干渉を行つて失敗して以來、ペリクレスはスパルタとペルシャとの兩者を敵として戦ふことの不可なるを達觀し、キモンの死後アテネ艦隊が、キプルス島のサラミス市に於て、ペルシャ艦隊に勝つや、アテネ人カリヤス (Callias) をスサ (Susa) にやつてイオニヤ叛亂以來のペルシャとの永い紛争に最後の結末を附けた (四四八年)<sup>(4)</sup>。一方ギリシヤ本土ではアテネ軍がコロネヤ (Coronea) の戦にボエオチヤ軍に破られ、中部ギリシヤに對する覇權を失つて後、ペリクレスは平和の確立がアテネ市に有利なるを思ひ、多くの利益を讓つて、四四六年スパルタと向ふ三十年に互る和約を締結した<sup>(5)</sup>。

ペルシャ及び  
スパルタとの  
平和成立

- (1) 彼はペルシャ軍退却後、直ちにアテネ市及びピレウスの城壁を起工しツキヂデス (T. 30) によれば、之を迅速に完成するために、個人の家屋等までも利用した。此の事實は最近の發掘で確められた。スパルタが之に抗議するや、彼は自らスパルタに赴き辯解した (同書、91)
- (2) Ath. Pol. 25 に依ると、テミストクレスが之に参加して居るけれども、彼は四七〇年後アテネに留まつては居らぬ。此の記事は誤であらう。
- (3) ヘリアイヤ會は各フィレから六百人づつ、都合六千人が抽籤され、其の中五千人が五百人づつの十の部會に分れ、裁判(主として控訴)を扱ひ、餘りの千人は豫備員であつた。
- (4) 此の條約の内容は、ペルシャ海軍はケリドニヤ (Chelidonia) 島、及びキアネヤ (Cyanea) 島より西に來航せぬこと、海岸のギリシヤ都市から一日騎程の處以上に海岸に近づかぬこと等であるが、ツキヂデスには見えず、四世紀のインクラテスの Panegyricus 128 (三八一年發表) に初めて見えるので、アテネ賞讃のための作り事と言ふ論が、十九世紀以來盛であつたが、今日では考古學的發見等も與つて、實在説が有力である。
- (5) 之に由り、將來兩國の係争は、仲裁を判に委ぬること、互に他の同盟者を自己に引入れぬこと等が定められた。アテネはメガラ、トロイゼン、アケーヤ諸地を返還した。

## 第二節 ペリクレス時代

ペリクレスの政治

「スパルタとの平和は僅か十五年ほか保たれなかつたが、此の十五年は、アテネにとつて最も幸福の期間であつた。上古文化の最高潮を意味するペリクレス時代とは、嚴密に言へば此の十五年を指すのである。貴族主義のツキヂデス(Thucydides) (史家とは同名別人)を追放して以來、彼は毎年軍指揮官(Oberstrategos)に選ばれ、國民の信頼を受けて民會を指導した。彼の施設は伯父クリステネスのそれに一步を進め、可成り急進主義であつた。前に述べたやうに農民級にアルコンとなる途を開いたのも、陪審者、其他の役員に、日當(diatra)支給を創めたのも彼であつた。やがて此の主義が進められて、市民の芝居見物に對する手當(theorikon)や、民會への日當(ekklasiastikon)まで支給さるるやうになつたのは市民の依頼心を助長せしめたのみで、決して好結果を齎さなかつた。然しペリクレスは決して五世紀末のデマゴゴス(人民指導者乃至煽動政治家、二一〇頁)等のやうに無制限の民主主義に依つて、有産者の利益を侵害しはしなかつたこ

とや、彼がよく人民を指導して行つた結果、其の政治が君主政治的色彩を有したことはツキヂデスの明に證言する所である。<sup>(2)</sup>ただ此の民主主義の恩恵に浴したものは、極く少數のアテネ市民に過ぎず、人頭税を拂つてアッチカに住みアテネ商業のために貢献の多かつた非市民メトイコイ(metokoi) (共住者の義)や、工業のために缺く可からざる勞力を供した多數の奴隸<sup>(3)</sup>は、何等是等の利に與らなかつた。民主政治が進むにつれて、アテネ市民権が次第に尊重せらるゝやうになり、四五年遂にペリクレスは父母ともアテネ市民から生れたものでなければ、市民であり得ないといふ規定を設くるに至つた。<sup>(4)</sup>アテネ民主政治を論ずる者は此の狹量な排他主義の一面を見落してはならぬのである。

(1) 陪審者への一日ニオボロスの俸給(Diobelia)は Ath. Pol. 27 に依ると、ペリクレスがキモン<sup>(1)</sup>の富に對抗して人心を收攬する手段として創めたとあるが、事實は下層級の政治への參與から來た必然の結果であらう。なほ theorikon を創めた人は Ath. Pol. 28 に依れば、デマゴゴスのクレオフォン(Cleophon)とも考へられるが、Plutarchus. Pericles. 9 には、ペリクレスが創めたとある。何れが正しいか、又いつごろは始められたか不明である。前

者はペロポネス戦役中に *diobelia* (ニオボロス) の支給をはじめて居る。 *ekklasiastikon* は五世紀末、四世紀初の頃、政治家アギリリウス (*Agryrius*) が民衆の民會への出席率を高める爲に一日一オボロスを支給せるにはじまり、後三オボロスに高められた (*Ath. Pol.* 41)。

(2) *Thucyd.* II. 65. 5. 『彼(ペリクレス)は全く金銭もて動かさるゝことなく、人民を自由に抑へ、民衆に導かれると言ふよりも自ら民衆を導いた。』同じく 65. 6. 『名義上は民主政治が起つたが、事實は第一人者による支配となつた』。

(3) アテナエウス (*Atheneaus*) に依れば (VI. p. 272B)、『ファルムのデメトリウス (*Demetrius Phalerus* 三二八頁) の時 (317-307 B. C.) のアッチカの國勢調査に、二萬一千人の市民、一萬人のメトイキ、四十萬人の奴隸數を得たと言ふ。ペロッホの研究によると、奴隸の數を除いて、此の所傳は大體正しい。奴隸は五世紀半に約十萬位であつたと言ふ。四三二一年頃のアッチカ全人口は二十三萬五千人位で、アッチカの面積は二千六百四十七平方キロメートル故、人口密度は一平方キロメートルにつき八十九人に當る。當時の全ギリシャ (十一萬四千五百平方キロ米) の總人口は三百五萬一千人、奴隸は其中百萬五千人、平均一平方キロ米人口二六人と推定せられて居る。此の人口が四世紀後半迄漸次増加し、約四百萬人に達し、是から増加が止り、次第に減少する (一八一頁、一九九頁參照)。(Baloch: Die Bevölkerung-

*ung der griechisch-römischen Welt* 1886 Leipzig)。<sup>1)</sup> なる Meyer は四三二年に、アッチカの自由民を約十七萬人、奴隸を大約十萬人餘と算して居る (*Forschungen* II. S. 149 ff)。<sup>2)</sup> なるほ經濟生活に於ける奴隸の役割りは餘り誇大して考へられてはならぬ。工場、及び鐵山に於ては、勿論多數の奴隸が使用せられ、其の地位は丁度工業資本主義時代の賃金労働者に當らう。然し決して誰でもが奴隸を有つて居た譯ではなく、様々の自由な労働者、仕事師 (*banauoi*) があつて餘り豊かでない生活をして居たことは、ペリクレス時代の建築が此等の工人に職を與ふるために起されたのもわかる。(Plutarchus: *Pericles* 12)。<sup>3)</sup> 詳しくは次章參照。

(4) アッチカ人の偏狭は外國人に對してばかりでなく、自國の恩人に對しても現れた。ミルチアデス、テミストクレスの追放の如きは此の事情を物語る。アテネの民主政治がソロンよりペリクレス迄、有力な地主貴族の指導の下は大過なく進んで來た事は注目を要する。此の傾向は一部は今後も維持され、將軍 (*strategos*) は地主階級から、高級財務官は矢張ソロンの第一級から限つて選ばれ、第四級は依然アルコンにはなれなかつた。然しプラトー (*Polit.* VI. 7) によつて、其の機嫌を測る事の難い「犬野獸」にたとへられた民會 (*Ecclesia*) には原則として成年 (滿十七歳以上) にして、權利喪失 (*Atimia*, 刑法的犯罪等による) にふれぬ一

切の市民が參與しベリクレスの死後は、其の決議は屢々衆愚政治の弊を出した。例へばペロポネッス戰役中ミチレネ人處罰に對する決議 (Thucyd. III. 35 ff.) やアルギヌーサエ海戰後 (二二三頁) の將軍死刑の決議 (Xenoph. Hellenica I. 7) の如きである。なほ第十章參照。國費による觀劇、祭典は民主主義の徹底せるものであるが、其の一面には富裕な市民が輪番に其の費用を負擔した (leiturgia, liturgy 公共への奉仕の義)。三段櫓船も亦金持の出資により作られたが、民主政末期になると次第に此の制度が悪用せられ、献金を強要し又は職業的三百代言 (Sykophantes) が現れ、金持ちを強訴してやたらに莫大な罰金を課する事が行はるゝに到つた。(Xenoph. Oeconom. II. 6 Isocr. Antid. 159 ff. etc.)

吾々はアテネ市の民主政治が如何にして可能であつたかをよりよく理解する爲には、同市の財政を知らねばならぬ。此の點に關して讀者はアテネ民主政治と近世デモクラシーとの著しい相異を見出すであらう。即ち先にも觸れた様に(一〇〇頁)原則として自由民は人頭税、家屋税、地租等から免れたのである。随つてアテネ市政の財源は凡そ次のやうであつた。

(a) 平時の收入 (Proshodon) — (1) 公有の土地、家屋の賃貸料。(2) 鑛山採掘權の私人への

拂下げ、その採掘額の二十四分の一の徴收。(3) 港に於ける輸出入品への五十分の一税 (Pentekoste) 其他。市場 (Agora) に於ける營業に對する税。(4) 外人のアッチカ居住者 (Metoikoi) に對する保護税 (Metoikion)。(是等の諸税の取立てには多く請負制 Farming system が行はれた。)(5) 裁判料金 (一六五頁參照) 及び罰金。(6) 市民からの財産沒收。(7) 最後には是等の何れにもまさつて遙かに重要なのが、同盟市の献金 (Phoroi) であつた。是等の總計はクセノフォンによれば (Anabasis VII. 127) アテネの盛時に當り、年一十クレント (約二百四十萬圓) を下らなかつた。以上の外に前にも觸れた富人の名譽の奉仕 (Leiturgia) があり、演劇、體育競技等の費用が支辨された。(Choregia, Gymnasiarchia 等)。

(b) 非常時には以上の原則を破つて財産税が課せられ、富人は三段櫓船製造の爲のレイツルギヤを引受けねばならなかつたのである。

(詳)へは August Boeck の名著 "Die Staatshaushaltung der Athener, 3 Aufl. 1886 S. 366 ff." を看よ。

## 同盟市の献金

さて以上で明かな如くアテネの民主政治を可能ならしめたものは、奴隸、メトイキの他に、正しくかのデルス同盟の諸市であつた。諸種の税を免ぜられた上、多くの特典に浴したアテネ市民は實に多くの同盟諸市民の上に立つ特權階級であつた。今その次第を考察するに、元來デルス同盟の規定に依つて、多くの都市は艦隊供給よりも献金を選んだ結果、自然軍事的行動はアテネ市の専業となつた。同時にペリクレスもテミストクレスに倣ひ、アッチカ帝國建設を重要な目的として行動した結果、やがてキウス、レスブス、サムス三市の如く依然艦隊を有して居る諸市以外は、全く獨立を失ひ、アテネの附庸者となり、アテネに民主政が完成するや、同盟市にも此の政體が強制せられ、たゞ上述三市のみ在來の寡頭的組織を維持した。四五年同盟資金がデルス島からアテネのアクロポリスに遷されたことも、アテネの實權を高めるに頗る効果があつた。其の結果女神アテネが同盟の守護神となり、毎年の献金の六十分の一が、此の女神のために留保せられ、遂にはアテネ市は同盟献金の使途について、責任を負はぬ事となつた。かくて献金はアテネ一市の當然な、しかも最も重大な財源と考へらるゝに到つたのである。なほ同盟市

の多くには、アテネのクレルコス(七四頁)や、監督官(Episkopoi)が送られた。やがて同盟諸市に同情のあつたツキヂデス(一五八頁)が追放せられるや、ペリクレスは同盟諸市を五つの區域(イオニヤ、カリヤ、ヘレスポント、トラキヤ、島嶼)に分ち、ギリシヤ史空前の政治的大結合を完成したのである。

アテネの司法  
權獨占

此のアテネ中心の政治的統一主義を、最も明瞭に物語つて居るのは司法の問題である。アテネはソロン以來のアッチカ法を同盟諸市に弘め、更に同盟諸市に起つた司法的事件は、悉くアテネの陪審廷に提出し、黑白を決するやうに定めた。陪審者は多く下層の無教養者から成つて居り、しかも彼等の意嚮は、單に参考とせらるゝに止まらず、それ自身最後の判決を爲すのであつたから、此の制度が同盟諸市を怒らしめたことは想像に餘りある。

然しアテネの專權は、決して政治方面に止まらず、經濟方面に於ても著しいのである。同盟諸市を以て一つの大經濟地域を結成するために、アテネの度量衡が強制せられ、遂には同盟市の貨幣鑄造權もアテネに取上げられた。アテネは南部ロシヤからの穀物輸送

アテネの經濟  
的壓迫

を支配し、同盟者間への分配額を定めた。其の他市場獨占と言ふ如き暴擧も行はれた。<sup>(2)</sup>かくて七世紀以來のイオニヤ商業は昔日の面影なく、全くアテネに壓倒された(次章參照)。殊にペリクレスはアテネ商工業の發展に留意し、彼の黒海航海や、レオンチニ(Leontini)、レギウム(Rhegium)等の下イタリア諸市との同盟、ツリイ市の建設(四四四)なども、皆此の目的に出でたものである。其の結果はアテネ商工業の異常なる飛躍となり、其の港ピレウスはミレツスの技師ヒッポダムス(Hippodamus)に設計せられ、全ギリシヤ人世界の船舶を集むるに至つた(次章參照)。

アテネに對する  
離叛の企

デルス同盟の成立は、エーゲ海の航行を安全ならしめ、同盟者に利益を與へたことも二三に止るまいが、アテネの利益獨占主義は到底彼等の堪へ得る所で無かつた。それで同盟成立後十年にして、既にナクスス島が叛抗を試み、其の後タスス(四六五年)、サムス(四四〇)、レスブス島(四二八年)等相次いで離叛したが皆鎮壓された。此等同盟者を満足させるためには、勢ひローマの行つたやうに、アテネ市民權を彼等に普及せねばならぬが、それは到底傳統的な「ポリス主義」と相容れる所で無かつた。都市國家と帝國主義

とは兩立し得るや否やは、ペロポネスス戦役と、四世紀の政治的波瀾との苦い經驗の後、はじめて識者の念頭に浮んだ問題であつた(二四二頁參照)。

- (1) 毎年の献金はアリスチデスによつて四六〇タラントン(約百萬圓)と定められ、ペロポネスス戦役のはじまるまで、大體毎年此の額が納められた。*Plutarch's obs.*
- (2) 偽書であるが、クセノフォンの作と傳へられる「アテネ人の憲政」は、ペロポネスス戦役の初期に、寡頭主義者が民主政治を縦横に批判せるパンフレットであつて、いはゆるデモクラシーのプロフィルを描いて居るので興味がある(I. 16. II. 12)。なほ此の小篇は四世紀に澤山出た政治的パンフレットの最も早きものとして注目に價する。

### 第三節 民主政治の流行

吾々は、前節に於てアテネの民主政治完成の次第を稍詳細に辿つて見た。アテネに就いては多くの古典が詳しい記事を殘してゐるから、典型的な民主主義化の過程を跡づけ得た譯であるが、是程明かには分らず、又民主主義が是程に徹底はせずとも、民主主義的變革はペルシヤ戦役後ヘラスの多くの都市に行はれたのである。過渡期の章に述べた

民主政治流行  
の原因



やうに、七、六世紀以來、地主貴族の勢力は新興の商業資本階級の爲に次第に崩壊しつつあつた。丁度此の際ペルシヤ戰役といふ國民的事件が起つたことは、頗る重大な意味を有つて居た。一體世界史上に多くの類例を見るやうに、そしてアテネの場合が明かにさうであつたやうに(一五三頁)、戰爭といふものはその終了後、國防の主力であつた下層階級の勢力擴張を伴ひ易いものである。そしてギリシヤの場合にはペルシヤといふ空前の勁敵撃攘から生れた自由の精神も與かつて、此の世紀は宛然デモクラシーの時代と化したのであつた——勿論此の運動は各地に於ける寡頭主義的舊勢力との苦闘を味はねばならなかつたが。政治のみでは無い、後章に述べる文人、哲人等の思想にも自由主義、民主主義的傾向を多分に認め得るのである(一八七頁参照)。前章に於てアテネの民主主義を説いたから、本節ではギリシヤ人世界の一般の状態をひろく觀察しよう。

先づ第一に考ふ可きはデルス同盟諸市である。此の中、小アジア沿岸諸市ではペルシヤの支配が除かれ、是に支持されて居た僭主制(一三一頁)が倒るゝや、諸市は自發的に、又アテネに強制されて、必然的に民主政治へと移つたのである。其他のデルス同盟諸市

デルス同盟諸市  
の民主化

も、亦覇者アテネに倣つて民主政に進んだ。

ヘラス本土の諸地に於ては、未だイオニヤ地方に社會的、智的進歩が無く、殊に寡頭主義の本山とも言ふべき(一一二頁参照)スパルタがひかへて居る爲、デモクラシー化は多くの困難に遭遇した。然し此の總本山スパルタの足下にも民主化的變革の動搖が起つた。ペルシヤ軍撃攘に際し、プラテーエーの戰に働いたヘロット等が、自己の餘りにも不遇な社會的地位の改善を要求したのは當然のことであつた。既にパウサニヤスが彼等を後援して、自己の野望實現を期したことは前に述べた(一五二頁)。四六四年スパルタに大地震起り大被害を與ふるや、かねて不満をいだけるヘロット——殊にメッセニヤのヘロットは、スパルタの支配者に對して一齊に反抗を起した。彼等はイトメ(Ithome)の山城に籠つて持久戰を試みたが、訓練されたスパルタの武力に抗し得ず、四六一年つひに屈服し、その計畫は水泡に歸した(一五三頁キモン出兵の條参照)。此の事件は民主化運動の挫折せる最もよき例であり、此處にもスパルタはアテネとの好き對照を提供して居る。

スパルタに於けるヘロットの一揆

其の他のヘラス本土諸市

第七章 アッチカ帝國と民主政治の流行

140

ボエオチヤのテーベに於ても、四七九年プラテーエーの戦の後、ペルシヤと結託せる寡頭派が倒れ、民主政治が是に代つた。其の他五世紀の政體を知りうる僅かな諸市を擧げれば、アルゴスでは早く王の権力が制限されて居たが、此の頃は民主政となつたらしく、此處から民主化運動は近隣のアルカヂヤに弘まつた。エリス市も亦此の頃古いフィレ制を十ファイル制に改めて民主政治に移つた。

キレナイカのキレネに久しくその勢力を振つてゐたバツス(Battus)家も、亦此の時勢には抗し兼ねた。既に六世紀の半、バツス三世の時に民主々義的改革が行はれたが、この世紀の半に入り、エジプトの叛亂により、在來のペルシヤの後援が絶たれ、此の最も永續した王家も、遂に民主政に地を譲つたのである。

眼を西方に轉ずれば、此の方面にも東方に劣らず社會的變革の熾なのを見るのである。シシリに於ては外敵撃攘に大功のあつたゲロン、ヒエロン一家の僭主政治も、外患一度去り、又同家内に内訌生ずるや、漸く動搖の兆を示し、先づアクラガス、ヒメラに民衆の反抗が起り、延いてかのヒエロンの没(四六六)後、シラクサに民主政治の實現を

キレナイカの事情

シシリに於ける民主々義の流行

南イタリヤ地方

見るに至つた。然し其の後も政局の安定無く、市民チンダリダス(Tyndaridas)のやうに、僭主とならうと試みる者もあつたので(四五四頃)、同市ではアッチカのオストラシズムに眞似たペタリスモス(Petalismos)——オリヅの葉(Petalon)に危険人物の名を記して投票する放逐法——を用ゐて、僭主の再現を防がねばならなかつた(Diod. XI. 86-87)。南イタリヤ地方では、レギウムとタレンツムとが同盟して、同地方の原住民ヤビギヤ人(Japyges)を討つたが大敗を蒙り、此の事件が兩市の僭主政、寡頭制崩壞の因となつた。キメ(クメ)(Cumae)市でも僭主政が仆れ、ロクリ(Locri)市を除いてイタリ諸市は全く民主政の風靡する所となつた。

然し吾々は是等の民主政治の利益を享けた民衆の下に、更に抑壓された第三階級の存在することを忘れてはならない。それは此等地方の原住民であつて、その地位はスバルタのヘロットと大差が無かつた。多年の抑壓を忍んで來た是等の原住民——南部イタリ地方のルカニヤ(Lucania)人、サムニウム(Samnum)人、ヤビギヤ人、シシリ原住民等——は時代の風潮に乘じ、前述のヤビギヤ人のタレンツム人に對する勝利に刺

南イタリヤ、シシリーの原住民の一揆

第三節 民主政治の流行

141

戦されて、干戈を執つて起つた(四六〇—四四〇年頃)。殊にシシリ島では、メネー(Mene)の王ツケチウス(Ducetius)を戴いて大規模に事を起し、一時獨立の國家を形成したが、四五〇年頃大にシラクサ軍に破られ、ツケチウスも亦死するに及び、此の大反抗も水泡に歸した。

か様にペルシャ戦役後の半世紀は、其の原因は勿論様々であり、その成功と失敗も勿論、處によつて異つたとは言へ、一般に低い階級の政權獲得運動が著しかった時代として、之を把握することが出来よう。

## 第八章 五世紀の經濟生活

普通「ギリシヤ文化」の名を聞けば、「悲劇」と「彫刻」と「アクロポリスの莊麗な建築」とを思ひ泛べる者が多からう。或は、ギリシヤ人が多數の奴隸を使用して、有閑生活を樂んだと言ふことも説かれて居る。然しギリシヤ人とても、決して悲劇と大理石の塑像のみで生活して行つた譯ではなし、有閑生活を思索に捧げ得たのは、一部の限られた人士であつた。其處にも亦近代と同じく生活苦に喘ぐ人があり、營利の爲の競争が盛であつた。殊に其の社會には現代に見られぬ奴隸と言ふ被抑壓階級が、當然の存在と見做されて、不可缺の社會構成要素を爲して居た。本章にはギリシヤ人の實際生活たる農、工、商業をざつと一瞥し、又奴隸の事にも聊か觸れて置くが、是によつて讀者のギリシヤ史に對する理解が少しでも奥行きのあるものとなれば幸である。此の方面に關しても史料はアッチカ關係のものが主であり、その上四世紀の記事が多く残つて居る。然し是を用

農業

ゐてその前世紀にも大體同様の生活が行はれたと類推することができよう。

先づ農業に就いて觀れば、ギリシヤの地は農業にとつて決して好都合ではなかつた。山脈が縦横に走つて沃野が乏しかつた爲、食料の自給自足は一般に困難であつた。商工業で立ち、人口が稠密であつた地方では、特にさうであつたので、黒海沿岸や、シリイ其他からの輸入される穀物に頼らねばならなかつた(後述)。四世紀末に年四十萬メヂムノイの穀産があつたと考へられるアッチカも、その例に洩れなかつたが、是には耕作法が依然舊態を脱せず耕地の半を休閒地(Neos)とする二圃制度が多く行はれたこと(Xenophon: Oeconomicus XVI)も一因であるかも知れない。三圃制度も時には行はれたらしい。穀物の産額はか様に自己の需要にも充たない程であつたが、果樹の栽培は多く奨励され、就中葡萄、オリイヴ、及び無花果が重要な農産品であつた(Xen. Oecorom. XIX 参照)。アッチカのオリイヴ、イオニヤの葡萄酒はともに重要な輸出品を爲して居た。林業はマケドニヤ、トラキヤに盛で、アテネの船材も此の方面から取り寄せられた。羊毛生産ではアッチカが有名であつたが、其の他エトリヤ、アカルナニヤ、アルカヂヤ

のやうな山地にも多く行はれ、養蜂業もアッチカのヒメツツス(Hymettus)山方面をはじめとしひろく各地に行はれた。

是等の農産はいかにして生産せられたか? テッサリヤ、ラコニヤ等には、非常な大地主が存在したけれども、一般には小農が主であつた。彼等は田園に住み、自己の家族、及び時には此の外一、二人の奴隸の勞働によつて家計を立て、行つた。其の他小作及び奴隸による經營者が擧げられる。後者はアッチカ其他に於て、自らは都市内に住み、可なり多數の奴隸によつてその農地を耕作させるものであつた。奴隸等はその中から選ばれた監督により取締られた。農業禮讚者の哲人クセノフォンは、その著『家政家』(Oeconomicus)で、斯様な農業經營法を説いて居るが、同書(XX)によると、アテネのイスコマクス(Ischomachus)といふ者の父は、荒蕪せる土地を廉價で多く買ひ入れ、是を改良し一部を轉買し、他を自ら經營して巨利を得たと言ふ。斯様な荒蕪地の出たのは、一つにはアッチカの農業が小規模經營では餘り有利でなかつた爲とも思はれる。現に國家は穀物を廉價に輸入するに急で、決して内地農産の價格低落を顧みなかつた。兎に角吾々はイスコ

奴隸による經營